の目標として仰ぎ見たものであらう。然るに大正八年秋の暴風の際樹幹に大龜裂を生じ之が爲め遂に枯死するに至り、大正十二年その幹を伐倒してしまつた。實に惜しいことである。

後大正十年三月二十一日右老松の跡纒として枯株の東方四尺の位置に一本の若松を植えた。高さ七尺幹の太さ根元徑四寸のものである。寄進者は串本青年會で、同會幹部數名の手によつて植付けたものである。

第三節　名物名產

一、稻村亭

「串本に亞米利加から流れて來た家がある」といはれる、その「稻村亭」は當町八百七十九番地に在る神田清兵衛の邸宅である。世に之を「新屋舗」と呼ぶ。現在の地所は元方言「袋田」と稱する水田であつたのを嘉永五年壬子候經の節神田清右衛門直堯が救濟の目的の下に人夫を使ひ海岸の砂を運んで埋立てたものである。新屋敷の名は蓋し是から出たのである。

「稻村亭」に關しては、杉村楚人冠(廣太郎)著「へちまのかは」に載つてゐる左の章は最もその要を盡してゐるから左に之を轉錄しよう。

「串本の稻村亭」　杉村楚人冠

串本の神田家には、亞米利加から流れて來た家がある。名けて「稻村亭」といふとのことだ。夫れ面白いと、僕は神田清右衛門君を案内に煩はして見に出かけた。神田家は紀州風指の豪家で、串本に數多い一家一門の神田姓の中で、此の清右衛門君の家が其の總本家である。清右衛門君年齡六十左右、でッぷりと太つた赤ら顏の人で、一寸見ると極めて無愛想だが、何かして莞爾と笑ふと、顏中一面に無限の愛嬌が湛へる所、何處やらにアヲイアンの俤がある。先生中々の企業家で、嘗て神田汽船會社を起して、大阪商船會社に對抗したこともあつたが、今は紀伊水產會社を經營して、盛に捕鯨事業をやつてゐる。牧村眞氏一派の捕鯨會社の合同論には、清右衛門老人大の反對で、何でも大會社は費用許り嵩んで、到底小會社の小心翼々事に從ふとは、同日の談でないとの論だ。

頼て稻村亭へ着いた。亭は新宅と唱へて先代の隱居所に充てゝゐた家の、奥座敷にしつらへた八疊と十疊の二室である。――此處で清右衛門君から、稻村亭棟木の由來と言つたやうな講釋が始まる。

今から凡そ四十年ほど前、串本から程遠からぬ有田村の稻村の海岸の岩の上に、途方もない大きな材木が一本大波に打ち寄せられた。折ふし通り掛りの漁師何がしといふのが、目早く見付けて拾ひ取つたが、長さ二間の切口一間もある大木。轉がした端に人が立つと、丁度頭と木がすれ〳〵になつたと言ふ。四方は一面に蟲に蝕はれ水にさらけて、切口なそは丸くさゝくれて了つてゐる。何十年海の中に浸つてゐたものとも見當がつかぬ位であつた。

拾ひ上げた後諸方から大分買手がついた。所で、其時から二十年程前、稻村に大饑饉のあつた折、神田家が其の倉庫を開いて盛に救恤を行つたことがある。漁師は之を德として、せめては斯る折にこそ、其の恩誼の萬一に報いんものと、一切の買手を壓く斥けて、此の珍らしい大材木を惜氣もなく無代で神田家へ贈つた。神田家が饑饉を救つた心掛もゆかしいが、之を覺にてゐて、其の日暮しの貧しい漁師が、慾を離れて之に報いんとした心掛は、尙以てゆかしい。惜むらくは其名を聞き洩した。

神田家では、折角の好意と喜んで此の贈物を納めたが、此の邊にはこんな大きな木を挽くべき大鋸もなければ、木挽も居ない。假に人を大阪に走らせて、急に別仕立の鋸を拵へさせるやら、仕事に慣れた木挽を雇い集めるやら、やつさもつさ大騒ぎをした末、愈々此の木を挽き割つて見ると、驚いた――今迄は水に蝕はれて薄汚い材木とのみ見たものが、割つて見ると、中は幾十年の間水に浸されて、水汁の全く抜けた亞米利加のレッド、ウッド、さながら鼈甲の樣な色に光つてゐた。

神田家の人々は驚喜した。夫れから急に串本の濱に長さ二間に餘る大風呂を沸いて、挽き割つた材木を一々之で煮て、鹽出しを行つた。何分永い間潮に浸つてゐたことゝて切口から潮が吹いて持て餘したといふ。鹽出しがすむと、木は堅い

し、色は美しいし、寧そ記念の爲に、此木許りで家を建てたらば何だらうかと云ふ議論起つて、遂に之に決して、此の稻村亭が出來た。――と清右衛門君は語り終つたのである。見ると、成程八疊十疊の二室は桂梁の類より、襖障子は言ふも更なり、此の室で使ふ衝立、屏風、煙草盆に至る迄、盡く此の木一本で作られてゐる。世にも珍らしいものだ。

此の木が何の樹だか、何處から來たか、何百年經つたものか丸で分らぬ。初は色に依つて、紫枋樹と鑑定したものもある。印度から流れて來たものと言つた者もある。レッド、ウッドと見たのは、矢張り神田家の一門で、今東京ユニテリアン協會にゐる神田佐一郎君の鑑定である。成程、レッド、ウッドとすれば、カリフチルニアの森林から、太平洋をふらり〳〵と流れ渡つて來たものとの見當はつき易い。

二、應擧、蘆雪の名畫

錦江山無量寺は禪宗臨濟宗で串本に於ける唯一の寺院である。元は袋にあつたが寶永四年の海嘯の爲めに浚はれて仕舞つた爲舊記の殘るものは一つもないが爰に大に天下に誇るべきものが一つある。それは同寺に保存してゐる應擧及蘆雪の名畫である。一體此熊野の涯にどうしてこんな名畫があるかといふに、その謂れは次の通りである。

寶永の海嘯から百年に近い寛政の末の頃、京の東福禪寺で修業をしてゐた若い僧に愚海といふのがあつた。ふとした事から同じ京の町で繪の修業をしてゐた圓山應擧と親しい交を結ぶことゝなつた。或時應擧は愚海に向つて「あなたゞつて何時までも雲水ではゐまい。あなたが一ヶ寺を建てる時分にはわたしも一廉の繪師になつて居るから其時には襖も壁も皆私の名筆で飾つてあげるよ。」といつたことがあつた。其後愚海は諸國を行脚して、とう〳〵此熊野の涯の串本まで來て無量寺に足を止めたが、追々と檀徒の歸依が深くなつて遂に大きな寺を再建することになつた。そこで往年の自約を思ひ出した彼は、遙々使を出して應擧を招きにやつた。當時應擧の名聲は既に隆々たるもので、殆ど一世を壓してゐた。應擧は使者を受けて舊約を想起し懷舊の念親愛の情油然として胸底に湧いたが、如何せん時恰も宿痾に攻へられ、遽に愚海の意に應ずることが出來なかつた。止むなくその使者を一旦熊野に歸し、更に襖壁の寸法を取り來らしめた上、群仙の圖、鶴の圖、記念金蒔繪二つ重れの木杯等を寫らし、高弟長澤蘆雪を代理として使者と共に遙々熊野に寄越した。

蘆雪は無量寺へ來て、本堂の大襖に三間の龍と三間の虎とを描いた。此の繪の擦色を出す爲には硯の水は態々鶴川の谷から取つたものだといふ。本堂正面の左右、巨大なる龍虎の相睨んだ姿態は實に凄壯の氣に溢れてゐる。此の外、鶴の圖、猫の圖、寺子屋の圖、唐子の圖及鯰の圖等の傑作を數多く殘した。殊に極彩色の牡丹の幅の如きは實に驚くべきものである。かくて書院の貼壁も袋戸棚の襖し軸物も應擧の筆にあらずんば悉く蘆雪の筆である。

蘆雪が滯在中に西向村の成就寺へ大作龍の繪を殘し、無量寺の兄弟寺たる富田の草堂寺へも襖の繪を描いて置いて歸洛した。

愚海和尚は享保三年六月十九日に亡くなつた。其後五六十年村民の誰彼は應擧、蘆雪の名だけは覺えてゐたが其繪は左程貴重な物とは思はず、年中襖は入れ通して、動もすれば腕白小僧が鶴の眼をくり拔いたり虎の鼻へ穴をあけ兼ねまじき有樣であつた。所が明治二十四年頃、圖書頭九鬼隆一男が此寺を訪問し、此繪を見て驚き、檀徒有志に其保存方を忠告したので俄に完全な土藏を建て、替へ襖を作り名畫は此倉庫内に納める事にしたのである。

三、鯨

鯨は確に熊野の名物で同時に又串本の名物である。捕鯨事業に關する沿革とか、漁獲高とかに就ては既に「產業」の部に詳記したから茲には捕鯨作業の光景を紹介しておかう。左は大正十一年七月九日發行「週刊朝日」に載せられたもので、串本の捕鯨實況を寫したものであるから便宜採錄することにしよう。

○熊野灘の鯨とり　　紀州串本にて　　森　慶　三

■黑潮が渦を卷いて駭かどに咆哮する男性的な紀州熊野の漁業として捕鯨事業は最もふさはしいものである。熊野の捕鯨は古く慶長十一年にその源を發してゐる。最初は太地浦がその根據地で、主に網代式により手銛を投げて捕獲したものであつた。利得は大いので一時は新宮藩や和歌山藩が直營したこともあつた。現今では串本を根據とする東洋捕鯨會社と、

太地を根據とする大東捕鯨會社とで、熊野浦の鯨をあさつてゐる。

▣熊野の海や島に春霞の濃かな明治三十九年四月二十五日、東洋捕鯨會社の「オルガ」丸といふのが七十五尺の白長須鯨一頭を潮岬沖で射留め、串本の濱に揚げたのが熊野浦に於ける砲擊捕鯨のそも〳〵だつたといふ。熊野の鯨漁は熊野の山々が赤に黄に美しく飾られる晩秋の候から始まつて、沖合になつかしい蜜柑の花の香の漂ふ頃になつて引揚げる。

▣今日の捕鯨は、日本全國殆どすべて諾威式である。今日の諾威式砲擊捕鯨法は今から五十七年前(西紀一八六五年)に諾威人スウエンド、フオインが發明したものである。船は百噸から百五十噸位までの小さいきれいな鋼鐵船で、速力は十節から十二節位、機關の響がすると鯨を驚かすから、捕鯨船の機關は少しも響を發しない構造になつてゐる。大砲は一門で船首に据ゑてある。乘組員は砲手、船長、機關長その他で十四五名ゐる。東の空がほの〴〵と白んで、果もない熊野の海の波が曙の光にかすかに輝きそめる時分、勇ましく錨を拔いて船出をする。行く先は云ふまでもなく潮岬近海であるが、陸地から約三四十浬以内の海面をあちらこちらと探して歩く。檣(マスト)の上には高く鯨を見張るための白い樽の樣なものが取付けてあつて、船員が交代で此の樽の中に立つて鵜の目鷹の目で見張かする。

▣これも知らぬ鯨の大將、黒潮の流れに心地よげに身を任せつゝ時々眞黒い山の樣な脊を水上に現はしてはお得意の噴水を高く上げながらやつて來る。噴水は體溫が四十度もあるところから水蒸氣が凝結して霧のやうに見ゆる。見張番が見付けて船長に報告すると、船はすはこそと戰鬪準備。船員は勇躍する。船は靜かに〳〵鯨に近寄つて、三四十間の處まで寄ると砲手は息を凝らして狙ひを定める。大砲には長さ五尺重さ十三貫許りの大きな銛をしかけてあるが、その銛には直徑一寸餘りの長い〳〵綱を付けてある。狙ひを過たず命中すると、奴さん驚くの驚かないのつて、あわてふためいて水中深く潜りこみ、死力を出して逃げ延びやうとする。それもその筈だ。銛は打込まれると體内で更に尖端が爆裂する仕掛なのだから、如何に鈍感な鯨でも、こたへるにちがひない。

▣鯨は逃げる、船は綱を延ばし〳〵鯨について行く。鯨はだん〳〵と弱つて行く。第一砲でうまく行かなかつた場合には無論第二、第三の砲擊を浴せかける。いよ〳〵弱つたと見ると「ウインチ」で銛綱を卷き鯨を引き寄せ尾を船首に吊り上げ鯨體は水に浮かせたまゝ船側に副はせ、これ見よとばかり意氣揚々と根據地に曳いて歸る。根據地の港目で勝報の汽笛を鋭く高く吹き鳴す時の船長、砲手以下船員達の得意の心境は、蓋し想察にあまりある。沖合で一頭捕獲した處へ、又一頭あらはれたと云ふ場合には、今捕つた分には浮標(ブイ)をつけてそこへ流しておき、第二の捕獲に向ふのである。この浮標には旗を立てゝ後で捜索する場合の目標にする。夕方であるとランプをつけておく。

▣鯨には脊美鯨、白長須鯨、長須鯨、座頭鯨、抹香鯨、鰯鯨、克鯨(こくじら)等色々の種類がある。熊野沖で最も多く見るのは白長須、長須、鰮、抹香で脊美は滅多に見ない。脊美は最も貴いとされるもので、昔は一頭捕れると七浦が光るとまでいつたものだ。今でも偶(たまたま)捕らうものなら船は滿船飾をするやら、祝砲を打つやら亜大抵の喜び方では納まらぬ。鯨の大きいのになると、白長須で十五間位はある。體重は一萬五六千貫、ざつと牛の二百頭分の見當である。それにしても、その往み家の大洋の廣さからいへば、手水鉢の中のぼうふらにも當らぬ筈だからさう驚いたものでもない。

▣串本の東洋捕鯨では鯨が獲れると、直に沖合から根據地に向けて傳書鳩を飛ばす、根據地の事務所では鳩の使によつて鯨の種類大きさ、沖合距離等を知り、時をうつさず汽罐を焚き解剖場の整頓をして鯨體の到着を待つ。鯨が着くとそれがたとひ夜中でも直に「ウインチ」で斜面になつた陸上の廣い解剖臺の上に尾の方から全體のまゝで曳き上げる　眞黒い水の中の怪物を大地の上へ小山の樣に横へた形は慥に氣の弱い都人士を驚倒せしめるに足るものがある。引き揚げた鯨は、手〳〵に大きな凄い薙刀を提げだ多數の解剖夫と、忙しく響を立てゝ廻轉する「ウインチ」の力とによつて、メリ〳〵ザク〳〵バリ〳〵と音を立てながら見る〳〵中に、極めて迅速に、極めて巧妙に解剖せられ皮は皮、肉は肉、骨は骨、臟腑は臟腑と仕分けられてしまふ。

▣屍山血河といふ形容は、そのまゝ文字通りにこゝの場合に見られる。附近は限なく一面血の池であることはいふまでも無いが、解剖場附近の海水まで眞紅の色に染まつて、打寄せる波まで赤い花を咲かせる。かくて生鮮のまゝで食料に向くものは氷詰にして直樣運搬船に積込み、罐詰に向くもの、臟腑にすべきもの、採油の材料とすべきもの、肥料に製すべきもの等夫々瞬く間に片づけられてしまふ。少が數時間前迄大海を我物顔に横行してゐた大動物の末路かと思へば多少の哀愁の感が湧かぬでもない。(完)

○

隻鯨魚潤七郷　漁夫誇獲氣揚々　窮冬亦已作正月　齋藏拙堂

○

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ　蘆村

既に得し鯨はにげて月ひとつ　同

磐かけて鯨に向ふ小舟かな　子規

手拭に鬱金裁ちけりいさなとり　山梔子

○

しほけたつなだの荒浪さぐゝみてくぢら行く見ゆ直熊野のうみ　海上嵐平

○（柿園詠草）

雲かゝるわたのみ中にあらしほをあめとふらせて鯨うかべり　加納諸平

四、鯨骨門

串本實業學校の通用門を俗に「鯨門」と呼んでゐる。明治四十一年五月頃現在の校舎が縣の水產試驗場（時の場長柳澤成悌）であつた當時、紀伊水產株式會社より長須鯨の下顎骨を寄贈せられ、之を水產講習所生徒によつて左右の門柱として樹てたもので、地上の高さ十尺、地下四尺、他には珍らしい天下一品の門といはなければならぬ。

五、あふひ餅

「葵餅」は當地濱喜右衛門方に賣つてゐる名物の白餅である。もとは「五分餅」といつた。一個五分で賣つたものと見える。今から六十餘年前、卽ち維新前から賣出し評判となつたもので、又「喜右衛門の白玉」とも稱した。大正十年五月十八日舊藩主德川頼倫侯が來遊された砌、此の餅を大に賞美せられたのを記念として、侯爵家の紋所に因み「葵餅」と改名したものである。

六、鰹節

鰹節は當地及附近の名產の一である。堅く乾かしたものを「枯節」と稱し、未乾固の分を「生節」といふ。多く阪神地方へ積出し、又靜岡縣燒津方面からも年々多量の注文がある。

七、酒盗、蒲鉾

「酒盗」とは鰹の鹽辛のことで、串本に於ける名產の一つである。其の特有の風味は殊に飲酒家の嗜好し珍重されるものである。

串本の「蒲鉾」はその質の優良なることに於て遠近に有名である。今製品で最も優良なのは「片井」及「泉」製のものである。

八、鰯

串本の鰯は亦有名である、冬季魚商人の各自が副業的に製造するので、從來製造家として名のあつたのは田中幸助である。

第三篇 古文書

第三編　古文書

串木町　蔵

（其一）

寛享三年寅五月日

惣野書付　　串木浦

串木浦惣野

一こもり濱邊の山不殘
一とうら谷山小谷共不殘
一矢ノ熊谷少も不殘　但小谷共
一ほそ田ノ山小谷共少も不殘
　同ひらみ大人よりおくの谷のひらみ迄少しも不殘
一おくの谷山　但南畑の山
　むかいの谷の山共少も不殘
一くしげ谷山小谷共數々少も不殘
一こゞり谷山小谷共少も不殘
一池じりの山少も不殘
一あふぼらあふらしほり松之内地蔵堂寺のむかい犬戻り迄不殘
一西のひらみしおやの上より寺の上西ノ岡いけしりのひらみ迄少も不殘

一西ノかたへ綱代山之分
すみ崎より[illegible]ふなせ迄
　但ふなせより大かまのはな迄は[illegible]ノ綱代大かまのはなよりすみ崎迄は下ノあしろ
一ふなせの山より大谷西ノたき瀧の谷水流迄の分
一むま坂宮の谷おぐの谷笠島坂尾の浦同谷ふたまたの山迄水流之分

右之通從先年村中惣野に牛飼場にて御座候處近年我々少し切畑仕所々に松抔も少々植申せいとういたし故おのれ生の抔も少々はへ申に付彌せいとういたし申候就夫村中牛之飼場少も無之互に迷惑に罷成候然共只今有之松を切拂申儀も難成候間唯今所持仕候通互に銘々所持いたし置若地下に入用之節は大小に不限切遣可被申候勿論御用之節は不及申に候自今以後一本にても植申間鋪候若植申さて不叶儀に候はゞ村中としてうへ可被申候且又自今何れ之山にても草なも苅牛抔なも綱可被申候自然さいめ論致申もの有之候はゞ則取揚外之者ゟ御預け可被成候兎角村中より當分預り申と相心得居申候爲其我々も互に立合相談之上尤連判にいたし庄屋殿方へ相渡置申候爲後

日依而如件

右之内寺ノ薪山宮ノ薪山同草苅場□□抔村中より差しわけ相渡有之候□□

七郎兵衛　與次兵衛　庄兵衛　太次右衛門　左五八
文四郎　太次兵衛　作三郎　佐右衛門　加左衛門
甚助平　六　嘉左衛門　彦太郎　與右衛門　七
惣左衛門　半左衛門　實兵衛　左五四郎　傳七
兵四郎　仁平　左平太　左五兵衛　茂七
杢左衛門　八郎五郎　長八　與三兵衛　與七郎
無左衛門　四郎太夫　五郎左衛門　孫六母　武平
作兵衛　五郎作　五郎吉　武右衛門　武左衛門
庄八　清八　利平　庄右衛門　善右衛門
三兵衛　與平　甚五郎　二郎左衛門　三四郎
善作　宇平次　惣吉　五郎兵衛　七之丞
三右衛門　文右衛門　令啓　茂太夫　彦右衛門
彦兵衛　彦三郎　茂右衛門　長右衛門　甚作
久兵衛　安五郎　三吉　又右衛門　市太夫
長右衛門　三十郎　專右衛門　善之丞　傳四郎
關右衛門　作左衛門　安左衛門　與次右衛門　紋右衛門
彌五平　德右衛門　彌平次　清五郎　彌五兵衛
五郎兵衛　彌左衛門　七重郎　半五郎　七三郎
小平　七兵衛　忠五郎　角右衛門　重太郎
重助彦八　又五郎　角太郎　市太夫

幡内歪平　宇右衛門　重作　喜平
左次右衛門　吉左衛門　善五郎　六平　甚太郎
式平　吉蔵　新作　作之丞　彌右衛門
伴太夫　清左衛門　六郎兵衛　次郎兵衛　彌十郎
久作　三郎兵衛　與左衛門　六兵衛

右之通相談□連判如此

貞享三年寅五月　日

くし木浦庄屋　武左衛門殿
同　肝煎　新作殿
同　組頭　與右衛門殿
同　斷　與三兵衛殿
同　斷　五郎兵衛殿
同　斷　作左衛門殿
同　斷　七兵衛殿
同　斷　吉左衛門殿

同　斷

六平殿

（其二）　串木町蔵

（表紙）

文政四年己正月
山林御尋に付書揚帳
江田組　串木浦

（内部）覺

所ほ尾水崎切立ノ内　一ヶ所　利七持
一松杉山小　同所並　一ヶ所　幸右衛門持
一松山小　小森　一ヶ所　常蔵持
一同　小とふら谷小谷　一ヶ所　甚兵衛持
一同　小とふら谷小谷並　一ヶ所　嘉平次幸右衛門持合
一同所小サゴ　一ヶ所　甚兵衛持
一同　小谷　一ヶ所　甚兵衛丈助持合
矢熊小谷　一ヶ所　多右衛門

細通り小　一ヶ所　藤七
一同　細田之谷小　一ヶ所　甚兵衛彌平次持合
一同　小所　彌平次持
一同　小所　甚兵衛持
一同　小所　一ヶ所　藤七持
一同所小谷　一ヶ所　平左衛門持
一松杉山小　細田小谷ノ口　一ヶ所　四郎兵衛持
一同　奥ノ谷口　一ヶ所　傳四郎持
一同　小所　一ヶ所　甚兵衛持
一同所奥ノ東谷　一ヶ所　善六持
一同　小奥ノ谷西　一ヶ所　又六持
一同　所並　一ヶ所　左七持
一同　小谷　一ヶ所　久三郎持
くしげ谷小　一ヶ所　甚兵衛清右衛門持合

同所油しほり
一同　小　一ヶ所　政次郎　持
こゞり谷　小　一ヶ所　平太夫　持
一同　小　一ヶ所　平之丈　義助　持合
一同　小　所　一ヶ所
五輪谷　小　一ヶ所　平太郎　持
高岡
一雛木山小　一ヶ所　平太夫　持
あふぼら
一野原山大　一ヶ所　在　持
油しぼり
一松山小　一ヶ所　平　六　持
一同　小　所　一ヶ所　平之丈　持
袋江美須山
一雛木山中　一ヶ所　無量寺　持
潮野
一野原山大　一ヶ所　在　持
尾ノ浦不殘
一松山　中　一ヶ所　在　持
一同　所　並　一ヶ所　上野浦　喜平次　持
同所東かたい
一椎山　小　一ヶ所　在　持
中ノ坂
一松山　小　一ヶ所　喜　七　持
同　所　一ヶ所　定　助　持
一同　小　一ヶ所　平太夫　持
一同　小　所　一ヶ所　左　七　持
中ノ坂並
一杉松山小　一ヶ所　又　平　持
馬坂宮ノ谷
一松山　小　一ヶ所　小　原　持
瀧ノ谷合
一野原山小　一ヶ所　伴　助　特
西かたい網代山
一諸木山大　一ヶ所　御　手　山

但し寶暦三年酉霜月御留山に被仰付候事

合

右者當浦山林御尋に付相調申候尤ヶ所數に御座候得共當浦之山と申儀は人別田畑限り持々にて御座候尚又松杉之山にても至て幼木數等も山境迄植立之儀にては無御座候依之右御願書付差上申候　以上

巳正月

串本浦庄屋　常　七　印
同所　肝煎

浦儀惣大殿　政次郎　印

（安政五年午正月調のものも右同樣に付略す）

（其三）　松屋　前芝嘉次郎家所藏

午恐御請奉願口上

當夏水崎表入相稼場所にて當浦に鰹網取仕候に付十七ヶ浦と彼是及論其段願出此度御調之上先規之通り鰹網取不致十八ヶ浦諸漁事入相稼に仕候樣承知仕候尤水崎前夜立網之儀は是迄之通に被成下候樣奉願上候依之書付指上げ申候　以上

文政十丁亥十月

上野浦庄屋　平右衛門　印
同所　肝煎　要　藏　印

浦儀惣大殿

右書付之趣被仰聞承知仕候　以上

大島浦觸頭庄屋　古座組惣代　貳　平
串本浦惣代庄屋　江田組　又　平
出雲浦庄屋　有田浦庄屋　半　兵衛
田並浦庄屋　吉右衛門
德大

（其四）　前芝嘉次郎家藏

唐船漕送りひかへ

一遠州住吉浦へ漂着致候唐船漕送に付江田組大宰領阿波屋平六及幸右衛門二人被仰付三月廿一日古座組江田組下も田原浦へ相詰候處折節唐船下も筋にて漕船いたし江田組下田原詰な串本詰に段々願出候處其段相叶同廿四日串本詰に相成り同廿八日下筋より相圖の煙揚げ來り候に付俄に串本に相詰め御座候漕船下田原沖迄押參り其日七ッ半時に押付最早夜に入り大島港へ夜九ッ過ぎに漕付入船致し翌廿九日大島港五ッ時出帆段々追風宜敷水崎表首尾能くはぜ登り浦々役船は勿論江田組漁船惣懸りにて和深沖迄はぜ參り候處南風に相成り夫より周參見港口迄漕參り夫より周參見組へ相渡し首尾能漕送仕候

以上

文政九丙戌二月

一南京船にて乘組百十五人乘り外に日本人三人助け御座候由唐船額に得泰と書記す

口上書寫し

中華江南崇明縣施紹修船往二山東一竝于十一月初八日在二石島一放洋至二十二日一西北風大起吹至二貴地一水深不能下錨船上少水又行破二船舵一故而到二此貴地一各大人得レ歸二古鄉一耳二恩萬代　王壽珍

（文政四巳正月紀州引本浦ゟ流着唐船右日上書也）

面梶取梶ニ書知ス

江南崇學伍佰參拾號施紹終商船

艫ニ

書鶴書蘭　過飛

（其五）　　串本町藏

安政二年卯三月
鰯先年賦控帳
江田組
串本浦

江川
四十四　一下田一畝九歩　高一斗三升　專助㊞
同所
同　番　一下田三畝歩　高三斗　藤作㊞
右二株安政二卯より巳迄三年鰯先午より毛付入
大水崎
六十　一下々畑二畝廿四歩高八升四合　平六印
袋寺の本
四百廿五一下田一畝歩　高一斗　寺印
右二株安政二卯より未迄五年鰯先申より毛付入
袋寺の本
四百廿四一下々田五畝九歩高三斗七升一合　寺印

右一株安政二卯より戌迄八年鰯先亥より毛付入
高合九斗八升五合　新□　木田畑
此一段三畝十二歩
内
四斗三升　田方
此四畝九歩
右安政二卯より巳迄三年鰯先午より毛付入
一斗八升四合　田畑
此三畝廿四歩
内一斗　田方
此一畝歩
八升四合　畑方
此二畝廿四歩
右安政二卯より未迄五年鰯先申より毛付入
三斗七升一合　田方
此五畝九歩
右安政二卯より戌迄八年鰯先亥より毛付入
右者當浦本田畑之内去年霜月地震津浪之節砂入床堀荒に相成り地書請大迄□□田人共之儀に付自力に開起江不仕萬難儀迷惑仕候付鰯先年賦御用捨被爲成候樣御願申上候處此度御見分之上年賦御極被爲成下難有奉承知候然上者右年限申地書請入仕年賦明候年より御年貢取立上納可仕候依之田人共印形取差上申候　以上

串本浦庄屋　藤左衛門㊞
同所　肝煎　茂兵衛㊞
右之通鰯先年賦相極申候　以上
沖勝之右衛門㊞
高橋八助㊞

（其六）（以下二十通）　　矢倉甚兵衛家藏

直飛脚ゟ以得御意申候
浪士鉢之者和州五條にて亂妨之上十津川ゟ入込有之樣子に付萬一新宮ゟ亂入の程も難計若右樣之節は御代官衆御引纏郡中大庄屋地士帶刀人浦組鐵炮打等御加勢に罷出可申筈に付別紙通り御代官所より直飛脚を以申來候御書面之御趣御承知兼て御用意有之樣存候依之右申合候　恐々頓首
浦儀才治
九月四日
柏木宗兵衛樣　矢倉甚兵衛樣　梶藤半兵衛樣
神田佐七樣　鈴木喜平次樣

別紙之通年寄衆より仰聞に付拙者共直支配地士醫師之外各支配下ゟ相觸可被申候　以上
八月廿一日　垣屋十郎兵衛
諸郡御代官中

公方樣薨御に付今日より普請鳴物停止に付此旨可被相觸候
別紙之通り仰來候付各樣爲御承知申遣候　以上
八月廿六日　浦儀太郎
柏木宗兵衛樣　知野茂右衛門樣　矢倉甚兵衛樣
神田佐七樣　神田清右衛門樣　梶藤半兵衛樣
鈴木喜平次樣　潮崎利右衛門樣　潮崎重藏樣
潮崎常藏樣

別紙之通御目付中より申來り候付可被得其意候　以上
八月廿二日　垣屋十郎兵衛
諸郡御代官中

町中見世店閉二日過候ゟ上見世計上げ家職隱便に爲致五日過候ゟ諸賣買等常之通致させ可申事
一漁獵
御城下は三日
伊勢熊野は二日　相止可申事
一在　普請　一七日相止可申事
一貴　馬　五日相止可申事
右何も觸候日より
右之通り
別紙之通仰來候付寫差遣候間御書面之御趣相心得地士帶刀人中ゟも可被申遣候依之申遣候　已上
八月廿九日　浦義太郎

江住より上野迄
右庄屋中

請取申米之事
米合三斗九升　但し三人扶持
九月十四日より十月十日迄
右者此熊野串本浦御固所相詰候節爲御扶持方受取被申候以上
寅十月　串本浦地士　矢倉甚兵衛　印
傳法御蔵所

九月十四日より十月十日迄日數廿六日勤
一銀五拾匁也　矢倉甚兵衛日□之通り
外々分並諸入用とも合八百六拾匁八厘
右者口熊野串本浦御固所ゟ九月朔日より十月十日迄相詰候諸入用書面之通相違無御座候
寅十月　矢倉甚兵衛　印
神田　佐七　印
神田清右衛門印

奉願口上
此度農兵組立被仰出候に付銃隊訓練方兩人早々御差向相成候樣仕度奉願上候依之書付差上申候　以上
江田組串本浦地士
銃隊取締　矢倉甚兵衛

同組里之浦帶刀人
同　鵜　伊藤義三郎
同組大庄屋　浦　義太郎
伊藤專蔵樣

串本浦地士代々年頭
御目見之格　矢倉甚兵衛
銀七枚　ラントセル一組
御時節相撰へ元込ニニーヘル銃相求候時被下之
四　月

別紙之通仰來候付各樣爲御承知寫申遣候　以上
四月十四日　浦儀才治
柏木宗兵衛樣　矢倉甚兵衛樣　神田　佐七樣
田島　平六樣　後藤半兵衛樣　鈴木喜平次樣
別紙之通御勘定奉行衆より被申越候付右一通爲心得申遣候
四月三日　以上
渥美彦太夫
竹田半之右衛門
五組宛

浦賀表へ滞留之異國船退船いたし候共近年異國之樣樣にては此後何時渡來之程も難計防御(禦か)船之儀彌嚴重に御手宛有之ばづに候間御家中武備手宛之儀は勿論地士帶刀人等猶更武術練習之儀彌無油斷心掛け可申事

御領分紀州牟婁郡串本浦甚兵衛船沖船頭藤吉外五人乘組居浦に於ゐて舶二十五本積入大阪表ゟ罷登候積當三月廿二日出帆阿波國下沖觸巻り候處逢難風凌兼遠沖ゟ被吹放何國之沖とも しらず漂流中同廿五日拙者支配所伊豆國付新島を見掛け一同骨折觸寄無難上陸致候付夫々介抱手當いたし遣今般乘組之者ゟ島役人共差添出島出訴申候然所新島之儀は流人被差置候島方に付一躰吟味之上公事方月番御勘定奉行所ゟ差出候樣に御座候此段及御通達候
寅五月　江川太郎左衛門
紀伊殿
御城付

慶應三卯十二月□□迄
地士帶刀人並に農兵銃隊組立御達帳
(矢倉甚兵衛家蔵)

見老津　(以下略)
串本浦地士甚兵衛悴　矢倉萬平
同人弟　同　増吉
同浦　神田佐七
同浦　同　福太郎
同浦　常蔵
留吉
德兵衛
榮吉
虎之助
竹松
忠八
喜平

一先達て於　公邊衣服之制道御變革被　仰出一統羽織袴着相成り候付ては身柄之輕重　御目見以上已下之差別も無之候付來正月より左之通着用可致事
一御役人向重役は羽織紐淺黄之染相用ひ可申事右之外淺黄染不相成事
一都て御目見以上は紋付羽織已下役は無紋着用可致事
衣服所制道並羽織紐之儀に付去戌年被　仰出之品も有之處在々にて心得違い不相守筋も有之趣甚だ不都合に付向後心得違之者無之樣在々ゟ可申付旨奉行衆より被申聞趣名草より別紙之通申合越候間右樣相心得可被申候依之申遣候
四月七日　御代官所
大庄屋宛

一伊賀已下は割羽織着用不相成丸羽織着用可致事
但坊主は紋付羽織にても不苦事

（上げ紙に）　年寄衆羽織紐白を御用被成候事
（下げ紙に）　本文に候得共當分無紋羽織取更着用勝手次第
之事

上巳端午之節もの之儀向後麁相成る紙雛紙幟之外都て節りし人形之類一圓可爲制禁事
但初雛初幟等親類共より贈り不相成品は去丑年被　仰出之通堅可相守事

御鐵炮御手入御用附書附控

矢倉甚兵衛

年恐書附

一、二百目御筒　二丁
一、百目御筒　一丁
一、五十匁御筒　五丁
一、三十匁御筒　五丁
一、二十目御筒　五丁
一、十文目御筒　七丁

右は古座御目附所に御差置御座候御鐵炮大筒並御道具共御手入之儀私共立會八月相掛同三日迄に不殘相濟申候且又御長持之小道具等迄念入相調べ置申候依之□□右御斷書附差上申候　以上

月　其時之出勤人
地士中名前

其時之
御代官所御勘人當て
但兩名也樣附にて御座候
右之通り御目付衆に一通
□樣附にて御座候
同一通御鐵炮方
□□瀧田彌右衛門樣
新　百兵衛樣兩名也

請取申米之事

米□□□□也　但三人扶持

二月十八日より廿一日朝迄
右は古座御目付所に□□付之御□炮御手入御用附罷越にて爲御扶持方請取申候　已上
□辰二月　串本浦地士
矢倉甚兵衛
傳法御藏所

覺

一□□四匁□□　一人前に付
二月十八日夕より廿一日朝迄
是は御鐵炮御手入御用付御越被成候節御止宿賄料
其時之出勤人
地士中名前
右令承知候已上

覺

一人　足　十二人
一銀　是米綿油半紙代共
右は御鐵炮御手入之節差出申候　以上
其時之出勤地士中名前
右令承知候　已上
辰　二　月

（其七）（以下十通）　串本町藏
免　定　串本浦
午より申迄三年四ッ七分
一、高百四十四石四斗九升一合　本田畑
午四ッ三分參厘四毛六糸
内畑高三十二石四斗七升六合
取六十二石六斗三升一合　田畑古荒
高二十石七升九合
内畑二石一斗七升七合　田畑鍬先荒
高五斗五升五合
内畑八升四合
取二斗六升一合
此引免壹厘八毛壹糸内
高七十石三斗九升八合　田方

（割印）

取四十二石三斗一升六合
三ッ八分
高四斗七升一合　用水なし
取一斗七升九合　右同所
三ッ八分　畑免受
高十六石九斗八升四合　右同所
取六石四斗五升四合
三ッ八分　同
高五石七斗八升九合　右同所
取二石二斗
此引免參分四厘七毛參糸内
三ッ八分
高三十石二斗一升五合　畑方
取十一石四斗八升二合

（割印）

午より申迄三年定三ッ二分
一高十七石五斗四升三合　新田畑
内畑十三石九斗一升
取五石六斗一升四合
高六斗三合　田畑古荒
内畑四斗六升
高三石四斗九升　田方
取一石五斗七升九合
三ッ取
高十三石四斗五升　畑方
取四石三升五合

右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也

村上助右衛門㊞
青山五左衛門㊞

安政五年午十月

右村庄屋肝煎惣百姓中

印割

免　定　　串本
　　陶野川論所

酉より亥迄三年三ッ三分
一高四石七斗三升四合　　新畑
　取一石五斗六升二合

右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也

文久元年酉十月

松島李之助㊞
青山五左衛門㊞

右村庄屋肝煎惣百姓中

印割

免　定　　串本浦

酉より亥迄三年定四ッ七分
一高百四十四石四斗九升一合　　本田畑
　酉四ッ三分參厘九毛八糸
　内畑高三十二石四斗七升六合
高二十石七升九合　　田畑古荒

内畑高二石一斗七升七合
高三斗七升一合　　田方鍬先荒
　取一斗七升四合
　此引免壹厘貳毛除
殘高百二十四石四升一合
取六十二石七斗六合
高七十石四斗九升八合　　田方
　取四十二石三斗五升九合
三ッ八分　　用水なし
高四斗七升一合　　田方
　取一斗七升九合
三ッ八分　　萬延元申より子迄五年
高十六石九斗八升四合　　畑免請
取六石四斗五升四合　　田方
三ッ八分
高五石七斗八升九合　　右同所
　取二石二斗　　田方
　此引免參分四厘八毛貳糸内
三ッ八分
高三十石二斗九升九合　　畑方
　取十一石五斗一升四合
酉より亥迄三年定三ッ二分
一高十七石五斗四升三合　　新田畑
　内畑高十三石九斗一升

取四十二石五斗三升三合　　田畑古荒
　内畑四斗六升
殘高十六石九斗八升
取五石七斗一升九合
三ッ八分
高四斗七升一合　　用水なし
　取一斗七升九合　　田方
三ッ八分　　萬延元申より子迄五年
高十六石九斗八升四合　　畑免受
取六石四斗五升四合　　田方
三ッ八分　　右同所　同
高五石七斗八升九合　　田方
取二石二斗　此引合參分四厘八毛二糸内
三ッ八分
高三十石二斗九升九合　　畑方
取十一石五斗一升四合
子より寅迄三年定三ッ二分
一高十七石五斗四升三合　　新田畑
　内畑高十三石九斗一升
高六斗三合　　田畑古荒
　内畑四斗六升
殘高十六石九斗四升
取五石六斗一升四合
三ッ取
高三石四斗九升
取一石五斗七升九合　　田方
三ッ取
高十三石四斗五升
取四石三升五合　　畑方

高六斗三合　　田畑古荒
　内畑四斗六升
殘高十六石九斗四升
取五石六斗一升四合
三ッ取
高三石四斗九升　　田方
取一石五斗七升九合
三ッ取
高十三石四斗五升　　畑方
取四石三升五合

右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄六合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也

文久元年酉十月

松島李之助㊞
青山五左衛門㊞

右村庄屋肝煎惣百姓中

印割

子より寅迄三年定四ッ七分
一高百四十四石四斗九升一合　　本田畑
　畑子四ッ三分五厘一毛八糸
　内畑三十二石四斗七升六合
高二十石七升九合　　田畑古荒
　内畑二石一斗七升七合
殘高百二十四石四斗一升二合
取六十二石八斗八升
高七十石八斗六升九合　　田方

子より寅迄三年定三ッ三分
一高四石七斗三升四合　新畑　串本論所
取一石五斗六升二合　閼野川
右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也
元治元年子十月　河村彌九郎㊞
松島杢之助㊞
右浦庄屋肝煎惣百姓中

（右裏面）

丑四ッ四分壹厘貳毛貳糸　木田畑
貳分八厘七毛八糸餘　畑免受新田畑遵引免

丑　表書之通　新田畑

免定　串本論所　閼野川

卯より巳迄三年定三ッ三分
一高四石七斗三升四合　新畑
取一石五斗六升二合
右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也
慶應三年卯十月　伊藤　專藏㊞
右浦村庄屋肝煎惣百姓中

免定　串本浦

卯より巳迄三年定四ッ七分
一高百四十四石四斗九升一合　田畑古荒
卯四ッ四分壹厘貳毛貳糸
内畑高三十二石四斗七升六合
高二十石七升九合
内畑二石一斗七升七合
殘高百二十四石四斗一升二合
取六十三石七斗五升二合　田方
高七十四石七斗六升七合
取四十四石八斗八升六合
三ッ八分
高四斗七升一合　用水なし
取一斗七升九合　田方
三ッ八分
高十八石八斗七升五合　田方畑免受
取七石一斗七升三合
此引免貳分八厘七毛八糸餘
三ッ八分
高三十石二斗九升九合　畑方
取十一石五斗一升四合
卯より巳迄三年定三ッ二分
一高十七石五斗四升三合　新田畑
内畑高十三石九斗一升
高六斗三合　田畑古荒

内四斗六升
殘高十六石九斗四合
取五石六斗一升四合
高三石四斗九升　田方
取一石五斗七升九合
三ッ取
高十三石四斗五升　畑方
取四石三升五合
取小以六十九石三斗六升六合
内十五石五斗四升九合　畑米
右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也
慶應三年卯十月　伊藤　專藏㊞
右浦庄屋肝煎惣百姓中

免定　串本浦

午より申迄三年定四ッ七分
一高百四十四石四斗九升一合　木田畑
午四ッ四分貳厘八毛八糸
内畑高三十二石四斗七升六合
高二十石七升九合　田畑古荒
内畑二石一斗七升七合
殘高百二十四石四斗一升二合
取六十三石九斗九升二合
高七十四石七斗八升七合
取四十四石八斗八升六合
三ッ八分
高四斗七升一合　用水なし
取一斗七升九合　田方
三ッ八分
高十七石七斗八升六合
取六石七斗五升九合
此遵引免貳分七厘壹毛貳糸餘
三ッ八分
高十七石七斗八升八合　畑方
取十一石五斗一升四合
午より申迄三年定三ッ二分
一高十七石五斗四升三合　新田畑
内畑高十三石九斗一升
高六斗三合　田畑古荒
内畑四斗六升
殘高十六石九斗四升
取五石六斗一升四合
高三石四斗九升　田方
取一石五斗七升九合
三ッ取
高十三石四斗五升　畑方
取四石三升五合
取小以六十九石六斗六合
内十五石五斗四升九合　畑米
取四十五石五斗四升
三ッ八分
高四斗七升一合　用水なし
取一斗七升九合　田方
三ッ八分
高十七石七斗八升六合　田方畑免受
取六石七斗五升九合
此遵引免貳分七厘壹毛貳糸餘

右依願定免申付候庄屋肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也
明治三年庚午十月　　井上少參事㊞
串木浦庄屋肝煎惣百姓中

（裏面附記）
三年定四ッ七分
高百四十六石四斗九升一合　　本田畑
米四ッ四分參厘壹毛六糸　内二石　社領上り地分増
本田畑　外四毛參糸餘荒先荒
貳分六厘四毛壹糸餘畑免請遵引免

免定
午より申迄三年定三ッ三分
一高四石七斗三升四合　　新畑
取一石五斗六升二合　　畑米
右依願定免申付候庄　肝煎小百姓入作迄立合無高下致割賦
毎年霜月中急度皆濟可仕者也
明治三年庚午十月　　井上少參事㊞
串木
鬮野川村庄屋肝煎惣百姓ゟ

免定　　串木
鬮野川
新畑
割印
一畑免三ッ三分

之通屹度皆濟可致者也
明治五年壬申十月　　北島秀朝㊞
和歌山縣權令
副戸長村代惣百姓ゟ

免定　　串木浦
割印
一田免五ッ九分七厘六毛參糸　　本田畑
畑免三ッ八分
割印
一田免四ッ五分貳厘四毛四糸　　新田畑
畑免三ッ取
右之通當壬申年定免申付惣百姓共立合無高下致割賦期限之
通屹度皆濟可致者也
明治五年壬申十月
和歌山縣權令　北島秀朝㊞
副戸長村代惣百姓ゟ

（其八）
書付（浦手形）　　串木町藏
去る九月七日夜より八日時化にて尾州知多郡布土村直乗船頭
榮太郎船御當浦於袋港難事に逢候付積入荷主伊問中ゟ飛脚御
指越被下右に付荷主惣代積問屋代左之四人之者共右支配に參
着仕候處散亂沈没荷物等厚御取締て以陸揚之上聞置被下候品
夫々御引渡被成下就ては浦仕舞不致内代船にても積登方難出

來筈之處浦仕舞之儀は荷主支配人中より引受荷物登方御願申
上候樣御聞濟難有奉存候然る處本船作事相片付不申は浦仕舞
に相成不申故浦手形御指出被成下不申趣御尤に奉存候右にて
は濡傷荷之事故御聞濟ゟ以積登有之候共浦手形持歸不申は捌
方難出來本船之儀は大破故急に作事難相成日數相掛り候はゞ
益傷荷に相成り其以迷惑之儀に付且は本船浮置有之故作事に
取掛作事場へ相登見候上船底餘大破にて六ヶ敷又は郡合に寄
賣船に致候共兎角船頭船宿兩人ゟ任せ置可申筈に御座候に付
如何樣取計候共浦方には御指障御苦勞掛不申筈端左に印形人
中一統引受候上は此後御浦方ゟは御難儀御苦勞決て掛不申候
付前章の通浮船之儀にては作事に相成不申趣に付作事可致筈
に御座候間作事出來候上は口上書指上申候間浦手形御指出し
被成下度左候はゞ積登荷物捌方難出來候付再上御願申上候處
御聞濟被成下難有存奉候勿論荷主支配人中並船頭一統之願意
にて作事出來候上は口上書さし上浦手形御願申上候上若此後
船頭船宿共如何樣に取計候共御浦方ゟは御難儀御苦勞御差障
之儀等毛頭掛申間敷候依之爲後證引受連印書付如件
明治三年庚午十月
尾州行積荷中間
惣代大阪　紙屋　新助
代　藤九郎㊞
同　斷　紙屋治兵衛
代　惣七㊞
同　斷　平野屋庄兵衛
代　源太郎㊞
同斷積問屋　柏屋市三郎
代　嘉七㊞
尾州知多郡布土村
直乗幸吉丸船頭
榮太郎㊞
船宿　鍵屋伊平㊞
庄屋
矢倉萬平殿
肝煎
太右衛門殿

（其九）　　串木町藏
必至難渋之者取調御救助願帳
持高何升何合　　串木浦
一家内何人　　名前
但八歳以上（以下）何人
内何人　雛濱稼
何人　親方掛り
何人　病人
無高何人
一同何人　　名前
但八歳以下何人
内何人　雛濱稼
何人　親方掛り
（等列記しあるも略す）

合百九十軒　　此人數九百五十七人

内
八人　他國□□乘候尚又出稼にて其身丈相凌ぎ候分
六十人　右之者驛濱廻り稼を以相凌ぎ罷在候へ共追々米價高値にて家内養育之處迄は屆兼候儀に御座候
二百人　右之者漁方ゟ被召抱候得ども家内養育は出來不申其身丈けの凌ぎに御座候

殘り六百八十九人

右之者共元來雜漁に罷在候處不漁不時節打續昨年者別て不漁冬分綱魚漁當春に至り網代呂漁共一切無之當浦之儀は漁業之外伐り稼等一切無之只漁業のみ之場所に御座候處近年不漁打續候上諸品高價に就ては自然漁株も相減じ凌ぎ方六ヶ敷右に付早春以來頭立より別帳之通出來致させ夫々配當取計其上若き者は日々五六十人づゝ驛濱稼を以相凌其餘二百人漁株方ゟ召抱候得共亦々得漁無之内は漸々一人前七合飯米丈けにて被召遣尤漁業同には苧綱倦濃致させ候得共是迚も高價にては倦濃等多分無之且老羸鰥寡孤獨之者共ゟは身元相應之元より朝夕弱焚出させ漸凌ぎ方取續ぎ候得共最早必至の場多人數之事故其以難儀迷惑仕罷在候儀に御座候間
御時節柄奉恐入候得共何卒御見分之上御救助被爲成下候樣仕度宜敷御取計之程幾重にも奉願上候　以上

午三月

串本浦庄屋　喜三兵衛　㊞
同浦　肝煎　太右衛門　㊞

藤本源二郎殿

（其一〇）　　串本町蔵

◎表紙　明治八年四月
地籍御編整に付差上帳
第七大區六小區　串本浦
牟婁郡串本浦

一村社本之宮
此段別　一段八畝歩　無税地
村社之外
一小社　此段別　二畝五歩
内
嘉美子社　此段別　十六歩　内十一歩　有税地　五歩　無税地
金毘羅社　此段別二十五歩　無税地
稲荷社　此段別　十二歩　有税地
一禪宗無量寺敷地
此段別二段四畝三歩　内一段六畝二十九歩有税地　七畝二十七歩無税地
一墳墓地
此段別三段七畝二十五歩内一畝十四歩有税地　三段六畝十一歩無税地
一河一筋宮川　此段別　九畝歩
一海面

此漁猟場凡段別三十五町五段四畝歩
内
段別二段四畝歩　串本浦　入會場所　闘野川村
段別二町五段歩　串本浦　二色村　入會場所
一溝　渠　此段別五畝歩
一水　溜　此段別一段八畝歩
一道　路　此段別一町五段歩
一郷蔵敷地　此段別十二歩　有税地
一杉　山　段別十町七段一畝歩　公有地
此本數　凡八百本
一山　段別二十三町七段八畝歩　私有地
内
松山　此段別十九町六反二畝歩
杉山　此段別一段六畝歩
柴山　此段別四町歩
右者今般地籍御編整に付御布達之御趣承知仕則取調上申仕候也

明治八年四月三十日　　第七大區六小區
串本浦副戸長　神田清大郎　㊞

（其一一）　　串本町蔵

内務省へ歎願ノ時東京再出日記（一部抜抄）

明治八年
六月二十三日　午前第十一時頃本浦出立正午十二時大島港出帆同夜度會縣下九木浦ニ入港ス　同二十七日同港出帆二十八日同縣下鳥羽浦ニ一泊二十九日同港出帆同日勢州四日市ニ着船ス
七月一日　勢州四日市ニ於テ蒸氣千年丸に乘船午後第一時出帆シ二日午後第十時横濱ニ着船即時上陸一泊ス
三日　午前第十時東京定宿盛田慶太郎方ニ着留相成候事
本日靈岸島神田喜助殿方へ兩名出歩岩之助氏在所ヲ聞濱田同人ノ詰所迄出車シ翌日同氏來車ノ趣ヲ聞ク
四日五日六日七日　略
八日　横山君へ面會昨日預ケ置キ候書類落手セリ夫ヨリ保權舍へ出歩シ西園寺君ニ面會書類一切預ケ置キ歸宿ス此時御同人ヨリ云フニ今日協議ノ上明日郵便ヲ以テ通達スルコトノ由ヲ聞ク濱田葵川君伺ノ爲メ牛込原町迄出歩ス同氏未ダ歸府無之由ヲ聞ク故アツテ福田氏方エ午後第八時頃ヨリ出路ス面會シテ暫ラク滯座同第十時三十分頃歸宿ス
九日　午後第二時頃出歩西園寺氏ニ面會兎角内務省ヘ出頭スルノミヲ代理スルトノコトヲ聞ク然レドモ我輩ヨリハ別テ依頼スルヲ得ズマヅ同氏ノ宅ヲ去リ故アツテ福田君ノ宅ヘ向キ直ク樣罷リ出デントスル途中ニテ同君ニ面會シ遂刻西園寺君ニ會議シタル由ヲ極日達シ同刻五ニ道ヲ別レテ歸宿シ同第

神田文左衛門
濱田治兵衛

五時三十分頃西園寺宅へ出足面會シテ先ヅ内務省へ最初出頭スル儀ハ踏リチ云フテ兎角歎願書ニ加筆チ頼ミ置クナリ

十日　第一時頃保權舍ヨリ書狀到來ニ付兩名出舍ス同舍中田村氏ニ面會昨日預ケ置キタル書類チ請取直チニ西園寺宅ヘ參ジ面會ス此時同人ノ云フニ明日我レ福田ノ宅迄出車夫ヨリ致シ同人ニモヨク協議致シミ遣スト云フ歸宿シテ後亦横山君エ出歩面會ス兼テ申上度儀アリト雖モ場合ノ都合ニヨリテ其意ナ遂ゲズ夕第七時三十分頃福田氏ノ宅ヘ行ク同君他出ニ付書類一切預ケ置キ亦明朝參上スト云ヒ置テ同家チ去ル（下略）

十一日　略

十二日　福田氏ノ宅ヘ參ル面會シテ暫ラク御申口チ開ク午後第五時頃ヨリ葵川家ヘ參ル面會シテ同第十一時頃歸宿ス此時今般ノ願書及見込書ノ寫チ御覽被下由申サルヽ

十三日　書類ノ寫シチ認ム午後第三時神田コト福田宅ヘ參ル面會ナクシテ踏ル同第四時濱田コト葵川先生ヘ參ル此時寫シ書チ差出スナリ神田、福田氏ト同伴シテ在新宿小原氏方ヘ參ル面會シテ午後第七時頃歸宅ス

十四日十五日十六日　略

十八日　午前第八時初テ内務省ヘ出頭受付所ヘ書類差出候處早速奥ヘ書類チ通シ被下暫時控居候中今日ノ書類慥ニ落手致ス間明後二十日一度伺ノ爲メ出頭セヨトノ事承知致シ先ヅ歸宅セリ

二十日　出頭午前第十時頃九等權大錄服部殿玄關番迄御出席シテ曰ク過日差出シタル書類一通リ讀ミ候ヘ共最初起發ノ手續チ尋問スルトノ儀ニテ繪圖面チ開キ御尋ニ相成ル依テ先ヅ去明治六年十二月山段別御取調ノ節ヨリ爭論ニ相成候振合チ有增上申致ス服部殿ノ曰ク當省エ出願致スニ付テハ縣廳ヨリ添翰持參可致御布告モ有之ニ付巡チ得ザル儀ニ候ヘ共尚協議ノ上御沙汰ニ及ブ間ソレ迄旅宿ニ控ヘ居ラレヨト被仰付候事

二十一日　休暇

二十三日二十四日　略

二十五日　福田氏同伴ニテ濱田内務省ヘ出頭ス小原殿出勤無之ト聞キ新宿住宅迄歩車ス面會シタ暫ラク尋問ニ及ブ此時公有地實地檢査ノ爲メ昨二十四午後三時頃本縣令殿ノ旅宿チ内務省ヘ尋問ス本町二丁目二番地石内作太郎方ト聞ク直樣同方ヘ問フ本日出立シタルト聞ク

二十六日　休暇日

二十七日　兩名出頭玄關番迄服部匡殿御出席先途テ落手之書類ハ御協議ノ爲メ長官ヘ相廻シ有之カ尚明日出頭有之度旨被申聞候テ承知シテ互ニ御席チ別ルメ官員御派出ト承リシ云々少ラク何分御沙汰チ願ヒ升ト言上ス服部殿曰ク取急ギ協議シ今日中ニ埒明ケ吳レルトノコトニテ明日出頭スベシト被申聞候事

二十八日　午前九時半頃出頭ス暫時支關ニテ休息ス十時服部殿御出席被申聞ニハ何分添翰ナクテハ順序ニ觸レ候事故本縣ノ添翰チ可取次第チ懇々トシテ御教授チ下サル猶今日書類下ゲ渡シ可申答ナレドモ今少シ課中協議ノ次第モ有之ニ付書類ハ明日受取ニ罷出可申事トノコトニテ御省チ下ルツテ御尋モアリ我等答フ本年一月二十四日御裁判チ受ケ不服故ニ控訴仕候ハ三月四日初テ司法省一等裁判所エ訴狀添翰ノ儘差出シ候處受理シ雖ク被申聞候付種々議論モ申上候得共ツヤマリ行政上チ以テ更ニ縣令殿ノ任ニ依テ定メラレタルトノ御論ニテ我等其法令ニ昧ク司法ノ御論ニ基キ控訴願下ゲ仕再本縣エ立戻リ歎願仕候處御採用難相成旨御指令ニ相成其砌縣ノ御差圖ニハ無之候得共内務省チ始玄老院ト云フヘ歎願ハ勿論建白チモセヨトテ下民ニモ許可有ルナレバ其餘ハ適宜ニスベシト被申聞候事故當御省ヘ歎願ニ罷出候事ニ御座候間何卒當御省ニテ御處分奉仰度ト願ヒ申上候テ引取ルナリ

二十九日　出頭ス服部匡殿ニ會ス歎願書悉皆御下ゲ戻シニナル縣ノ添翰チ受ルノ期限モアラント御伺申上候處内務省ニ於テハ裁判所ト違ヒテ右等期日ハ無ケレドモ何分縣エ添翰チ願ヒテ吳レルカ不吳ノ言チ聞ケバ卽日ニ引取リ直ニ其旨チ當省ニ申出ベシト被申聞候事猶歎願書皆受取ニ相成候付其證ニ出ス如左

受取證

一入會地境界改定願　正副二冊
一見込上申書　同　二冊
一一號二號三號書　三冊
一繪圖面　一枚

右奉受取候也

明治八年七月二十九日

和歌山縣第七大區六小區
串本浦總代
神田文左衛門　印
濱田治兵衛　印

三十日　濱田發足汽船邊約シ戻ル

三十一日　濱田本縣エ添翰チ受ケニ發足ス最米國ノ郵便艦ニ乘リ組ム森島安兵衛公ト同船ス其時安兵衛公エ金子ノ書面チ託ス

八月一日　略

八日　午十二時頃濱田公歸府ノ旅宿往復九日振ナリ愉快々々而後縣廳ノ次第チ聞ク尚同公ノ日記チ見ル縣ノ不都合笑ニ耐ヘタリ同日午後五時福田氏エ推參シ右ノ次第チ談ズ卽時予ガ持參ノ歎願書ニ加筆チ下ス六時半頃暇乞ス

九日　縣ノ添翰不ル吳由緣チ上申スルニ付願書チ認メル午後五時ヨリ濱田公牛込葵川君エ行ク八時半頃歸ル

十日　午前九時半頃願書チ携ヘテ内務省ヘ出頭ス服部匡殿御出勤チ尋テ手札亜ニ書類チ出ス取次ノ曰ク服部殿ハ病氣ニテ不參ト我等云フ乍然同御察ノ樂エ御出シ下サレト願フ然ラバト云テ書類チ取次ギ吳ル又持戻リ暫時相待ベシト云フ而後一人御出席則原田尙敦殿ナリ最初ヨリノ手順チ知ラザル故ニ一應手順チ尋ネラル我等先月十八日歎願書差出シタル件ヨリ二十九日御下ゲ渡シニナリ夫ヨリ縣ヘ添翰チ申受ニ參リシ次第チ申述ス原田殿ノ曰ク然ラバ今日ハ引取ナサイ是ヨリ直樣

服部氏ノ宅エ書面ヲ以示シ合セ今日中於宿ヘ可否報知ニ及ブトノ事ニテ原田氏ト御省内ヲ別ル同日報知ナシ

十一日　休暇

十二日　午前九時半頃我等兩名出頭玄關番衆エ導ル服部殿ハ御出勤カ不參カ不參ナラバ同御寮ノ衆エ願書ノ取次ヲ乞フ處早速及ビ服部殿ハ不參ナレバ原田直敬殿エ御面會ヲト乞フ處早速原田氏玄關番ノ詰所エ御出席シ申聞ラルニハ過ル十日早速服部氏エ打合セ候處服部氏ノ申シ送リシニ串本ノ者等モ何レ心セキニアル趣ナレバ書類ハ受理シ置ベシトノ事ニ付書類ハ御出シ成サエ併ナガラ先掛リノ受付ケハ和田氏ナレバ同人エ御出シ成サエ此方ヨリモ同人エ示シ合セ有之コトヽ懇々申聞ラル然ラバトテ玄關帝所エ賴ミテ和田氏エ願書悉皆差出ス暫時同所ニ休息ス午前十一時頃原田殿同所エ御出席シテ曰ク願書ハ悉皆只今落手受理スト乍然此ノ事件ハ原ト服部氏ノカヽリニテ主任ノ事ナル故同人出勤無クテハ不都合最同人モ病氣追々快然ト聞シコトナレバ不日出勤スト被存ル暫時乍御逗慇懃宿ニ控ヘ成サエ同人出勤アラバ速ニ協議取調ノ上當省ヨリ御旅宿エ報知スルト懇々トシテ被申聞踊デ承諾ス

十三日十四日　無事

十五日　濱田玄關番詰所迄服部氏出勤ノ否ヲ問ヒニ參ル同日出勤無之由

十六日十七日十八日　無事

十九日　書面ヲ出ス則鯨漁一事ナリ

二十日　出願ス原田氏ニ面會ヲ乞處暑勞ノ由ニ付服部殿ニ面會ヲ乞處早速御出席ニ相成而シテ曰原田氏エ過日差出サレタル願書慥ニ落手致タルナリ乍然右ハ縣廳ヨリ添簡ヲ吳ザルトノコトニ候得共夫レ迄手ヲ盡ス上ハ順序ニ觸ルト雖モ當省ニ於テ採用無キ時ハ人民皆ル困ルコトニ付必民幡ヲ害スル譯ニハ無之ト懇ニ御口達ヲ被下而後文左衛門縣廳ニ添簡渡サヽル云々ヲ委曲陳述セント濱田ヨリ聞ク書キ取リヲ持參シ廣瀬殿ト濱田ト應接ノ手順ヲ申上ルヨク服部殿御聞キ取リ吳レ候上委細承知致シタガ我モ漸ク昨十九日出勤シタルコトナレバ是ヨリ追々協議シ及處分ト尙地理察エ打合セ同察ニ於テモ協議スルコト故暫時宿所ニ控ヘ居ルベシトノ事ナリ決シテ閑等ニ致シ置キ不申ト懇々御申聞アリ然ラバ宜シク願ヒ升ト云テ内務省ヲ下ル

二十一日　無事

二十二日　午前十時頃御差紙到着ス明二十三日午前九時出頭可有之トアリ

二十三日　依命文左衛門出頭ス聊御推問アリ而後服部殿ノ曰ク此程本縣ヨリ添簡吳レザル事情ヲ書面ニ認メ内務者御中宛ニテモ宜シク候間一通差出シ候樣トノコトニ付熟考ルニ我輩十二日願ニ事情ヲ被セタルヲ御覽不被下歟ト存シ即刻答右事情ハ過ル十二日原田氏エ願書差出シ候節乙印ノ願書御一覽被成下候哉如何ト相尋候處服部殿御持參ノ書類中探索シ何ンカト云文左衛門此分ニテ正副二帖御座候旨申上候處服部殿ナラント評議モ致シ見ルト雖モ未ダ不決然レドモ出張シテ取調ル方ハ如何ニモ敢果行キ便利ナラント云フノ議事アルナレドモ未ダ何レトモ不決此儀ハ只服部殿ノ推量迄ノ事ト申聞ラル何分詮議中ノコトニテ未ダ地理察エモ廻ハサズ當局ノ詮議中ナレバ今暫ラク旅宿ニ控ヘ可相待決シテ等閑ニシ置カヽカラ然樣心得ルベシト懇々御申聞ニナル我等言フ何分モ宜シク願ヒ升ト挨拶シ御省ヲ下ル但シ此時服部殿ノ曰ク過日ノ瀨ノ言ヒシハ五月二十三日第八十三號ノ布告ヲ誤解シテアルナリ抑モ其レ等ヨリ談ジテヤルノ心得アルトノ御言葉モアリ何分今暫ク待ベシト申聞ラル

六日　休暇

七日　大阪エ電信ヲ報ズ「カネハヤクノボセカエシタテカタトヽイタカ」午後二時

十日　大阪ヨリ書面來着ス十一日限リ爲替手形添早速本船町島田新七ニテ金百五拾圓受取

二十六日　先旅宿逃雀町ヲ去ツテ更ニ松下町五番地房州屋太兵衛方ヘ轉宅（下略）

（其一二）　　串本町藏

出京日記（一部抜抄）　　神田文左衛門

明治十一年二月七日　乘船出帆同夜太地浦ニ一泊ス

八日　太地浦出帆同夜島勝浦ニ一宿ス

九日　島勝浦出帆三重縣下志摩國ハザコ浦ニ着ス午後三時ナリ直ニ支度ヲ成シ陸地ナシテ磯邊エ參リ一宿ス

十日　朝磯邊大神宮ニ參拜シ直ニ發足シ同日伊勢大神宮ニ參拜ス同夜妙見町ニ一宿ス

十一日　同所發足シ神社港ニ歩シテ一宿ス

十二日　朝同所ニテ乘船午後三時頃愛知縣下豐橋ニ着ス直ニ上陸發足シテ同夜二川驛ニ一宿ス

十三日　二川發足同夜袋井驛ニ一宿ス

十四日　同所發足シ同夜岡部驛ニ一宿ス

十五日　岡部ヲ發シ同日午後一時頃靜岡縣清水港ニ宿ス十六日七日滯留シ

十八日　午後五時頃汽船ニ乘リ組ミ泊ス明テ

十九日　航海中同夜午後十一時頃神奈川縣横濱港ニ着シ直ニ上陸シテ一宿ス

二十日　同所發足汽車ヲ求メテ午前十時頃東京府下東松山町五番地高野たけ方ニ無事着ス

（中略）

十一月十一日　西圓寺實譜神田文左衛門出頭ス午後二時頃訴庭ニ入ル官□□氏ノ曰ク今日其方等ヲ呼出シタルハ最前差出シタル訴件ノ内惣代願書ハ訴訟用罫紙ヲ用ユルハ當縣ノ成規ニ付該惣代願書ヲ認替ヘ可差出トノコトニ付然ラバ右差出シアル願書ヲ御下ゲニナリマスカト相尋ル處官曰ク之レハ其ノ區會議所用ノ罫紙ニ付假リニ受理シ置キシコトニテ素ヨリ認替サセル心得ニ有之ト雖モ左シテハ自然其方等ハ困ルデアルト察シ其以來司法卿ニ伺ヲ經尚又正院ニ於テ決譯濟ニ相成候儀ニ付被告ヲ呼出スニハ假リニモ當廳ニ供エ置カネバ差支ルカラ右惣代人願書ハ假リニ受理シ置キ訴訟用罫紙ニ認テ差出セバ其節引換下ゲ渡スナリトノコトニテ直ニ右受書並ニ上申書ヲ呈シテ退出ス午後二時半頃ナリ同日直ニ郵便書面ヲ差出スナリ

十五日　岩橋氏ヘ代人願書中村氏印形入念ノコトヲ申送ル並ニ財一郎エモ一封遣ス

十六日　（省略）

二十日　田島安次郎公エ金子云々並新聞ノ通知

二十七日　午前一時頃前田清五郎公參着同日通知ス並金子落手ノコト

二十八日　呼出狀落手ス尤明二十九日出頭之事然ル處西圓寺公ハ差支ニ付一日ノ猶豫ヲ願ヒニ書付持參ニテ二十九日文左衛門持參出頭ス

同日伊藤判所殿（伊藤氏ニアラズ判事補某氏ナリ）御出席シテ曰今日呼出シタルハ先達テ其方等ヨリ差出シタル控訴ノ儀ハ行政ニ關スルハ言ヲ俟タズ故ニ内務省ヘ係リ訴出タル付正院ニテ内々協議ニ及ビシナリ然ル處該件ハ内務卿ヲ被告ニスル筋合ニアラズ和歌山縣令ヲ被告ニシ相當ノ裁判所ヘ出訴スルノ筋合ナリト故ニ當廳ヨリ願下ゲヲ致シタガ如何然レドモ強テ願下ゲヲセザルト申スナラバ當廳ヨリ却下スルノ外ナイト懇々御教解ヲ蒙

ル。文左衛門ノ答今日ハ兼テ書付ヲ以テ願上候通リ西圓寺實譜ハ不參ノコトナレバ右被仰聞ノ云々ヲ申談シテ明日出庭シマスルカラ何卒延日願ノ通リ猶豫ヲ願ヒマスト。官ノ曰然ラバ西圓寺トヨク相談ヲ致シテ明日ハ必ズ出廳スベシ其方ノ言ニ任スト。即時明日出頭ノ受書ヲ差出シテ退省ス

三十日　兩人出頭ス官曰（判事補某）西圓寺ニサジテ昨日神田文左衛門ニ達シタル趣ヲ聞取シナラン該件ハ純然タル行政ニ關スル物□テ正院ニ何ヒシコトナリシカ被告ノ目途逐ヘタルモノナランカ。云々西圓寺答テ曰兼テ昨日御申聞ケノ趣ヲ神田文左衛門ヨリ承リマシタカ當廳ヨリ御達ノ通リ和歌山縣令ヲ被告シ相當ノ裁判所ヘ訴ヘ出ニ於テハ内務卿御指旨ヲ取消サヤル限リハ條理ニ叶ハザル樣ニ心得マス如何トナレバ假令縣令ノ指令ヲ訴庭ニ破毀スルモノ其ノ上官内務卿ノ指令ノ殘リテアルトキハ如何ナリマシヨ了解シマセヌト。官曰ク之レハ是官ヨリ表向キ申達ス可キ筈ニアラネド純然タル行政裁判ノコト故過日來正院ニテ專ラ内務卿ヲ被告スルノ筋合ナラズ和歌山縣令ヲ被告スルノ筋ト内決シタルナリト。西圓寺答テ曰正院ニ於テ如何御内決シタルカ人民ノ何ヒ知ル處ニアラザレドモ若シ被申聞ノ通リ御内決シタルトナラバ生恐正院御内決ハ御見込ミ違ヒト存ジマスト。官曰然ラバ何トカ處分スルカラ暫時訴庭ヲ退セヨト。兩人然ラバトテ控所ニ下ル十一時頃ナリ午前十二時十分頃訴所受付ヨリ呼出シアリ兩人出頭ス受付衆曰ク兩人共今日ハ御用濟ミニ成タルカラ引取ベシト猶曰ク追テ達スル迄控ヘ居レトノ事ニテ徐ク退門ス

十二月三日　出頭ノ召狀ヲ受ケ同日兩人出頭ス訴庭上檀判事伊藤氏中檀ニ判事補一名下檀□部一人出席□□判事補口供書ヲ讀ミ上ゲ直ニ西圓寺公ニ下ス次ニ文左衛門拜讀ス其怪敷明文ナリ依テ文左衛門口上ヲ以存意ヲ申述ル處右口供書換ヘテ再ビ兩人エ下ス直ニ調印ス判事伊藤氏曰ク裁判ヲ申渡スト雖モ承ルニ裁判狀ヲ讀ミ下ス直ニ落手受書差出シテ退門ス

同月十八日　東京出發二十日早天大阪ニ無事着ス

（其一三）　以下對二色境界論爭文書二通　串本町藏

明治十三年第四百五十五號即チ和歌山縣紀伊國牟婁郡串本浦ヨリ同縣同郡二色村ヘ係リタル境界爭論控訴一件ニ付原告ガ呈供セル書類及ビ出庭度數等ノ御檢印願

一紫色罫紙　内譯　〆六百十二枚

一證據物寫　二百三十枚宛　正副　四百六十枚

一控訴狀　九枚宛　同　十八枚

〃　外ニ

一繪圖面　〃八枚

内譯

一測量繪圖面　但シ十六枚繼　二枚

一同　十枚繼　二枚

一見取繪圖面　同　六枚綴　二枚
一原十五號繪圖面　同　二枚綴　二枚

〃

一出庭度數　〃二十八度

一明治十三年三月十七日　控訴狀進呈　總代人二人出庭
一同　年同月二十二日　控訴狀中正誤願ノ爲　同
一同　年五月三日　被告答書下附　同
一同　年五月七日　右答書返納　同
一同　年六月二十三日　召喚ニ付代言人　一人出庭
一同　年七月二十一日　同　同
一同　年九月十日　原被連署ヲ以テ延期願　同
一同　年十月十日　右同斷　同
一同　年同月十八日　對審　總代人代言人二人出庭
一同　年同月二十一日　同　同
一同　年同月二十五日　原十□□十九號證ヲ進呈ス　同
一同年十一月二十九日　召喚　同
一明治十四年二月七日　判事御差廻御逸アリ　同
一同　年同月十日　同
一同　年同月十五日　同
一同　年同月二十二日　延期ヲ願ス　代言人出庭
一同　年三月七日　上申書進呈　同
一同　年同月三十日　御貸下書類返上　同
一同　年四月二十六日　問答書ノ答ヲ呈ス　同

一同　年五月十九日　召喚　總代人代言人二人　同
一同　年六月十日　論辯書進呈ノ延期願ス　同
一同　年同月三十日　右同斷　同
一同　年八月十二日　被告書中貸下願　同
一同　年九月八日　書面進呈　總代人代言人　二人出庭
一同　年同月十四日　召喚對審　同
一同　年十一月七日　召喚郵便　代言人　一人出庭
一同年十二月二十三日　費上納　同　同
一同年十二月二十七日　同御裁判宣告

外ニ木村ヨリ提訴ノ爲メ上京實地測量ノ爲メ歸村往復四度
右之通リニ有之候間御檢印被成下度候此段奉願上候也

明治十五年一月十六日
東京控訴裁判所
判事　富永冬樹殿
原告代言人　小島宵吾　㊞

（朱書）
書面相違無之ニ付明治十四年十二月二十七日當廳ニ於テ言渡シタル裁判ノ通リ訴訟入費償却規則ニ照シ被告二色村ヨリ可受償却者也

明治十五年二月九日
東京控訴裁判所
判事　富永冬樹　㊞
判事　西田忠之　㊞

裁判所印

（其一四）以下對上野境界論爭文書三十一通　串木町藏

（朱書）第一號

木縣ヘ差出候受書之寫

御縣下第七大區六ノ小區
串木浦　商　神田文左衛門
同　農　森島安兵衛
右同區原告鈴木伊三郎鈴木民八和田林助境界爭之儀ニ付訴出候付右訴訟御下ゲ相成今二十三日中ニ示談候樣若シ示談相整兼候ハヾ明二十四日答書持參出頭双方對決可受旨御申聞ケノ趣奉畏候此段御受申上候　以上

明治七年第四月二十三日
神田文左衛門　印
森島安兵衛　印
附添　商　森島岩之助　印
聽訟御課

同　答書之寫

和歌山縣第七大區六ノ小區
串木浦總代
被告　商　神田文左衛門
同　商　森島安兵衛

境界爭之答書

一舊記　一冊

一繪圖面五枚綴　同縣同區
一附錄　一冊

上野浦總代
原告　商　鈴木伊三郎
同　農　鈴木民八
同　農　和田林助

右同區上野浦原告鈴木民八鈴木伊三郎和田林助ヨリ境界爭之儀訴出候付今二十四日出頭可致樣御聞ケニ相成承知仕御答申上候

串木浦西濱端ナル網代亜網代山ト申スハ元來栖見崎ヨリ船瀬迄ノ事ニシテ其餘船瀬ヨリ大谷西ノ瀧々ノ谷日迄海濱ヲモ總テ西濱端ト云ヒ及笠島坂ヨリ尾ノ浦岐山迄ノ海岸海面ヲ總テ東濱端ト云ヒ最東西共濱端山水流之分ハ當浦在持ノ野山ニシテ既ニ此ノ岐山ト申所ハ出雲浦トノ分界ニ罷在今日ニ至迄鞠故障無之山海共支配仕來リ猶貞享三年寅二月村法ニ依テ惣野調ノ舊記等モ有之其頃迄ハ執レヨリモ故障申係ケ候者無之其以來如何之事故有之候哉沖ノ藻臥島ヨリ下リ之網代ハ上野浦支配同所ヨリ上リノ網代ハ串木浦ノ支配ト境界相立有之處實暦三年ニ至リ彼ノ沖ノ藻臥島ヨリ上リ海面海濱ニハ鞠異論無之候得共同所地方ノ野山ハ御留山ニ被仰付其以來論所魚梁山ト申シ暫ハセ右御留山ニ付時々御逸向キハ勿論山林見逐ヒ等合番ニ仕來リ罷在候然ルニ今般山反別取調可逸尚御布告ニ付夫々取調仕候内ニ右御留山之儀ハ從前縱横ノ丁間ヲ逸シ來

ル而已ニテ境目書ハ双方確乎タル證據無之候得共沖之瀧臥島ヨリ網代ノ分界判然タルニ付テハ同所地方ノ野山ハ所謂論所鎌留山ニ被仰付有之儀ハ顯然ニ候乍然從前遠來候丁間ニ憑ル時ハ凡縱三丁半位ノ延地ニ相成右延地チハ今般上野浦在持ノ野山ト被申立候得共舊來上野浦ヨリ支配等被致候儀更ニ無御座今日ニ至迄双方異論無之儀ハ明白ニ候然ルニ上野浦ニハ方今實地御改之御趣意チモ奉載不仕從前不取調之丁間チ而已頻テ申張候儀不當之至ト奉存候右論所魚梁山之儀ハ當浦駒民共頗ル活計之要所ニ付不奉顧恐奉歎願儀ニ御座候間此段御憐察可被成下候右上野領ト被申立候地ハ素ヨリ鎌止メ總山之内ニ相違無之候間從前之通リ官林ニ被立置候ハヤ當浦ニ於テ有功ノ甚シキハ筆紙ニモ難述斯ク申上候得バ唯私情チ以テ自浦ノ部合振リチ申立候樣御賢慮之程奉恐入候得共上野浦ニハ無功ノ地殊ニ官地チモ强テ爭ヒ申スニ付テハ後年ニ至リ深意無キニシモ非ズト殆歎息之至ニ不堪候付別紙圖面相添奉入御覽候翼クハ實地檢査之上御改正之御處置被爲下置候ハヤ重々難有仕合ニ奉存候誠ニ以御多事之御時勢中奉恐入候得共此段偏ニ奉歎願候依之答書奉差上候　以上

明治七年第四月二十四日

商　神田文左衛門　印
商　森島安兵衛　印
同縣同區串本浦
代書人　商　森島岩之助　印

和歌山縣權令神山郡廉殿

同　答書附錄之寫
以附錄奉願口上

上野串本論所字魚梁山
一官林松並ニ雜木山　一ケ所
但シ寶曆三年ヨリ鎌留ニ被仰付候也

右魚梁山官林伐木ノタメ去ル明治戊辰年御拂下ゲニ可相成御沙汰ニ付其砌御立置奉願上候處當浦ノ苦情深ク御憐察被爲在今日ニ至リ諸木御立置ニ相成候段浦中一同難有仕合ト抃躍之至奉存候乍恐向後迚モ御高慮ニ依テ上ハ木並ニ土地等御拂下ゲニモ相成候ハヤ必當浦ヘ御寶下ゲニ被爲成下候樣仕度奉願上候縱令御寶下ゲニ成歟候トモ伐木致シ一朝之利益ニ走ル次第ニハ無之綱代魚梁ノ爲ニ永ク立置可申ヨトニ至テ漁民共活計チ立ツルノ基礎ト可相成場所ニ御座候間此段御憐察之程伏シテ奉願置候　以上

明治七年四月二十四日

串本浦總代
神田文左衛門　印
同　森島安兵衛　印
代書人　森島岩之助　印

和歌山縣權令神山郡廉殿

同　再答書之寫

第七大區六ノ小區串本浦
商　神田文左衛門

雜濫出入訴之再答

同　森島安兵衛

右同區上野浦鈴木伊三郎鈴木民八雜濫出入之儀訴出候付答書差上對決之上厚キ御理解ニ基キ再御答申上候此度上野串本浦論所魚梁山境界爭之儀官林延地ノ處ハ全ク延地ニ相違無之從前ノ通リ境界相定置候樣御理解被成下候付テハ双方示談之上濟口差上可申答之處原告人承服不仕再訴奉差上候付再對決御申付被成下双方ヱ段々御理解之趣深ク奉感服猶及示談候處原告人申分ニハ右總山之中ヱ兩浦差配分ケノ標木チ御點施成戴キ山番チモ銘々ノ限リチ立度抔ト被申候右等ハ後日何トカ勘辨振モ有之哉ニ相疑ヒ候付テハ却テ後年論チ釀スノ基ト奉存候得共遠テ申張居候付熟談難相成御座候間每々御手數之段深奉恐入候得共此段今一應御理解ノ程奉願上候

明治七年五月十九日

神田文左衛門　印
森島安兵衛　印
第一大區二ノ小區元寺町一丁目
代書人　竹中又兵衛　印

和歌山縣權令神山郡廉殿

同　受書之寫

第七大區六ノ小區上野浦
原告人　鈴木伊三郎

御受奉申上口上

同　鈴木民八
同區　串本浦
被告人　神田文左衛門
同　森島安兵衛

右原告人兩浦境界爭之儀奉訴願候付對決之上段々御理解之趣承服仕候得共示談濟口ノ場ニ至リ候候付再訴答書奉差上候處今般區長城產大郎御呼寄セニ可相成旨奉恐畏候然ル上ハ私共一旦歸浦仕區長同伴ニテ再出頭仕奉願上度奉存候間此段御受奉申上候　以上

明治七年五月十九日

鈴木伊三郎　印
鈴木民八　印
第二大區四ノ小區今福松
士族
代書人　小林胃湯　印
神田文左衛門　印
森島安兵衛　印
第一大區二ノ小區元寺町一丁目
士族
代書人　竹中又兵衛　印

和歌山縣權令神山郡廉殿

（朱書）
第二號證裁判狀ハ第三號控訴中ニ記載アルチ以テ略ス

（朱書）第三號

控訴狀之寫

和歌山縣下紀伊國牟婁郡
第七大區六小區串本浦
被告　商　神田文左衛門
同　雜　濱田治兵衛
同　上野浦　鈴木伊三郎
原告
同　農　鈴木民八
同　農　和田林助

官林境界爭之控訴

明治七年四月二十二日　和歌山縣　聽訟課へ出頭ス
但シ原告人ノ訴狀ヲ下ス
同　二十四日　答書差出ス
但シ原告ノ訴狀ヲ返上ス
同　二十五日　双方出頭對決ス
御出席　神山郡廉殿　傍聞ス
山木藏之殿　聞糺シ
北　垣殿　傍聞ス
五月五日　双方出頭ス
御出席　北　垣殿　御理解
同　十八日　再聞糺ノ上御理解
御出席　神山郡廉殿
但シ清口書上ゲヨト迫ラレ候事

同　十九日　再答書差出ス
御出席　北　垣殿　御申渡シ
但シ此時ニ當テ副區長城彦太郎呼登ストノコト
同　十九日　原被連印受書差出ス
但シ此時ニ當テ双方歸村ス
六月二十八日　上願差出ス
但シ城彦太郎出縣後說諭ノ廉ニ不足アリテナリ
七月五日　双方出頭ス
御出席　課長渡邊殿　如前御理解
同　九日　受付迄出頭ス
但シ此時手續キ書ノ代リニ新宮在勤所ヘ差出シタル訴狀ヘ愚考三件ヲ添出ス
同　十日　双方出頭ス
御出席　渡　邊殿　御申渡シ
但シ實地檢査スルトノ事
同　十二日　受書差出ス
但シ双方歸村ス
九月五日　上願差出ス
但シ實地檢査ヲ促シ願ノ
同　七日　再願差出ス
但シ朱書ヲ給ハル最九月五日ノ上願ヱ
十二月五日　双方立會實地檢査ヲ受ル
御出張官員　岡本政良殿

同　山　木殿
附添　小區長　城　彦太郎
戸長　佐々木虎之助　訟庭ヱ双方出頭ス
本年一月二十三日
御出席　岡本政良殿
但シ御裁判書讀ミ聞カセノ上ヱ御下ゲ渡シニナル
同　二十七日　書付差出ス
御出席　岡本政良殿
但シ御裁判ニ不服今一應東京司法省ノ裁判所ヘ上告仕度ト申上ル右不服ノ件々御尋アリ恐入リ御免ヲ願フ許サレズ猶慇ヲ乞フテ訟庭ヲ下ル再ビ出頭ス夕陽ニ至ル歸宿仕候ナリ
同　二十八日　出頭ス
御出席　岡本政良殿
但シ不服ノ件々少ラク申上ゲ尚ホ砂リ濱ノ儀トアジロ船ヲ山上ヨリ指令スルノ廉トヲ御伺申上候處濱モ上野ノ區域ナリ山上ヨリ船ヲ指令スル廉ハ上野ヘ相議スベシトノ御意ヲ下ス何分上告仕度御添翰ヲ願ヒテ訟庭ヲ下ル

（朱書）

第七大區六小區
第二號　牟婁郡上野浦農　鈴木伊三郎

（附箋）

第二號ニアラズ第三號中ノモノニシテ第二號ハ畧シテ記セズ之ヲ假リニ二號トナセシモノ

原告人　鈴木民八
不參　鈴木喜平
和田林助
潮崎仁平
同　串本浦
商　神田文左衛門
濱田治兵衛
被告人　南　善三郎
神田雄次郎

其方共儀上野串本兩浦懸リ官林境界爭論訴訟ニ付遂吟味處上野浦ヨリハ過ル寶暦三年境界爭ニ付兩浦懸リ御留山ニ相成爾後寛政十二年兩浦一紙連名屆留ニ長七丁横平均九十間ト記載且亦文化二丑年海岸測量ニ付屆留ニモ西ハスクミ迄長七丁ト有之ニ付是レヲ標據トシ境界東ハ松立木限リ西ハスクミ大岩ノ尾限リ其餘ハ不殘浦持地ト申立串本ヨリハ東ハ大谷西ノ瀧限リ西ハ灣洞ノ鼻瀛臥島限リニテ網代稼ギ場所區域ト同樣ニ相心得祖在其他貞享ノ度當浦中牛野飼ニ付申合セ書ニハ住ミ崎迄ヲ本浦分ニ相立有之云々申立尚ホ上野浦ヨリハ網代呂ハ自然ニ侵奪致サレシ段申立双方共是迄自浦ノ分域ヲ保守セズ故ニ慰紛論ヲ生ズルニ付今後官林ハ東松立木限リ西大岩ノ尾限リ境界ニ相定メ兩浦懸リヲ廢止シ更ニ上野浦屋那官林其他上野浦榜示ニ相定且是迄兩浦ニ記傳スル縱横間數並榜示等曖昧ニ屬シ確書無之ニ付取消ス間此旨相心得依テ訴訟申入置ハ

双方ヨリ償却可致事

但シ海面境界ハ灣洞之端兩藻臥島之間中眞限リト可相心得事

明治八年一月廿四日　　和歌山縣令　神山　郡廉　印

下ゲ紙

本文　上野浦榜示ニ相成候土地ハ官有ノ名稱追テ管内一般處分ノ節更ニ可相述事

上野串本兩浦懸リ字魚梁山官林境界爭ニ付去ル明治七年四月廿四日和歌山縣廳エ別紙答書並圖面舊記等差出候處廿五日原被告人聽訟課エ被呼出即日對決被申付御出席正面ニハ山本誠之殿傍聞スル神山郡廉殿及北垣殿ナリ右御聞糺シノ件々双方ヨリ具ニ申上候處追々御取調之上エ御處置チ下ストノ御意チ蒙リ訟庭チ下ルル然ルニ五月五日命ニ依テ双方出頭ス御出席北垣殿始テ御理解ニハ右爭論スルノ地ハ官林ノ延地ト見做セ官林官地ハ是レノミナラズ延縮モ有ル往々不體裁ノ流習ニアルト御申渡シ御座候處上野浦原告人綱代呂場ノ邪事チ願ニ申立承服不仕故ニ御再議ノ上エ御再解ニ相成綱代呂場ノ苦情アラバ其レハ別段ニ出願スベキ筋ナリ今般ノ訴狀ニシテハ漁業場ノ儀更ニ關係ナシ右ハ官林ノ延地ト見做シテ双方示談セヨ猶代書人共モ説諭セヨトノ御申渡シ御座候付於串本浦ハ服仕其後示談ニ及ト雖モ不整濟ロニ至ラズ然ル處同月十八日命ニ依テ双方出頭ス御出席神山郡廉殿再御聞糺シニ相成即時右同樣官地ハコレノミナラズ動モスレバ延縮ノ有之事トテ双方ノ申口チ聞キ圖面ニ憑レバ實地チ見ルニ不異トテ厚御理解チ下ストト雖原告人承服不仕苦情申上候付猶懇々トシテ御理解チ下シ何分双方眞心ニ立歸ツテ考ヘテヨリ示談シ濟口書今日中ニ差上ゲヨト御申渡御座候得共覓角原告人承服不仕故ニ濟口ノ場ニ至ラズ無據十九日被告串本ヨリ再答チ以テ今一應御理解被成下度上申仕候處神山郡廉殿御賢慮チ以テ同管轄第七大區六小區副區長城彦太郎御呼寄セニ可相成旨聽訟課ヨリ被達承知仕候其後六月廿一日副區長城彦太郎同伴シ再和歌山表ヘ到着ス翌廿二日城彦太郎縣廳エ出頭シ廿三日ヨリ城彦太郎説諭被下候得共被告串本ニハ不服然ルニ七月五日命ニ依テ双方出頭ス御出席課長渡邊殿右爭論ノ地ハ官林ノ延地ト如前御理解チ下スト雖モ原告人承服不仕益苦情申立候付渡邊殿ノ曰ク縣ニ於テハ官林ノ延地ト見究メタルカ上野浦ノ所有地ト申シ張ルハ確乎タル證有ル歟證據アラバ差出ス可シト議論ニ及バレ候處上野浦ニハ證據無之候得共何分從前之通リ七丁ニ一丁半ノ官林チ除クノ外上野浦所有地ニ被成下度猶實地御檢査チモ願ニ願立候付不得止同九日双方ヨリ手續書チ差出ス串本ニハ愚考三件チ添テ出ス翌十日依命双方出頭ス御出席渡邊殿ノ曰ク今般ノ事件追々取調之上エ再ニ理解スト雖モ上野原告人承服不致故實地檢査ノ上エ裁判チ下ストノ事被申渡同十二日右受書差出シ歸村ス九月五日實地御檢査チ奉促候處右願書ヘ

朱書チ給ハル則拜受同十二月五日兩浦立會ノ上御見分チ受御出張ノ官員岡本政良殿及山本殿ナリ次ニ小區長城彦太郎戸長佐々木虎之助附添右御檢査相濟ミ止宿所エ引取リノ上双方呼寄セ御尋モ御座候然ル處本年一月廿三日縣訟課エ出頭可有之旨御書到着シ命ニ依テ兩浦出頭ス御出席岡本殿ナリ姓名チ紀サレ廿四日御出席岡本殿ナリ前條寫シ之通リ讀聞セ御下ゲ渡ニ相成候雖然昨年中再度出縣シ再三ノ御理解アリシト大ナル變化ニ付即時愚昧ノ心頭ニ至ラズ殆遂惑仕候右ニ付同廿七日串本ヨリ御裁判ニ不服今一應東京司法省御裁判所ノ御審判チ奉仰度右書付チ以テ奉願候儀ニ御座候翌廿八日出頭ス御出席岡本政良殿ヘ不服ノ廉少ラク申上候テ何分今一應控告仕度御添輪チ奉乞候段誠ニ以テ奉恐入儀ニ御座候得共コレガタメ村民多クノ入費モ相立且ツ空事ニ光陰チ送リ候儀ハ乍恐和歌山縣ニ於テ座上ノ御鑑定邊ヒヨリ依テ來ズト奉存候強テ縣廳ノ御裁判ニ服セザルニハ無御座候得共愚案スルニ昨年中再三ノ御理解モ熟ク遂吟味ノ上ナリ今ノ御裁判モ熟ク遂吟味ノ上ナリ何ゾ變化スルノ甚シキヤ如是變化ノ甚シキ之レニ依テコレチ視レバ昨年中ノ御理解ハ不鑑定カ今ノ御裁判ハ不鑑定カ愚昧ノ心底ニ至リ兼不得止奉控訴義ニ御座候猶亦別冊ノ内ニモ奉申上候通リ魚梁山ハ上野浦ノ區域ニシテ綱代呂場ハ串本浦ノ區域ナルトキハ字義ノ上ニテ條理ニ背キ候樣且綱代呂ノ漁業チ營ムニ魚梁山ノ茂ルト茂ラザルトニ依テ害功ノ二ツニ關ルハ言チ待タズ今怪ヤナ山チ上野ノ區域ト被定候テハ草木生立ノ目的無之自然串本浦綱代呂漁業ノ衰微チ醸スニ至レリ雖然今日土地ノ分界チ論ズルニ私情チ以テスルノ律ハ更ニ無御座候得共串本ノ貧ハ恰モ一區内ノ貧ナリ串本ノ富ハコレ則一國内ノ富ナリアジロハ串本ノ稼場ニシテアジロ山ハ上野ノ區域榜示ナルトキハ綱代船チ山上ヨリ指令シテ運退チ付ルモ忽差支申ス道理ト奉存候如是ノ不都合ハ事物ノ定理ニ於テ更ニ有之間敷愚考仕候勿論兩浦ヨリ買スル漁税ノ上ニテハ串本ハ上野ヨリ凡二倍半三倍位モ上納仕來リ候ハ過半綱代漁ノ見込ニ關ルコト顯ナリ猶亦兩浦ノ人口戸數ト耕地持高等チ比較スルトキハ素ヨリ串本ニ於テハ斯アジロ稼ギ場ノ可有筈ト奉存候右アジロ稼場アルト雖モアジロ山ノ暗ラミナクテハ魚ノ寄スルニ理ナク自然村民共活計チ立ツルノ基礎ニ放レ候儀歎ケ敷奉存候何卒格外之御詮議チ以テ今一應御改正之御審判奉仰候

明治八年二月二日

商　神田文左衛門
雜　濱田治兵衛
和歌山縣下第一大區二ノ小區
元寺町一丁目
代書人士族　竹中又兵衛

司法省御裁判所

（朱書）第四號

司法裁判所ヱ何之寫

不審御窺

御裁判申渡シ書中ニ屋那山ト御記載御座候右屋那トハ字義愚意ニ解セズ候串本浦ニハ魚梁山ト書テヤナ山ト讀ミ習ヒ聞習ヒタルアリ此ノ魚梁山トハ俗ニアジロ山ト云フノ字義ト愚考ス屋那山ノ字義一應御伺奉申上候事

凡ソ海面ハ山ニ屬スル平山ハ海面ニ屬スルカ是等ノ定理ハ山海ノ依テ起ル所以ヲ知ラザレバ愚意ニ明リ難キハ勿論ニ候得共今後アジロハ串本ノ區域ニシテヤナ山ハ上野ノ區域ト被定候儀如何ノ意味有之事ニ候哉御伺奉申上候

双方共是迄自浦ノ分域ヲ保守セズト御記御座候得共海面海濱ニハ更ニ兩浦ノ爭論ヲ開カズ既ニ嘉永七寅年洪濤之節モ御所ノ御用材筏船破レテ御材木網代呂ノ海岸ヱ流レ寄リ且亦同時米船一艘荷物積入ノ儘アジロノ邊ノ砂リ濱ヱ打上ゲラレ右雜船世話振差配等串本ヨリ致シ有之儀ハ自他ノ知ル所ニ候假令魚梁山ハ上野ノ榜示ニ在ルト雖モ濱ハ素ヨリ串本ノ濱ニ屬シテ串本ノ區域ナル事ハ上野浦人モ承知ノ事ト被存候猶亦海面之網代呂場ハ互ニ至當ノ分域ヲ保守スル故ニ累年更ニ異論無之候付テハ即今縣廳ノ御裁判ヲ願ヒ奉ルノ存意ニ無御座候右等ヲモ御裁判ニ預リ候儀意外ノ事ニ候既ニ昨年御理解ニモ網代呂場ノ事ハ更ニ關係ナシトノ御申聞ケト前後不都合ナラズヤ此段御賢慮御伺奉申上候

串本ヨリ申立ニハ東ノ境界大谷口西ノ瀧限リト申張リ候樣御座候ハ上野ヨリ方今ノ御聞込ミト愚察仕候右ハ答書及ビ言語ノ上ヱニテモ申張ラヌ事ハ大谷ト西ノ瀧トハ字二ツナレバ二ケ所ナル顯ナリ然ルトキハ如斯一ツニ申上ルノ理ナク愚然コノ大谷口ヲ東ノ境界ト心得違ヒタル由緣ハ七年二月廿一日新宮在勤所ヘ訴狀差出シテ縣廳ヱ取次ヲ乞ヒシ時ノ書ニ記載御座候右大谷口ヲ東ノ境界ト申シタハ最初副區長所ヱ差出シタル山段別逃シ書ノ時ニ候得ドモ定理不相立故ニ其節ヨリ東ノ境界ハ上野ヨリ申ス通リニ屬シ更ニ異議申タル覺ヘ無之猶同年七月五日訟庭ニ於テ課長渡邊殿ヱ對シ右大谷口ノ心得違ヒ有シト上野原告人ヨリコノ非ヲ類リニ云フ即刻渡邊殿ヨリ串本ヱ此儀御尋ニ預ル前件之通一時副戸長ノ處濟ヨリ心得違ヒ然樣申候得共定理不相立故ニ今以テ大谷口ヲ東ノ境界ト申シ張ラヌ事デ御座リマスト答フ渡邊殿上野ヱサシテ曰ク然ラバ串本ニ於テ一時巧ミヲ以テスルト雖モ今日ニ至ツテ申張ルニ非ザレバ何ソ咎ムルノ罪ガアラント次ニ串本ヱサシテ曰ク東ノ境界ハ上野浦ノ申ス通リ承知カト問ヲ下ス特クヨリ承知致居候ト答フ然ルヲ今日ニ至リテモ矢張大谷口西ノ濱限リ抔ト曖昧ナル事ヲ申張樣被思召候段意外之事ニ御座候

明治八年二月二日

和歌山縣下第七大區六小區

串本浦

商　神田文左衛門

雜　濱田治兵衛

和歌山縣下第一大區二ノ小區

元寺町一丁目

代書人士族　竹中又兵衛

司法省御裁判所

（朱書）第五號

木縣ヱ願書之寫

奉

願

上野串本兩浦係リ持合字魚梁山官林境界之儀ニ付双方爭論ヲ發シ去ル明治七年四月木縣ヱ出訴仕屬奉勞官廳本年一月廿四日御處分ニ相成則御書下ゲ御下興被成下候ニ付串本浦ニ於テハ現ニ許多之損害ヲ生ズルニ驚愕仕私共御受進ニテ先般控訴仕候處右御書下ゲニ双方トモ確書無之ニ付取消ストノ廉ニ依レバ無證據ナルコト顯然タリ然ラバ裁判ト見做スヲ得ズ是則行政權ヲ以テ更ニ境界ヲ取設且區域ヲモ被定候事ニ有之其レカ爲浦民ノ損害ヲ釀スアラバ其旨縣廳ヱ歎願スルノ筋ニアラズヤト御理解ヲ蒙リ裁判行政兩權ノ區別初テ發明悔悟依テ控訴願下ゲ仕再ビ御本縣ヱ立戻リ猶行政裁判之云々御理解ヲ蒙リ直ニ承服御受仕候雖然茲テ昨年來上申書ニ記載御座候通リ止ムヲ得ザルバ當浦ノ儀專ラ漁業ニ從事シ其ノ漁業タルヤ悉ク網代呂漁ニ關スル言ヲ俟タズ然ルニ其砌御取設被　仰付候境界區域ニシテハ當浦從來ノ漁業稼モ日々ニ衰微シ漁民共初メ浦中一同活計ノ根據ヲ失ヒ殆ンド困苦仕候間此段御憐察可被成下候且亦御書下ゲ紙ニ上野浦榜示ニ定ムルトノ地所ハ官有民有ノ稱名追テ管内一般御處分之節更ニ可相逃トノ御記載御座候地ハ字何レヨリ何レ迄トノ儀私共ニ於テハ聊了解シ難キ廉モ有之何分官有民有ノ稱名判然タラズンバ着手スル能ハズト奉存候然ルヲ最早本年三月中上野浦ヨリ猥リニ艸木ヲ苅取リ加之木ノ根株ヲモ掘取候行跡甚以如何之事ト被存候殊ニ眼目トシ爭論ニ及ビ候地ナルニ右等ノ次第忽當浦網代呂漁ノ害ヲ釀スニ至レリ猶亦御書下ゲ本文ニ兩浦係リヲ廢止シ更ニ上野浦屋那官林ニ定ムルトノ地内ニ當浦字カタハト申所ニ本田ノ内下田二十一歩及ビ下田五畝九歩ト既ニ慶長六年ノ御檢地帳ニ公然タリ豈計ランヤ右田地ヱ今般上野浦ノ者共十名餘モ押入リ猥リニ檢地シ縱横ノ間數ヲ附シ標札ヲ被立候段是亦不得其意不當之至ト奉存候既ニ已ニ右等ノ次第迷惑無限殆痛歎ノ至リニ不堪候間出格之御愛憐ヲ以テ何卒境界ハ從前ノ振リニシ且串本浦魚梁官林ト御改定被　仰付度臥シテ冀グバ令樣之御足勞ヲ以テ更ニ實地ノ御清鑑ヲ冠リ候ハヾ浦民一同無遺念過分之至リト奉存候兎角浦民生業ニ安ンジ候樣御保護之御職掌ヲ被爲盡偏ニ御賢慮之御處置ヲ蒙リ度此段奉歎願候也

明治八年五月十九日

第七大區六小區

串本浦總代

平民　神田文左衛門
同　濱田治兵衛

右附箋之寫

官地ハ家祿奉還ノ士族中エ御拂下ゲ可相成旨一般ノ御布告ニ御座候得共本文魚梁山官林之儀ハ兼テ上申仕候通リ當浦人民頗ル生活ノ要所ニ付他エ御拂下ゲニ相成候テハ甚難澁仕候間乍恐至當之代價ヲ以テ何卒當浦エ御拂下ゲ可被成下候樣出格之御處置ヲ冠リ度此段下ゲ紙ヲ以テ奉願候也

和歌山縣令神山郡廉殿

（朱書）

書面願之趣採用難相成事

明治八年五月二十二日

和歌山縣令　神山　郡廉　印

（朱書）第六號

本縣エ再願書之寫

再願

上野串本兩浦故ト持合字魚梁山官林境界及區域其他海面ノ儀ニ付過日以書付歎願仕候處御採用難相成旨御指令御座候得共右ハ前願ニ奉申上候通リ寃モ相違無之浦民一同頗ル生活之要件ニ付不得止奉歎願儀ニ御座候間乍恐今一應御檢察被爲成下格外之御許議ヲ以テ何卒浦民生業ニ安ジ候樣御處置モ御賢慮之御處置ヲ蒙リ度因而再奉歎願候也

明治八年五月廿四日

第七大區六小區
串本浦邊代
平民　神田文左衛門
同　濱田治兵衛

和歌山縣令神山郡廉殿

（朱書）第七號

內務省エ初願之寫

入會地境界御改定願

過ル寶曆三年以來上野串本兩浦懸リ入會堪ニ被申付有之候字魚梁山官林ノ儀去ル明治六年十二月山段別御取調之際ニ當ツテ右官林境界上ニ於テ爭論ヲ發シ同七年四月本縣エ出訴ニ及ビ候處別紙一號控訴狀ニ手續上申仕候通リ再三御理解ニ相成被告私共ニ於テハ早速承服仕御說諭ニ基キ示諭ニ及ト雖モ原告上野浦ノ者共苦情申立承服不仕故ニ同十二月實地御檢査ヲ受ケ本年一月二十四日御處分ニ相成同一號ニ記載御座候通リ御書下ゲ御渡被成下候得共往々不公平且剪伐不都合ノ廉モ有之ニ付疑念ヲ發シ將タ串本浦ニ於テハ許多ノ損害ヲ生ズルニ愚昧ノ私共一時驚愕仕御受強ニテ同一號順次ノ通リ控訴仕候處司法省御裁判官千波尙彥殿被申聞候ニハ右縣廳ノ書下ゲニ双方共確書無之ニ付取消ストノ廉ニ渉レバ無證據ナルコト顯然タリ然ラバ裁判ト見做ヲ得ズ是則行政權ヲ以テ更ニ境界ヲ取設且區域ヲモ被定候事ニ有之若シ其レヲ爲メ浦民ノ害ヲ釀スアラバ其旨縣廳ヘ歎願スルノ筋ニアラズヤト御理解ニ預リ司法行政兩權ノ區別初テ發明シ依テ控訴願下ゲ仕再ビ本縣ヘ立戻リ五月十二日歎願書奉差上候處前件御處分相成候通リ承服受書不致之限リハ歎願書雖取上旨庶務聽訟兩課ヨリ被申聞十四日出頭ノ砌猶ホ聽訟課ヘ被呼御尋ニ付右ハ御裁判ト御座候ハヤ何ツ迄モ不服ト申上候處御出席岡本政良殿行政裁判ノ云々御理解其他民權ト雖モ延緩ノ限リモ有之最早難赦今日中受書可致樣嚴ク被申付心意ニ不服抱キナカラ是非承服受書仕十八日御書下ゲ下ゲ渡サレ翌十九日直ニ庶務課ヘ別紙二號ノ通歎願書奉差上日々御招令御窺申上候處同二十二日朱書ノ通御採用難相成御指令相下リ不得止二十四日三號ノ通再願書奉差上候得共同樣御採用不相成旨被申聞候雖然兼テ二號歎願書ニ上申候通リ當浦四百有餘戶ノ人民頗ル生活ノ要件ニ付本縣ヨリ被申渡候境界及ビ區域ニシテハ當浦從來ノ漁業稼ギモ日々衰微シ浦民一同活計ノ根據ヲ失ヒ可申場合ニ立至リ幾ント困苦仕儀ハ毫モ相違無之候間此段御憐察可被成下候前件行政ノ御處分ト御座候付無是非受書仕候得ドモ心意ニ不服ヲ抱キ還念止マザルヲ乍恐奉申上候コトニ兩浦ノ得失ヲ考ルニ上野浦ニ於テハ更ニ害ナクシテ串本浦ニ於テハ頗ル害有之候乍併双方ノ確據ニ憑ルノ裁判トナラバ假令串本浦ノ爲メニ幾許ノ害ヲ生ジ候トモ決テ御裁判ヲ差拒ムノ理ナキハ勿論ニ候得共双方トモ無證據故ニ爭論ヲ取消シ行政權ヲ以テ更ニ御處分有之トキハ先ヅ兩浦ノ利害如何ヲ論ジ至當ノ境界ヲ被定候ハ所謂人民ヲ保護スルノ御職掌ナラン然ルニ其利害如何ヲモ識セズ唯縣廳ノ威權ヲ以テ御處分有之候ハ今以遺憾此事ニ候原來行政裁判ハ疑令殿ノ責任ナレバ假令不公平偏頗ノ御處分有之一時人民ノ自由ヲ妨ゲ國家ノ害ヲ釀ストモ改正スルヲ得ザル乎若シ改正スルヲ得ザルトキハ是レ甘ジテ人民ノ自由ヲ妨ゲルナラズヤ何卒速ニ御改正被仰付度到底保護ノ御職掌ヲ被爲盡上下相共ニ皷舞ノ域ニ至ラシメ候樣御處分奉仰候仍テ別紙四號繪圖面ヲモ奉進呈候間尙又更ニ實地ノ御清鑑ヲ蒙リ舊形ノ仕來ヲモ御洞察被成下串本浦魚壗官林ト御改定被仰付兎角浦民生業ニ安ンジ候樣伏テ奉歎願候也

明治八年七月十八日

和歌山縣下第七大區六小區
串本浦邊代
平民　神田文左衛門
同　濱田治兵衛

內務卿大久保利通殿

（朱書）第八號

同省エ差上候見込書之寫

見込上申書

第一條

一、兩浦懸リヲ廢止シ更ニ上野浦屋那官林ト定メラレシ不公平ヲ論ズ

從來ノ如ク兩浦カヽリ官林ナルトキハ双方差支ナク又異論モナキハ固ヨリナリ今般縣廳ヨリ被申渡候如ク唯々上野浦ノミノ官林ト相成候テハ既ニ慶長度ノ御檢地帳ニ公然タル串本浦字カタハト云フ所ナル田地モ自然上野浦區域ニ圍マレ串本浦ノ田地モ官林内ニ籠ルヲ免ガレズ故ニ本年五月上野浦ヨリ猥リニ右田地ヲ檢地シ同浦ノ新開地ト邪事ヲ申立シハ所謂裁判ノ不公平ヨリ起ルト謂可シ斯ル差支アルトキハ串本浦ヨリ之レヲ論セザル可ラズ歟カハシキコトニ非ズヤ自然ノ道理ニ叶フノ裁判ナラバ不知々々双方永世論ヲ發スルヲ得ザルナリ今日裁判ヲ受テ明日亦論ノ發スルヲ免ガレサルハ殆不公平ノ證ト云フ可キ乎

但シ前文上野浦屋那官林ト定ムルヲ返シテ之レヲ串本浦ヤナ官林ト定ムルハ是則公平ノ證ト云ベシ如何トナレバ官林内ニ於テ永世爭論ヲ發スルノ厭ナキヲ見テ以テ公平ノ證ト見做ス可シ然レドモ證據ヲ以テスルノ裁判ナラバ言ヲ俟タザレドモ双方無證據ナルニ更ニ行政權ヲ以テ唯々上野浦ニ定メラレシハ何事ゾ若シ上野浦ノ區域ニ定メテ差支ナケレバ串本浦ノ區域ニ定ムルモ亦何ゾ差支アルノ理アランヤ

第二條

一、上野浦榜示ニ定ムルトノ地所ノ不鑑定ヲ論ズ

上野浦ニ榜示定ムルトノ地所ヲ御書キ下ゲノ下ゲ紙ニ官有民有ノ名稱追テ管内一般御處分之節更ニ可相違ト右地所ノ儒串本浦ニテハ官林内ニシテ舊來上野浦ヨリ支配セラレシ證跡更ニ無之ト云ヒ上野浦ニテハ之レヲ官林外ニシテ舊來支配シ同浦ノ所有地ト云フ爭論ニ及ビシナリ何ノ爲メニ聊ノ山野ニ如是爭ヒノ生ジタルヤトナレバ此ノ魚梁山ノ樹木繁茂スルトキハ串本浦ノアジロ漁業ニ利アルノ見込ミニシテ上野浦アジロ漁業ニ決シテ害ヲ成サヾレドモ此ノ山ノ樹草繁茂セザレバ上野浦ノ漁業ニ利アルノ見立ナリ故ニ彼ノ山ヲ得テ覺兀ニセント謀リ上野浦ノ所有地ト申シ立テシナリ串本浦ニハ只有樣官林總山ノ内ニ籠リアルモノト云フニ出タリ然ル處昨年中縣官再三ノ御理解ニハ串本浦ノ言フ所ヲ是トシ官ニ於テハ官林ノ延地ト見極メタルトアリ猶令殿ノ曰クニ實地ヲ見ルニ異ナラズト迄ノ言アリ然ラバ何哉據ロ有リテ串本浦ノ言ヲ是トシ上野浦ノ言ヲ非トシタルナリ據ロナクシテ猥リニ斯ル御理解ヲ口外セラレシヤ其時モシ上野浦ノ者共承知スルアラバ如何一時串本ヲ贔負シテ上野ヲ壓倒スルノ疑心アランモ亦不可知然ルヲ本年一月ニ至リ驟然反覆ノ御裁判ニテ串本ヲ非トシ上野ヲ是トシタルハ不鑑定ナラズヤ其ノ證ヲ左ニ擧ゲン

右地所唯上野浦榜示ニ定ムルトノミニテ官有民有ノ稱モ違セザルノミナラズ串本浦ヨリハ控訴申ナルニ猥リニ草木ヲ苅伐加之木ノ根株ヲモ掘リ絶シ既ニ已ニ右等ノ行跡ハ山ノ繁茂セザルヲ以テ上野浦アジロ漁ノ利ニセントノ振舞ナリモシ上野浦ニ云フ如ク素ヨリ自分ノ所有地ナラバ本年ヲ俟タズシテ早ク木ノ根株ヲモ掘絶シ己レノ浦ノ漁業ニ功ヲ可取筈ナラズヤ然ルヲ本年三月上旬頃迄着手スル能ハザルハ串本ニ云フ官林總山ノ内ニ籠リアル地所故ニ着手スル能ハザルナリ且亦同所山上ニ串本浦アジロ漁ノ爲メニ魚見場二ケ所アリテ舊來上野浦ヨリ支ヘラレタル證ナキハ疑ヨリ官林内ニシテ兩浦カヽリ入會場ナル故ナリモシ上野浦ノ所有地ヲ借リテ串本浦ノ用ヲ足ストキハ必借地代ヲモ可取筈又可出筈ナラズヤ我レ舊慣ヲ好ムニアラザレドモ是等ハ舊形ノ仕來リヲ見テ是非曲直ヲ察ス可キ乎

第三條

一、境界曖昧ニシテ了解シ難キヲ論ズ

境界東ハ松立木限リ西ハ大岩ノ尾限リトノミニテハ更ニ明瞭ナラズ如何トナレバ松ノ立木ハ凡百本餘モアリ大岩ノ尾モ又幾ケ所モアリ字何レノ松何レノ大岩ト記サテハ從前ノ振リニ異ラズシテ不念ノ裁判ト云フ可シ此ノ爭論ノ原由ハ官林縱七丁横一丁半トノミニテ字何レヨリ何レ迄トノ確書ナキニ出タルヲ知ラザルヤ案ズルニ昨年十二月中岡本殿實地檢査ノ砌上野浦ニ滯留中種々ノ僞言ヲ開キ込ミ不得止ノ義理アツテ一時上野浦ノ所望ニ裁判シタルカ後日串本ヨリ論ヲ起セヨト云フノ心ナランカ

第四條

一、海面境界ハ兩藻臥シ島中凡限リニ可相心得ト但シ書ニ載スル不思ノ甚シキヲ論ズ

海面アジロ場ハ從來沖ノ藻臥島限リ互ニ分界ト保守シ漁業相營來ルハ顯然タリ右アジロ場ノ儒ヲ沖ノ藻臥島限リノミナラズ串本浦ノアジロ場五ヶ所ニモ及ブノ處迄ヲ元ト上野浦ノモノ抔ト昨年五月五日和歌山縣廳訟課ヘ願ニ邪事ヲ申立ツルアリ御出席縣官北垣殿曰タ海面ノ苦情アルト雖モ決シテ言上ス可ラズ暫ク外ニ置ケ彌苦情アラバ別段ニ願フノ筋ナリ今般ノ訴狀ニ海面ノ關係ナシト被申開シハ至當之御論トス然ルヲ兩藻臥島中眞限リト不思ノ甚シキナリ前後不都合モ亦甚シ右等ハ岡本殿實地檢査之砌上野浦滯留中串本ノ者ハ種々ノ僞言ヲ開込ミシナラン既ニ本年一月御裁判書下ゲ渡サレシ時ニ當ツテ不審ノ廉聊相尋ル處岡本殿曰クアジロ場モ元ト上野浦ノモノナリシヲ串本浦ニハ漸ク二十五七ケ年前ヨリ侵奪シテ支配スルコトハ其方共モヨク承知ノ事デ有ロカヤトノ言アリ餘リノ妄言ニ我等曰ヲ閉ヂテ唯々岡本殿ノ面ヲ見ル計リノミ縣廳ニハ何ノ證ヲ以テ斯ル妄言ヲ口外セラレシヤ縣廳ニ於テ更ニ證ノ有ルニ由ナシ　必上野浦滯留中ニ空言ヲ聞テ偏頗ノ裁判ヲサレタルナリ最海面ニハ何レノ浦々ニテモ唯從來營業シテ他ヨリ支ヘラレザルヲ以テ境界トスルノミ何ゾ確書ノ有ルニ由ナク然ルニ方今海面段別ヲモ書上ケヨトノ御布達ニ付夫々上書仕居候ハ無論一般之事ト被存候乍恐今後モシ海面ノ御規則御設立ニナルトキハ其ノ御規則ニ奉基ハ言ヲ俟タズ然ルニ海面ノ境界ヲ定ムルモ縣令殿ノ任ナルヤ任ナラザルヤ其ノ法ハ知ラザレドモ前件ニ云フ如クモシ今後海面ノ境界相立ト雖モ此度縣令殿ノ定メラレタル界ハ動

クチ得ザル乎一般ノ御規則ニ基キテ動クチ得ル乎

第五條

一、砂濱ハ何レノ區域トモ裁判上ニ記載ナシト雖モ岡本殿口達ニテ被申渡シ附會ヲ論ズ

裁判書下ゲ渡サレシ時ニ當ツテ砂濱ハ何レノ區域ナルヤト上野浦ヨリ尋ネシニ即時岡本殿曰クニ官林ハ上野ノ區域ニ定ムル以上ハ官林ニ屬セヨト又串本ヨリモ尋ルアリ同人ノ曰ク濱ハ陸地ノコト故ニ山ニ屬スルモノト云フ然ラバ上野浦ノ支配カト問フ勿論ナリト答フ右等ハ餘リニ上野贔負ト云フモノナリ現ニ濱ハ串本ノ濱續キニシテ上野ノ海濱ニ脈ノ絶ヘタルヲ見テ知ラル可ナリ既ニ去ル嘉永七寅年洪濤ノ節御所ノ御用材積破船シ右御材木同所海濱エ流レ寄リ同時来船一艘荷物檣ノ儘被打上右難船世話差配等串本ヨリ致シ有之ハ顯然タリ舊來濱ノ支配ハ如何ノ事故アルヤ無キヤヲチ問ハズ陸地ノコト故山ニ屬スルモノ抔ト斯ル附會ノ說ヲ立ツルハ何事ゾ按ズルニ山ノ際限ヲ唱ルニ必熟字モ有ラン山ノ端山ノ麓及尾谷嶺抔トアリテ草木ノ生ヒ立ツ所ヲサシテ山ト云フ濱ニハ必草木ノ生スルモノトハ餘リ牽强ノ說ナラズヤ濱ハ熟字ニモ海濱水濱抔ト云フハ則海濱ハ海水ノ器ノ餘處ナリ既ニ大濱ノ時ハ海水ノ器ニ滿ツルノ理ニシテ平日濱ト稱スルハ所謂器ハモノヽ餘リ有ルナリ猶海濱ト云ヘドモ山濱ト云フヲチ聞カズ最負偏頗モ亦甚シ

第六條

一、朱書御指令不服ヲ論ズ

右擧ゲル所ノ次第ニ付假令縣令殿ノ任ト雖モ斯ル行政裁判ニハ難服故ニ本年三月控訴ニ及候處司法省ニ於テ受理シ難ク被申聞シニ依テ再本縣エ立戻リ五月十二日歎願書差上候處裁判承服ノ受書不致ノ旨リハ右歎願書受理シ戴キ度不得止心意惑如何トモスルノ策ヲ得ズ右歎願書受理シ戴キ度不得止心意ニ不服ヲ唱ヘナガラ無是非受書仕同十九日歎願書差上候處ニ十二日御採用難相成朱書之通リ御指令ヲ下シ候段一時下民ヲ欺ヒテ不公平ノ裁判ヲ受書サセテ後日自分一身ノ言ヒ譯ノ種トスルノ御所存ナラン官ニ在テハ唯々一身ノ言ヒ譯ケ位ヒニ着眼セズ第一國家ノ興衰ヨリ人民ノ得失ニモ及ボス可キニ何ゾ公平ノ處ニ眼ヲ曉サヤル其レ御採用ニ成ルトナラザルトハ十二日歎願書差出シタルトキヨリシテ知レル筈ナラズヤ愚按スルニ兼テ庶務總訟兩課驅レ合ヒテ畢竟下民ヲ欺ヒテ邦黠スルノ勢ヒト云フ可キカモシ右等ノ不都合アルトキハ下民遺念ヲ晴散スルヲ得ズ自然奉恕官廳ヨリ外ナク奉恕官廳ハ是則奉恕　大君樣之理ニシテ恐多キコト無讐最モ無體掠ノモノハ行政裁判トテ縣令殿ニ任スルト雖モ斯ル不公平ヲモ行政權トハ豈開明ノ時ニ進ハン乎恐懼恐懼

明治八月七月十八日

和歌山縣下第七大區六小區

串本浦總代

平民　神田文左衛門

内務卿大久保利通殿　　同　濱田治兵衛

（朱書）第九號

添簡之儀ニ付歎願書之寫

歎願

本年七月十八日原願書ヲ以テ入會地境界御改定被仰付度願候本縣ノ添簡無之順序ニ候付添簡申受度ニ可願出樣被仰聞則同二十九日右原願書及繪圖面ヲモ一旦御下ゲニ相成即時本縣エ立戻リ既ニ本月三日別紙第五號之通リ添簡頂戴仕度願上候處御恢諧之上縣官廣瀨大屬殿被申聞候ニハ縣廳ノ指令ニ不服ヲ懷キ上官廳エ告ル者ハ則縣廳ヲ相手ドルノ理ニシテ其ノ上告書ニ添簡難致云々御日達ニ付尙又事實縱々陳述シ口上ニテモ再歎願仕候得共前條申聞候通リ決シテ難聞屆旨被申渡當惑仕候然ラバ内務御省エノ添簡許可不相成次第柄御書キ下ゲニテモ頂戴仕度段敢テ願上候得共固ヨリ許容不致願書ヱ其證ハ尙難相成トノ言ニテ是亦御聞濟不相成因テ不得止此段上申仕候尙亦原願書類繪圖面及添簡願書ヲモ相添今更ニ奉進呈候間伏テ願事實御諒察ヲ被爲垂御本省ノ御仁恤ヲ以テ何分ニモ原願御採用成戴キ四百餘家ノ賤民共從來ノ振ニテ生業ニ安堵候樣再三再四泣涕奉歎願候謹言

明治八年八月十二日

和歌山縣下第七大區六小區

串本浦總代

平民　神田文左衛門

同　濱田治兵衛

内務卿大久保利通殿

（朱書）第十號

再出京内務省エ差上候願書之寫

再御沙汰御窺旁願

私儀去ル明治八年七月十八日及八月十二日區内入會地魚樑山官林境界御改定成戴度甲乙兩印及見込書類繪圖面トモ外五簡號ヲ相添奉歎願候處御受理相成尋テ和歌山縣廳エ御尋問之御趣被仰聞右ニ付兼テ御屆申上置候府下神田東松下町森田太兵衛方ニ止宿仕居時々御沙汰御窺ニ出頭然ル處本年一月十八日御呼出シニ付出頭仕往復係リ松平勘太郎殿御達シニ曰ク右願之趣御處分之儀ハ管轄廳ヲ經由シ可相達間歸縣致スベシトノ御旨被仰渡候ヘドモ乍恐八年七月ヨリ本年一月迄七ケ月之間唯御沙汰奉待ノミ濟任仕居一應ノ御日達ニ依リ歸村仕候テハ村民共信用仕兼且總代ノ義務モ難相立旁以不願恐御指令書頂戴仕度歎願仕候處其段書面ニテ可申出樣被申聞即以書面奉願因テ同月二十三日御日達ノ御書付御下與相成リ右御受仕直ニ歸村聞御書付ヲ以テ村民一同ニ示諭致シ因テハ村民一同黙然トシテ御沙汰可相俟本意之處曾テ不忍之苦情有之ニ付不願恐本年四月一日郵便ヲ以テ右御沙汰御窺旁願書奉差上候以來

伺等之御沙汰モ拜承不仕實ニ迷惑困苦仕候更ニ言チ俟タザル儀ニ御座候ヘドモ兼テ奉歎願魚梁山官林之儀ハ私共村民漁業必用ノ地位ニ有之且曾テ此ノ議上論ニ關係モナキ從來互ニ區畫チ保守シ有之海面迄モ兩モブシ島中眞限リト更ニ分界チ付ケラレ僅ニ幅員十間餘チ虧缺シ故ニ串本浦網代島嶠ノ内從來第一番ト稱シ來ル字モブシ島ト云フ網代呂嶠チ失ヘリ豈不思ノ甚シキナリ已ニ昨今兩年ノ間ニ於テモ此ノ損亡モ亦幾許カ不知候付テハ四百餘戸之賤民共日々ノ活計上ニ關係仕不得止今般出京仕候間前文之事情御洞察チ被爲垂出格之御仁恤チ以テ何卒速ニ御處分奉仰度旁以再御沙汰御窺奉申上候也恐惶謹言

明治九年十一月十八日

和歌山縣第七大區六小區
串本浦總代
平民　神田文左衛門

内務卿大久保利通殿

内務省御指令逐書之寫

串本浦　區會議所回

其浦ト上野浦トノ境界論所ノ儀ニ付昨年來縣廳ニ於テ判決相成候處其浦ヨリ不服申立ノ末内務省ヘ直願相成候件別紙ノ通御處分相成候旨田邊支廳ヨリ御通逐相成候條其旨可相心得此段申入候也

明治十年十二月十九日

内務省御指令逐書之寫

該區上野浦字魚梁山官林並字スクミ山所屬之儀同區串本浦ヨリ兼テ内務省ヘ直願致シ有之趣チ以今般同省ヨリ別紙之通リ申渡書候逐相成候條其旨相心得神田文左衛門外一名ヘ別紙一括願書及申渡書トモ可下渡依テ此段及通逐候也

但魚梁山官林ハ既ニ禁伐林ニ組入字スクミ山ハ今般更ニ官有地第三種ニ編入候條此旨相心得尤石字スクミ山ニ於テ根株又ハ小苗木生立之妨害トナラザル樣下草苅採度旨上野浦ヨリ願出候ハヾ相當之下草料收入之積取調可差出事

明治十年十二月十二日

第七大區六小區長　田邊支廳

内務省御指令之寫

和歌山縣管下
第七大區六小區串本浦總代
平民　神田文左衛門
外一人

願之趣難聞屆候條字魚梁山官林並其浦於テ官林内ト唱フル字スクミ山共最前縣廳處分之通上野浦所屬地ト可心得事

但字スクミ取締方之儀ハ縣廳ヘ逐シ置候事

明治十年十一月二十一日

内務卿　大久保利通

（朱書）第十一號

内務省ヱ再願之寫

所屬地覆審兼海面境界御取消願

第一條

去ル明治八年七月十八日以降當縣管轄上野串本兩浦ニ係ル字魚梁山官林境界御改定被成下度願書數通地圖面相添出願仕候處御取調ベノ末十年十一月二十一日付ケ御辭令書及前件出願ノ書類八冊該管轄廳チ經由シ同十二月十九日私共ヱ御下ゲ付ケニ相成右御逐ノ御趣謹テ拜誦仕候處願ノ趣難聞屆候條字魚梁山官林並ニ其浦ニ於テ官林内ト唱ル字スクミ山取締方ノ廳處分ノ通リ上野浦所屬地ト可心得但シ字スクミ山裁斷ノ儀ハ縣廳ヱ逐置候トノ御旨ニ付魚梁山トスクミ山トモ最前縣御本省ノ御逐ニ隨ヒ承服可仕候ヘドモ所屬地ノ一段ニ至テハ縣廳ノ御處分ト雖モ其當ラザル儀ト奉存候ニ付今一應覆審チ蒙リ度第二條ニ讓リ尚更ニ陳述奉懇願候

第二條

（朱書）第十一號

内務省ヱ再願之寫

所屬地覆審兼海面境界御取消願

第一條

去ル明治八年七月十八日以降當縣管轄上野串本兩浦ニ係ル字魚梁山官林境界御改定被成下度願書數通地圖面相添出願仕候處御取調ベノ末十年十一月二十一日付ケ御辭令書及前件出願ノ書類八冊該管轄廳チ經由シ同十二月十九日私共ヱ御下ゲ付ケニ相成右御逐ノ御趣謹テ拜誦仕候處願ノ趣難聞屆候條字魚梁山官林並ニ其浦ニ於テ官林内ト唱ル字スクミ山取締方ノ廳處分ノ通リ上野浦所屬地ト可心得但シ字スクミ山裁斷ノ儀ハ縣廳ヱ逐置候トノ御旨ニ付魚梁山トスクミ山トモ最前縣御本省ノ御逐ニ隨ヒ承服可仕候ヘドモ所屬地ノ一段ニ至テハ縣廳ノ御處分ト雖モ其當ラザル儀ト奉存候ニ付今一應覆審チ蒙リ度第二條ニ讓リ尚更ニ陳述奉懇願候

第三條

縣廳ニ於テ御取調ベノ末去ル明治八年一月二十四日初テ御處分ニ相成候際但シ書ニ海面境界ハ瀧洞ノ端兩モブシ島ノ間ダ中眞限リ心得ベキ云々トアルハ實ニ按外ニ出タル儀ニ付同年七月十八日ノ原願書ヱ兼テ相添候見込上申書第四條ニ此ノ件ノ意外ニ出タル事情チ陳述シ且九年十一月十八日再御沙汰御伺兼旁以歎願仕有之通リ僅ニ海面幅員十間餘チ虧缺シ其レ山岳丘壑ノ境界ハ天水ノ流ルトニ隨ヒ其分界チ成スベシ天理ニ基クモノナラント奉存候已ニ我ガ近村ニ於テ此等ノ比準チ取ルニ概ネ天水ノ流ルトニ隨テ分界チ成スモノ十カ九ニ居候然ルニ右魚梁山及スクミ山ノ景況ハ從來串本浦ニ所屬シタル海濱ノミナラズ特ニ慶長年度ノ當浦御檢地内ニ公然タル田地トニ天水ノ流レチ受ク固リニ候ヘバ串本ノ所屬地ニ聊相違無之儀ト奉存候雖然從來ノ慣行ニ依リ入會地ニ御據ヱ置カレ候ハヾ敢テ御願ハ仕マジク候ヘドモ既キニ縣廳ノ御見據ヱチ以テ兩浦係リチ廢止シ更ニ一村限リノ所屬地ト御定メニ相成候ニ於テハ天理ノ根據スル所アツテ然ルカ果シテ然ラバ其ノ根據スル所ノ理由チ了承仕疑點判解候ヘバ決シテ不奉願候ヘドモ其御處分書ニ理由ノ如何チ讀セバ只一撮ニ上野浦ノ所屬地トノミニテハ所謂隔靴ノ歎無キ能ハズ況ヤ實地天然ノ景勢ニ據レバ其ノ御處分ノ天理ニ悖レリト思惟候ニ於テオヤ此段御洞察チ被爲垂希クハ今一應覆審チ蒙リ所屬地至當ノ御更換チ奉仰度伏シテ奉願候也

第三條

ガ爲メ從來串本浦アジロ場ノ内第一番ト稱シ來ル漁業場ヲ失ヘリ右ニ付最早三歲ノ星霜ヲ經過シ五百餘戸ノ村民共此ノ損害ヲ忍ビズ實ニ憫然ノ至ニ候ニ付第四條ニ讓リ更ニ陳述奉懇願候

第四條

上野浦ニ於テ海面境界ノ當否ヲ論セント欲セバ更ニ書面ヲ以テ願且訴ル今日ノ當然ト奉存候抑モ該論ノ原由ハ魚梁山ノ境界ヲ爭フニ出テ敢テ海面上ニ關係ナキ素ヨリ論ヲ俟タザル儀ト奉存候最モ海面アジロ場ノ儀ハ從來沖ノ藤臥島ヲ限リ互ニ分界ヲ保守シ漁業ヲ相營ミ双方異論ナカリシ場所迄モ縣廳ニハ何等ノ廉ニ依リ何ヲ證ニ御視認アツテヨリ兩モブシ島ノ間ダ中眞限リト凡ソ幅員十間餘ヲ缺キタリ御定メニ相成候哉其理由今以テ了解難仕候サリ乍ラ其理由アツテ御改正相成儀ニ候ハヾ假令我ガ串本浦ノ漁業上ニ於テ幾許ノ妨害ヲ釀スト雖モ敢テ不奉願候ヘドモ其理由判解セザレバ五百餘戸ノ村民默止ニ忍ビズ此段御洞察ヲ被爲垂冀クバ右縣廳ノ御處分中但シ書ヲ御取消ニ相成候ヘバ從來ノ通リ互ニ營業ニ差支無之儀ト奉存候間何卒此ノ件ハ御取消ニ被仰付度伏テ奉願候也誠恐誠惶頓首

明治十一年三月十五日

和歌山縣下第七大區六小區
串本浦人民總代
平民　神田文左衛門

内務卿大久保利通殿

七八六

和歌山縣管下第七大區六小區
串本浦總代
平民　神田文左衛門

願之趣難聞屆候事

但シ海面之儀ハ更ニ縣廳ヘ出願可致旨

明治十一年四月一日

内務卿大久保利通代理
内務少輔　林友幸　印

（朱書）第十二號

内務省ヘ三願之寫

海面漁業場ノ虧缺從來ノ通リ御引キ直シ
並ニ官有地魚梁山及巢山從來ノ通リ入會
地ニ御據ヱ置キノ再願

第一條

謹テ願書ヲ内務卿ノ御閣下ニ奉ズ抑モ去ル明治八年七月十八日以降當縣管轄上野串本兩浦ノ入會地字魚梁山官林境界御改定及海面區域ノ虧缺ヲモ從來ノ通リ御引キ直シヲ蒙リ度心得ヲ以テ歎願仕候處御詮議ノ末同明治十年十一月二十一日付ヲ以テ御指令ヲ蒙リ謹テ拜誦仕候處願之趣難聞屆候條字魚梁山官林並ニ其浦ニ於テ官然内ト唱ル字スクミ山共最前縣廳處分ノ通リ上野浦所屬地ト可心得但シスクミ山取締方ノ儀ハ縣廳ヱ逮置候事トノ御旨ニ付ヤナ山トスクミ山栽斷ノ儀ハ右御指

令ニ隨ヒ如何ニモ承服仕候ヘドモ其他ノ苦情尙一ト形ナラズ故ニ本年三月十五日付ヲシテ所屬地覆審兼海面境界御取消ヲ奉願候處四月一日付ヲ以テ願ノ趣難聞屆候事但シ海面ノ儀ハ更ニ縣廳ヱ可願出事トノ御辭令ニ付幾ント迷惑將タ歎息ノ至リニ不堪候如何トナレバ海面ノアジロ場所一ケニ於テ從來我ガ特占ノ權ヲ失ヒ因テハ漁民共忽チ生活ノ廉ヲ耗シ且所屬地ノ件ニ於テハ幾年ノ患無キニシモ非ズト其苦慮ヲ忍ビサルヨリ不顧恐今一應山海兩件ノ事實ヲ左ノ二ケ條ニ縷陳仕候間出格ノ御哀憐ヲ以テ此段御洞察ヲ被爲垂何卒御聞屆ノ御沙汰ヲ蒙リ度五百餘戸ノ賤民共再三再四泣涕奉歎願候也

第二條

海面アジロ場ノ儀ハ從來沖ノモブシ島限リ互ニ特占ノ分界ヲ保守シ漁業ヲ相營ミ有之シハ方今ヲ距ル已ニ幾百年然リ而ルニ魚梁山爭論ノ機會ニ紛レ右アジロ場僅ニ幅員十間餘ヲ虧缺ノ御指令ニ相成其ガ爲兼テ懇願仕候通リ我ガ串本浦ニ於テ從來第一番ト稱シ來ル字漁臥島（モブシ）ト云フアジロ場此ノ所ニテ我ガ漁民田島半六ナル者天保年度ニ一ト棚ヲシテ代價千圓ノ魚漁ヲ得タルヲ保證ス方今金位ニ比スレバ凡ソ六七千圓ニモ上ルカヲ失滅セリサリトテ上野浦ノ爲ニ更ニ一個ノアジロ場ヲ增加スルナク只兩浦ノ際ニ豈空物海面ヲ現出シ然ラバ則眼前我ガ串本一浦ノ損害トシ歎カザルヲ得ズ譬ヘバコヽニ一個ノ珠玉アリ商人ハ此ノ價ヲ千圓ト極メヲ附スアリ然ル處大石ヲ以テ其實殊ヲ打碎キシニ異ナラズ目今更ニ百圓ノ極メヲ附スル商人モ無キ勢ニ至レリト奉存候果シテ然ラバ唯串本浦ノ損害ヲ生ジタルノミ何ソ上野浦ノ爲メニ利ヲ得ル無キハ更ニ一個ノアジロ場ヲモ增加セザルニ於テ顯然タリ殊ニ我ガ串本浦ノ賤民共ハ專ラ漁業ニ從事シ日々ノ活計タルヤ大約アジロ場ノ魚漁ニ關スル地況ナルニ義ニ縣廳ノ御指令アツテヨリ以來最早三歲有餘ノ星霜ヲ經過シ其ノ生活ノ幾分カ妨害ヲ忍ビシハ實ニ泣血ノ場合ニ外ナラズ候間此段御洞察ヲ被爲垂右アジロ場ノ境界ハ從來ノ通リ沖ノモブシ島限リ何卒速ニ御引キ直シ賤民共生活ノ虧缺ヲ補全シ候樣偏ニ御仁恕ノ御詮議ヲ蒙リ度伏テ奉歎願候也

第三條

魚梁山官林及官有スクミ山ノ儀ハ我ガ串本浦眞享年度ノ舊記ニ遡レバ所謂秣場ニシテ故ト串本浦ノ共有地ニ有之方今之レヲニアラズ處豈計ランヤ寶曆年間兩浦ノ際ニ紛論ヲ生ジ既ニシテ右地所ハ舊藩主ノ御引上ニ相成鎌留山今ノ禁ノ名稱ヲ負ヒ兩浦ノ入會地ニ被申付爾後兩浦ヨリ看護人ヲ付ケ以テ双方平穩ニ幾許ノ年月ヲ經過シ候ヘドモ當時境界及段別等ハ往々不取調ノ慣習ナリシヨリ方今明治七年ニ至リ再ビ紛議ヲ生ジ屢奉勢官廳候段何トモ恐縮仕候今哉地所詳細ノ御改正ニ際シ境界及段別等ハ官ノ御都合ヲ以テ數斷且合併之御指令ヲ下スト雖モ人民ハ之レヲ拒ムノ理ナキハ固リニ候ヘドモ從來ノ入會地ヲ廢止シ更ニ上野浦ノ所屬兩浦ノ内何レヘ所屬ニ御改正相成候ナリト相成候トキハ我ガ串本浦ノ賤民共忍ビザルノ苦情有之ニ

付敢テ拒ムノ謂ヒニ無之候ヘドモ所謂遺ク慮ラザレバ必ズ近キ患チ來スト右地所自今上野浦ニ所屬スト雖モ其物品地タル官有ナル限リハ目下串木浦ノ者共ハ我カ特占ノアジロナル漁業ノ船夫ニ此ノ山上有ヨリ指揮スルモ決シテ差閊無キハ言チ俟タザレドモ熟々考ルニ元來此ヤナ山ト唱ル字ハ取リモ直サズアジロ山ト唱ル同一ニシテヤナ山トモ亦アジロ山トモ呼ブ猶アジロ塲ノ海チサシテヤナトモ口碑ニ申習ハセ有之候加之海面ニ於テアジロト唱ル塲所ハ專ラ山影ノ懸涯スルアルチ以ナリ山影ノ懸涯セザル所ノ海チサシテアジロト唱ルハ未ダ曾テ聞カザルナリ若ヘバ海面ノアジロ塲チシテ婦ト見做シ山樹ノ陰影チシテ夫トシ相對サシムル自然ノ勢トモ奉存候然ル處アジロ塲ハ串木浦ニ特占ノ權チ有シアジロ山ハ今般更ニ上野浦一村限リノ所屬トナルトキハ已ニ寶暦年度ノ如キモシ後年ニ至リ按外ノ機會ニ乘ジナバアジロ塲モ自然蠶食セラルヽノ塲合將タ無キニシモアラズト是則我カ賤民共歎息ノ一ツナリ且亦此官地内ニ舊來串木浦ノ田地慶長六年ノ及新開ノ畠地開墾年度不詳ト雖モ寶暦以後ハ兩浦檢地ナリ入會且官有地トナリシ以上ハ何レヨリモ猥リニ開墾スル能ハザレバ果シテ寶暦以前ノ開墾ナル鄰モ亦論チ俟タズ請フ此ノ官地ノ原由其痕跡チ省ミテ御高察アランコトチ

モ有之所有主モ串木浦ノ人民ニシテ敢租モ亦準之尚近年御施行ノ地券證田チ授與セラレ有之ハ公然タリ上野浦ニハ是等ノ類ハ無然ルニ曩ノ縣廳御處分通ニテハ右田畑トモ豈他村ヘ飛キナリ地ノ名義チ冤ガレズ假令飛地ト相成候ト雖モ上下ノ便宜ニ依リ且止ムチ得ザルノ事由アツテ御改正トニ候ハヾ敢テ齊慣心

チ以テ歎願ハ不仕候ヘドモ却テ兩浦ノ際ニ更ニ混雜ノ緒チ發起シ候儀ト奉存候是則歎息ノ二ツナリ故ニ犯罪チモ不顧鉤迄モ御本省ノ御煩勞チ奉仰儀ニ御座候間此段御洞察チ被爲垂何卒從來ノ通入會地ニ御指ヱ置我カ賤民共ニ後年ノ患チ來サヾル樣偏ニ御仁慈ノ御詮議チ蒙度伏シテ奉歎願候誠恐誠惶頓首頓首

明治十一年六月二十四日

和歌山縣第七大區六小區
串木浦人民總代　神田文左衛門

内務卿伊藤博文殿

和歌山縣第七大區六小區
串木浦人民總代
平民　神田文左衛門

再應歎願之趣ハ本年四月一日申渡之通ニ候條雖聞屆候事

明治十一年七月十八日

内務卿　伊藤　博文　印

（朱書）第十三號

所屬地之内地券證ノ寫

千七百十九番字カタヱ　田五畝十五歩　神田清右衛門
千七百廿番　字同所　畑二畝二歩　同　人
千七百廿一番字同所　畑十歩　南出　榮吉
千七百廿二番字同所　畑九歩　同　人
千七百廿三番字同所　田三畝十七歩　同　人
千七百廿四番字同所　畑六歩　同　人
千七百廿五番字同所　田一畝十一歩　同　人
千七百廿六番字同所　田二畝十一歩　松原　長助

改正地券證八通

（朱書）第十四號

慶長度檢地帳之抜書

カタヱ　下田二十歩　二十一歩　神　主
同　下田百六十歩　五畝九歩　久　次　郎

（朱書）第十五號

串木上野兩浦之繪圖面

有ハ別紙ニ詳載奉差上候

右證據書類之寫奉差上候也

明治十一年九月五日

和歌山縣紀伊國牟婁郡
串木浦總代同浦平民
原告總代　神田文左衛門　印
右同斷東京第四大區二小區
猿樂町十九番地平民
原告總代　西園寺　實滿　印

東京上等裁判所長
四判事殿

（朱書）第十六號

和歌山縣紀伊國牟婁郡
串木浦總代同浦平民
原告總代　神田文左衛門
右同斷東京第四大區二小區
猿樂町十九番地平民
原告總代　西園寺　實滿

官林所屬並海面境界御處分不服之訴

被告　内務卿　伊藤　博文
引合　和歌山縣令　神山　郡廉

右證據物之寫左之如シ

第一號　本縣聽訟課ヘ答書々類
第二號　裁判狀　第三號中ニ記載アルチ以テ畧ス
第三號　司法裁判所ヘ控訴狀
第四號　同伺書
第五號　本縣ヘ差出ス願書
第六號　同再願書
第七號　内務省エ初願書
第八號　同　見込書
第九號　同　歎願書

第十號　同　何旁願書
第十一號　同　再願書
第十二號　同　再歎願書
第十三號　地券證八通
第十四號　檢地帳
第十五號　畫圖面

右原告總代神田文左衛門西園寺實滿申上候

過ル寶暦三年以來上野串本兩浦掛リ入會場ニ確定相成リ候字魚梁山官林ノ儀者去ル明治六年十二月中和歌山縣廳ニ於テ山段別調査ノ際右官林境界上ニ就テ兩浦爭論ヲ發シ同七年四月官林境界爭ノ訴名ヲ以テ本縣エ双方ヨリ出訴ニ及ビ候處上野浦原告タリ串本浦被告トナリ同七年四月二十四日本縣廳訟課エ答書差出シ候處御取調ノ末明治八年一月二十四日別冊第一號ノ通リ本縣ニ於テ裁判相成リ候處該裁判ハ不服ニ付串本浦ヨリ明治八年二月二日別冊第二號三號ノ通司法裁判所エ控訴致シ候處該官曰ク該裁判書中ニ双方共確證無之ニ付取消ス云々トアレバ司法權ヲ以テ判決セシ者ニ非ズ行政權ヲ以テ處分セシ者ナレバ其筋エ歎願致筋合ナリト御說諭無之ニ付右控訴狀ヲ願下ゲ同八年五月十九日本縣エ別冊第四號ノ通及出願候得共採用不相成トノ指令ヲ下附セラルヽニ付尙又別冊第五號ノ通リ同八年五月二十四日再願ヲ本縣エ呈スルモ受理セラレズ依テ同八年七月十八日第六、七兩號ノ通リ內務省ヘ歎願致候處本縣ノ添簡無之ニ付受理セラレズ直チニ歸縣ノ上添簡ヲ願出ルモ採用ナキニ依リ其趣意明記ノ上同八年八月十二日第八號ノ通內務省エ原願書並繪圖面相添ヘ出願致シ候處同省ニ於テ御受理相成リ候ニ付其後明治九年十一月十八日第九號ノ通御沙汰何旁願書ヲ呈シ是亦タ御受理相成リ明治十年十一月二十一日本縣ヲ經由シテ從前ヨリノ願書悉皆並願之趣雜閣屆最前縣廳處分ノ通リ可相心得トノ御指令相添內務省ヨリ御下附相成ルニ付更ニ明治十一年三月十五日第十號ノ通願書ヲ同省ニ呈シ同年四月一日願之趣雜閣屆旨更ニ御指令御下附相成候ヘ共尙亦明治十一年六月二十四日第十一號ノ通リ再歎願書ヲ同省ニ呈スルニ是モ亦雜閣屆旨御指令相成ルニ付不得止今般本縣ヲ引合トシ同省ニ係リ奉出訴候其不服之條欵左ニ陳述仕候

第一條

和歌山縣廳ニ於テハ明治八年一月二十四日ノ裁判ヲ以テ是ヲ行政之處分トシ寶暦以來兩浦掛リト確定相成候魚梁山ヲ卒然上野浦ノ所屬トシ串本浦ノ入會ヲ廢セラルトハ抑何等ノ原由アツテ然ルヤ又何等ノ證憑ニ依テ是ノ如ク處分アリシヤ曾テ了解致シ難ク從來確定ノ入會ヲ廢止シ一朝一方ノ所屬地ト定ム實ニ不當ノ處分ナリト思考シ司法裁判所エ控訴ノ挽行致ノ處分ヲ經タルモノニ付內務省エ再三出願仕候得共別紙九、十一號ノ通リ漠然タル御指令ニテ曾テ何ノ原因事故アツテ採用セザルノ說明ハ御記載無之到底串本浦ノ願意ヲ採容セザル者ノ如シ是レ不服ノ一欵ナリ

第二條

魚梁山及ビ巢組山ハ串本浦五百餘戶營業ノ基本タル山ニテ他ノ管轄ニ屬シ候テハ終始營業ノ妨害ヲ釀スハ瞭然タル儀ニテ上野浦ニ於テハ一ツノ懸崖ニ止ル者ニテ毫モ營業上ニ關與スルコト無ク加之ナラズ右兩浦之ヲ所屬地トスルモ一點ノ利益アルコトナシ然ルヲ唯徒ラニ兩浦掛ヲ廢シテ上野浦ノ所屬地ト定メラレ候ハ有害無益ノ御處分タルニ付キ不服ノ二欵ナリ

第三條

寶暦三年舊若山藩ニ於テ兩浦入會地ト定メ禁伐林ナルノ處分ヲ受ケシヨリ本訴ニ至ル迄百有餘年間兩浦ニ於テ紛紜ノ跡ヲ絕ヲ互ニ和合シ來レリ然ルヲ原告上野浦ヨリ不條理ノ訴ヲ起シ無證左ノ苦情ヲ以テ舊藩ノ處分ヲ破リ本縣ニ出訴スルヨリ本縣ニ於テハ双方共確證無之ニ付該訴ハ取消ス云々別紙第一號ノ通リ訴外ノ海面ニ至ル迄波及シ權外ノ裁判ヲ下附シナガラ是ヲ裁判ト言ハズ行政處分トナシタルニ依ル司法裁判所ニ於テモ本縣ノ添簡ニヨリ處分ナルカ故ニ其筋エ歎願ノ上結局ニ至ラズンバ採用不成旨御說諭有之依テ該控訴ヲ願下ゲ本縣ヲ經テ內務省エ今日迄出願スルモ到底御採用無ク本縣同一ノ御處分アルハ不服ノ第三欵ナリ

第四條

串本浦ノ地形タルヤ第十二號繪圖面ノ通リ海中丁字ニ位シ西灣洞ノ奥ニ到リ東岐山ニ到リ左右ニ翼ヲ張テ各海面ヲ拘クノ位置ナリ故ニ東西共ニ魚見場所ヲ置キ年中營業致シ候然ルニ東出靈浦ノ方ニ接スル二俣ノ山海面共ニ從前ノ通リニテ西上野浦ノ方ニ接スル兩浦掛リト確定アル魚梁山官林ヲ故ナクシテ上野浦ノ方ニ接スル兩浦掛リト確定アル魚梁山官林ヲ故ナクシテ上野浦ノ所屬ト定メラレ剩サヘ海面ニ波及シ串本浦一ツノ漁業場ヲ沒取セラルヽハ萬々本縣不當ノ處分ナルヲ內務省ニ於テ實地檢査モ無之處分當否ノ如何ヲモ調査セズシテ一ツニ本縣處分ノ通リト御指示アルハ不服ノ四欵ナリ

第五條

魚梁山官林中字片江生ニ於テ別紙第三號證ノ通串本浦檢地帳ニ編入セシ田畑アリ夫レ村境ヲ定メ地形ヲ區畫スルハ縣治行政ノ關要スル所ト雖モ之レヲ故ナキニ施行スル能ハズ或ハ證左ニ據リ或ハ山脈地勢ノ天理ニ基キ或ハ一般公益ノ有ル所ニ依リ又ハ噴火震裂ノ變ニ應ジ又ハ河海暴漲水害ノ變アルニ非ザレバ猥リニ舊畫ヲ廢シ先規ヲ破ル可ラザル者ハ地理ナリ然ルニ天理ニ依ラズ證左ニ據ラズ水火ノ變アルニ非ズシテ俄然兩浦掛リノ舊畫ヲ廢シ上野浦ニ在テハ誠ニ貴物ニシテ無益ノ魚梁山巢組山ヲ所屬四ト定メ串本浦ニ在テハ營業必用ノ基本タル兩山所屬ノ權ヲ剝奪セラレ前顯變長度以來田畑所有ノ實アル證左ヲ取消シ一朝故ナキニ上野浦ノ所屬ト確定アルハ證左ニ依ラズシテ先規ヲ破ルノ處分ナルカ故ニ內務省ニ再三出願スルモ本縣同一ノ御所分ナルハ是レ不服ノ五欵ナリ

第六條

魚梁山ハ別冊繪圖面ノ通リ東ハ瀧ノ谷西尾通リ西ハ灣洞ノ鼻ヲ見通シニテ寶暦度以來兩浦掛リ入會ノ一官林ニテ巢組山

ト云フ別稱アルコトナク又字アルコトナシ然ルチ該訴ノ起原則チ明治七年四月上野浦ヨリ出訴シ古來ヨリ實際無之名稱チ附會シ該山ノ内字船瀬ヨリ灣洞ノ鼻ニ至ル迄チ以テ巢組山ト別稱スルモ決シテ然ラズ如何トナレバ古來ヨリ一ツノ魚梁山ト號スル總稱ニシテ小字ハ三四アリト雖モ曾テ巢組ノ字名稱アルナシ該訴ノ起原ヨリ上野浦適宜附會ノ名稱ナレバ固ヨリ證左ノアルナシ然ルチ本縣ニ於テ不當ノ處分アリシチ尚又內務省ニ於テモ巢組山ト別稱アルノ御指令ニテ魚梁山ト實稱之レアルニ巢組ノ空名チ附會シ一山チ分割シテ故ナキニ他村ノ所屬地ト定メラレ串本浦漁業ノ妨害チ釀シ候ハ不服ノ第六歎ナリ

右條歎ノ通リ魚梁山官林並海面御處分之儀ハ不服ニ付本縣チ引合トシ內務省ニ係リ奉出訴候間被告引合共被召出詳細御審問ノ上從前ノ通リ官林ハ兩浦掛リ海面ハ舊貫ノ通リ御處分相成候樣御裁判奉願上候也

明治十一年九月五日

右　神田文左衛門　㊞
西圓寺實滿　㊞

東京上等裁判所
西判事殿

本訴ハ和歌山縣令チ被告トナシ審理スベキ旨太政官ヨリ達セラレタルニ付內務卿チ被告トナシ訴求セシ所ノモノハ受理スベキニアラザルモノトス因テ訴狀却下候事

明治十一年十二月三日

東京上等裁判所

東京上等裁判所之印

明治十四年四月二十七日終審

官林所屬並海面境界處分不服之訴訟裁決書

裁決書

和歌山縣紀伊國西牟婁郡
串本浦總代　同浦平民
原告　神田文左衛門
右同　代言人
大阪府西區江戸堀上通一丁目
長崎縣士族
原告　木村恕平

官林所屬並海面境界處分不服之訴

和歌山縣令神山郡廉代人
同縣五等屬
被告　十川武治
同　縣紀伊國西牟婁郡
上野浦總代　同浦平民
引合人　鈴木伊三郎
同　鈴木民八

原告陳述之要領　　同　和田林助

第一條

寶曆三年以來禁伐林ト相成タル則原告串本浦ノ所領西カタヘナル魚梁山ノ儀明治六年十二月被告和歌山縣ニ於テ段別調査ノ際其境界上ニ就キ上野串本兩浦爭論チ發シ明治七年四月官林舊來ノ留山チ指境界爭ノ名義チ以テ被告和歌山縣ヘ双方ヨリ一時ニ出訴及候處和歌山縣廳ヨリ上野浦チ原告トシ串本浦チ被告トシテ可取調因テ串本浦ニ於ハテ原願狀チ取リ下ゲ答書ニ成シ可差出旨相達セラレタルニ付明治七年四月二十四日別冊第一號ノ通更ニ答書差出シ取調ノ末明治八年一月二十四日別冊第二號ノ如ク〔今後官林ハ東松立木限リ西大岩ノ尾限リ境界ニ相定メ兩浦掛チ廢止更ニ上野浦屋那官林其他上野浦榜示相定メ且是迄兩浦ニ記傳スル縱橫間數並ニ榜示等曖昧ニ屬シ確書無之ニ付取消ス間此旨可相心得但シ海面境界ハ灣洞ノ端兩藻伏島ノ間中眞限リト可相心得事〕ト裁判相成タルハ不服ニ付明治八年二月二日別冊第三號四號エ和歌山縣ノ添簡チ附シ司法裁判所ヘ控訴致セシ處該官ヨリ該裁判書中ニ双方共確書無之ニ付取消ス云々トアルニ依レバ司法權チ以テ判決セシモノニ非ズ行政權チ以テ處分セシモノナルユヘ其筋ヘ歎願可致筋合ナリト說諭有之タルニ付右控訴狀願下ゲ明治八年五月十九日被告和歌山縣ヘ別冊第五號ノ通リ出願ニ及ビタレドモ採用難相成旨指令チ下附セラレタリ尙又別冊第六號ノ通リ明治八年五月二十四日再ビ歎願書チ呈スルモ受理セラレズ依テ明治八年七月十八日別冊七號八號ノ通リ內務省ヘ歎願致シタレドモ本縣ノ添簡無之ニ付受理セラレズ直ニ歸縣ノ上添簡チ出願セシニ許容セラレザルニ依リ其趣旨明記ノ上明治八年八月十二日別冊第九號ノ通リ內務省ヘ原願書並ニ繪圖面相添ヘ出願セシ處受理相成其後明治九年十一月十八日別冊第十號ノ通沙汰何旁願書チ呈セリ明治九年十一月三十日同第十號中ノ通リ〔願之趣ハ取調中ニ付歸縣ノ上何分ノ沙汰可相待旨〕ノ御指令書下附相成爾後一ヶ年ノ久キチ經テ明治十年十一月二十一日〔願之趣雖聞屆最前縣廳處分ノ通可相心得〕トノ御指令書相添ヘ從前呈シタル書類悉皆被告和歌山縣チ經由シ御下附相成ニ付再ビ明治十一年三月十五日別冊第十一號ノ通リ願書チ內務省ニ呈シ明治十一年四月一日第十一號中ノ通リ〔願之趣雖聞屆旨〕更ニ御指令下附相成候ヘドモ尙又明治十一年六月二十四日別冊第十二號ノ如ク願書チ呈スルモ明治十一年七月十八日是亦〔雖聞屆旨〕ニテ下附相成リ其旨了解致シガタキニ付明治十一年九月五日和歌山縣令チ引合トシ內務卿ニ係リ別冊第十六號ノ通リ官林所屬並海面境界處分不服ノ儀チ東京上等裁判所ヘ出訴及ビシニ明治十一年十一月十一日御召喚ニ依リ出頭セシ處該官牧野殿ヨリ本訴ハ司法卿ヨリ太政官ヘ相伺ヒ已ニ御決議濟ニ相成候ニ付不日被告者チ召喚シ追々審問ニ可及旨相達セラレタリ然ルニ其後明治十一年十二月三日第十七號ノ通リ太政官ノ御達ニ依リ本訴却下チ受タ

リ因テ今般更ニ和歌縣令神山郡廉ニ對シ出訴ニ及ジナリ

第二條

被告和歌山縣令ニ於テ明治八年一月二十四日ノ處分ヲ以テ古來原告串本浦ノ所領ナル字魚梁山ヲ卒然上野浦ノ所屬トセラレタルハ抑何等ノ原由證左ニ據テ處分アリシヤ夫レ從來原告浦ノ所領ナルヲ故ナクシテ一朝一方ノ所屬ト變替アルハ實ニ不當ノ處分ナリト思考セリ是レ不服ノ一ナリ

第三條

魚梁山ハ東松立木ヨリ西灣洞ノ鼻迄古來串本浦五百餘戸營業ノ基本タル專用ノ山林原野ナルニ一朝他ノ管轄ニ屬セラレ候テハ營業上障碍ヲ生ズルコト萬々ナリ而シテ上野浦ニ於テハ一ツノ懸崖ニ止ルモノニテ毫モ營業ニ必要ナル場所ニ之レナキノミナラズ一點ノ利益アルコトナシ然レバ被告和歌山縣令ガ明治八年一月二十四日ノ處分ヲ以テ從來原告串本浦ノ所領ナル山地ヲ謂レナク上野浦所屬ト定メラレタルハ到底有害無益ノ處分ト謂ハザルヲ得ズ是レ不服ノ二ナリ

第四條

原告串本浦所領ナル該魚梁山ハ寶曆年度舊和歌山藩ニ於テ留メ山ノ下令アリタレドモ地元ハ素ヨリ原告浦ノ所領ニ之アリシ處該山段別調査ノ機ニ乘ジ上野浦ニ於テ先規ヲ破リ無證左ノ苦情ヲ唱ヘ不條理ノ訴ヲ起セシヨリ和歌山縣ハ双方ヲモ確證無之ニ付取消ス云々別冊第二號ノ通リ訴外ノ海面ヲモ併テ是レカ處分ヲ爲シ且同縣ノ添簡ヲ以テ司法裁判所ヘ控訴及ビシ處同所ニ於テ和歌山縣ノ裁判書中確證無之ニ付取消ス云々トアレバ行政處分ナル旨逐セラレタルヨリ和歌山縣亦司法裁判所迄ノ如ク素ヨリ行政處分ト云フモノナリト辯解セラレタルニ依リ即チ行政處分ニ基キ別冊第五號六號ノ通リ願出願スルモ曾テ何等ノ理由ニヨリ採用不相成トノ說明ハ無之只一撮ニ願ノ趣採用難相成ト漠然タル指命ヲ下附セラレタルハ是不服ノ三ナリ

第五條

串本浦ノ地形タル第十五號繪圖面ノ通リ海中丁字ニ位シ西灣洞ノ鼻其北方ハ海面沖ノニ到リ東ハ岐山ニ到ル左右ニ翼ヲ張リ海面ヲ抱クノ位置ナリ故ニ東西トモ魚見場ヲ置キ從來營業致シタリ然ルニ東出雲浦ノ方ニ接スル岐山海面トモ從來通リニシテ西上野浦ノ方ニ接スル該魚梁山ヲ一朝故ナクシテ上野浦ノ所屬トシ剩ヘ海面ヲモ併テ處分シ串本浦一ツノ漁業場ヲ沒取セラルヽハ萬々不當ノ處分ナリ是レ不服ノ四ナリ

第六條

魚梁山一名アジロ山ト云フ内ニ於テハ別冊第十三號證ノ通リ慶長六年ニ檢地ヲ受ケ第十四號證ノ通リ串本浦檢地帳ニ編入セシ田地アリテ原告串本浦カ該カタヘナル魚梁山ノ地元ナルハ明瞭ナリ夫レ村境ヲ定メ地形ヲ區畫スルハ縣治上ノ管知スル所ナリト雖モ或ハ證左ニ據リ或ハ山脈地勢ノ天理ニ基キ或ハ一般公益ノアル所ニ依リ又ハ噴火震裂ノ變ニ應ジ又ハ河海暴漲水害ノ變アルニ非ザレバ猥リニ其舊貫先規ヲ廢棄シ之

ヲ變換施行スル能ハザルハ萬々ナリ然ルニ被告和歌山縣令ニ於テ前件慶長度以來田地所有ノ實アル原告カ確證ヲモ討求セズ又天理ニ依ラズ證左ニ依ラズ水火ノ變アルニ非ズシテ俄然原告浦ノ所領ナル舊貫ヲ廢止シ上野浦ニ在テハ贅物ニ屬スル無益ノ魚梁山ヲ其ノ所屬トシ串本浦ニ在テハ營業必用ノ基本タル地所々領ノ權ヲ剝奪セラレ原告五百餘戸營業ノ障碍ヲ生ジタルハ舊和歌山藩ノ先規ヲ破リタル不當ノ處分ナリ是不服ノ五ナリ

第七條

魚梁山ハ古來原告串本浦ノ所領ナルコトハ第十八號第十九號證據書ノ如ク又海面ハ沖ノモフシ島迄原告浦ノ所領ナルコトハ第二十號證據書ノ如シ而シテ該魚梁山ノ上野浦地元ニアラザルコトハ第十九號證則安永年度ノ大指出帳ニ記載無之又モフシ島モ上野浦ニ屬セザルコトハ第二十一號證則同浦地誌取調書ニ記載セザルヲ以テ判然タリ然ルニ明治八年一月十四日ヲ以テ和歌山縣令カ別冊第二號ノ如ク該魚梁山ヲ二分シ東松立木ヨリ西大岩ノ尾嶼リ上野浦ノ所屬トシ大岩ノ尾以西灣洞ノ鼻迄同浦榜示ト定メ和歌山縣令カ榜示ト云ヘ併テ海面ハ兩モアシ島中眞嶼リト處分セラレタルハ第二條乃至第六條ニ陳辯スル如ク萬々不服ニ耐ヘザルナリ抑モ地方官ニ於テ郡村ヲ改稱シ及ビ境界ヲ釐正スルハ其管知スル所ナリト雖モ縣治條例及ビ明治八年太政官第二百三號御達府縣職制章程ニ依ルモ右分合改稱及ビ境界釐正ノ如キハ主務ノ本省ニ稟議シ許可ノ後始テ施行セラルベク又明治十一年七月二十二日太政官番外御達第二項ニ依ルトキハ郡區境界ノ組替及町村ノ飛地組替ノ如キハ其已ムヲ得ザル分ト雖モ內務卿ヘ具狀シ其許可ヲ受ケ施行セラルベク而シテ其已ムヲ得ザル分トハ第六條ニ開申スル如ク一般公益ノアル所ニ依リ或ハ震裂暴漲ノ變アル等ノモノニ可有之然ルニ該魚梁山及ビ海面區畫ニ至テハ固ヨリ已ムヲ得ザルノ事故コレナキニ和歌山縣令カ確證ヲモ討求セラレズ又主務ノ本省ヘ一應ノ稟議モコレナク只其ノ臆測ヲ以テ變替ノ處分ニ及バレザルハ職權外ニ涉リシモノト云フモ過言ニアラザルナリ

第八條

寶曆年度舊和歌山藩ニ於テ該魚梁山ヲ留山ノ處分相成リタル所以ハ別紙繪圖面ノ通リ原告串本浦ハ該山林原野ノ下面ニ在テ漁業ヲ營ミ該山野繁茂鬱蒼セザレバ魚類輻輳セズ上野浦ノ漁場タル該山野ヨリ四方ナルヲ以テ該山野繁茂セザルモ聊損害ナキヲ以テ間々該山野ニ立入リ草木刈伐シ大ニ串本浦ノ損害ヲ釀スニ依リ舊和歌山藩ハ是等ノ事實ヲ酌酌セラレ終ニ留山ノ下命アリタルナリ目今ニ於テ大岩ノ以東尙又禁伐林ナレバ若シ上野浦ノ立入リ草木刈伐セシトキハ見屆次第其筋ヘ告發スレバ相當ノ處分相成儀ハ之アリト雖モ既ニ刈伐ノ後ニ至リ假令處分コレアルモ其刈伐ニ罹リタル草木ハ再ビ舊樣ニ復スベキモノニ無之故ニ其ノ未ダ刈伐セザルニ先ダチ宜シク方法ヲ設ケ之ヲ保存セザルベカラズ前陳ノ如ク若シ上野浦ノ者

刈伐スルトキハ大ニ串木浦ノ損害ヲ釀ス筋ニ有之殊ニ伐木ハ易シト雖モ其材料トナルハ培養ノ力ヲ極メ且幾多ノ星霜ヲ經ザレバ容易ニ繁殖スベキモノニ非ズ是故ニ佛國ノ如キハ一種特別ノ森林法ヲ設ケ以テ山林ノ繁殖ヲ護シ且之レヲ貴重スレバ則該魚梁山官地ノ如キハ之レヲ上野浦ニ屬シ或ハ斬伐ノ患ヘアランヨリ寧ロ依然原告浦ノ所領ニ之レアラバ原告浦ニ在テハ營業必要ノ基本タル山野ナルユヘ充分ニ保護シ所謂其ノ未ダ斬伐セザルニ先ダチ保存ノ方法ヲ得タルモノニテ第一禁伐林ノ名實相協ヒ且原告串木浦ハ爲メニ夥多ノ產物ヲ獲收シ國浦ノ人民モ亦テ其ノ利益ニ潤ヒ一舉兩全ノ事ニ之レアリ是則原告浦ガ該魚梁山ヲ從前ノ通リ其ノ所領ニ復セラレン事ヲ企望シ出訴及ビタルナリ

第九條

被告ニ於テ其ノ第一號及第二號證則安永寬政兩度ノ大指出帳上野浦部ニ上野串木綱代ロ山論所寶曆三酉霜月御留山トナセシ以付候ト記載アル如ク舊和歌山藩ガ寶曆年度留山トナセシ以降ハ兩浦掛リ入會地或ハ兩浦持合ト稱ヘ全ク兩浦兩屬ノ姿ニテ其ノ地盤曖昧ニ付シ置キタルナリト主張スト雖モ一箇ノ地盤ヲ以テ兩方ヘ屬シ兩屬ト云ヘル如キハ假令維新以前諸藩割據各其施設ヲ異ニセシ時ト雖モ曾テコレナク抑モ該魚梁山ノ古來原告串木浦ノ所領ナルコトハ原告第十九號證據書ノ如ク判然タリ夫レ被告ガ提供スル第一號ナル安永二年度ノ大指出帳ハ原告第十九號ト同一ノモノナルニ原告提供スル分ニハ各浦各村ノ庄屋肝煎連印有之而シテ被告ガ提供スル分ニハ其ノ第一號ヲ云フ各浦各村ノ庄屋等ガ捺印モ無之全ク反古ニ等シキモノナリ又被告第二號寬政度ノ大指出帳ニハ各浦各村ノ庄屋等ガ連印之アレドモ此レハ是反古ニ等シキ安永度ノ分ヲ寫シ取リタルモノニシテ必竟其ノ本正シカラザルモノニ做フタルモノ故譬ヘ上野浦部分內ニ該魚梁山ヲ登記アルトモ上野串木兩浦兩屬ト云フ證憑ト爲スニ足ラザルナリ且被告第三號安政度山林名寄帳ノ如キモ安永度大指出帳ニ原キ之ヲ觀レバ是亦上野浦ニ於テ自儘ニ書上ゲタルモノト云ハザルヲ得ズ

第十條

被告ニ於テ原告ハ本縣ガ處分ヲ爲スニ主務ノ本省ニ稟議セザリシ總申立レドモ此事タルヤ本縣ト主務省ノ間ニ關係ヲ有スルモノニシテ固ヨリ原告ハ之レニ咈ヲ容ルヽ權ヲ有スル理ナシト主張スレドモ苟モ其施政處分上ニ付キ人民ニ於テ多少ノ妨害ヲ來セシト思慮スルトキハ或ハ其處分ノ改良ヲ歎キ或ハ其ノ不服ヲ訴ルコトヲ得若シ被告ガ主張スル如ク原告ガ之レニ對シ咈ヲ容ルヽ權ナシトセバ假令如何ナル壓抑ヲ受ルモ默止シテ是レガ訴願ヲ許サレザルモノヽ如シ斯ノ如キ理由萬々無之ナリ

第十一條

被告ニ於テ原告ガ明治六年七月ノ地誌取調書ヲ證據トシ海面ハ沖ツモフシ島迄自浦ノ所屬ト申立ルモ素ヨリ海面ハ官有ニシテ人民ニ所用ノ權ダモ無キモノナレバ右所屬ト申立ル處ハ全ク誤譯ナルコト明瞭ナリ殊ニ該地誌取調書ハ其際正院ニ於テ地誌提要編纂有之云々原告ガ今之ヲ裁判上ノ證據ニ提供スルハ全ク地誌取調書ノ性質如何ヲ辨知セザルモノト云ベシト主張スレドモ原告第二十號及ビ第二十一號ナル地誌取調書ヲ擧テ證據ト爲ス所以ノモノハ該地誌取調書ノ性質如何ヲ論ズル譯ニ無之唯沖ツ藻伏島ハ原告浦ノ屬島ナルヲ以テ該島迄ハ古來原告浦ノ漁場ナリシコトヲ證セシ主旨ニ有之且官有ナル海面ヲ以テ原告浦人民所用ノ權アリト開陳スル筋ニ無之殊ニ該地誌取調書ハ正院ニ於テ地誌提要編纂ノ用ニ供セラレタルモノニ係ルヲ以テ裁判上ノ證據ニ提供スルモノニアラズト云フ理由ハ素ヨリ無之最モ裁判上ノ證據ト爲シ効力ヲ有セシモノナリ

第十二條

被告和歌山縣令ニ於テ明治八年一月二十四日ノ處分ニ付明治八年五月中上野浦ノ者共敵名串木浦カタヘナル田地ニ立入リ檢査丈量スルニ因リ原告串木浦ヨリ上野浦ヘ對シ該地所ハ古來串木浦ノ公田ニシテ檢地帳ニ判然明記コレアルモノナルニ何人ヨリノ差圖アッテ丈量檢査等ニ及ベル譏ノ旨推問セシニ上野浦ニ於テハ漁キニ當浦ニ屬セラレタル魚梁山官林內ニ籠レル耕地ナレバ是亦上野浦ノ屬地タルコト明瞭ナリ既ニ自浦ノ所屬タル上ハ檢査丈量スルハ當然ナル旨主張シ一時紛議ヲ生ジ容易ナラザル場合ニ立至リタリ是等ハ必覺被告和歌山縣廳ノ處分其ノ當ヲ得ザルヨリ釀生シタルモノニシテ此ノ一事ニ依ルモ該カタヘナル魚梁山ハ古來原告串木浦ノ所領タリシコト推知スルニ足レリ

第十一條

被告ニ於テ明治八年一月二十四日官林境界ヲ東松立木限リ西大岩ノ尾限リトシ之レヲ上野浦所屬ト定メタルハ天然ノ地理ト見認ル處ニ依リ處分シ又海面漁場ハ從前兩浦ノ申傳ヘニ因リ灣洞ノ鼻ヲ見通シ兩モフシ島ノ中眞ヲ界ト定メタルモノナリト其他討論數岐ニ渉ルト雖モ要スルニ答辯ノ主義ハ右ノ兩點ニ過ザルニ似タリ抑被告カ所謂天然ノ地理トハ該魚梁山ハ平坦ノ山地上ニ村落ヲ爲シタル上野浦支郷ノ畑地ヨリ續キ海面ニ降ル橫斜面ノ岸上ニアリテ上野浦ノ脚部ニ位スルモノナレバト那ノ形容ヲ以テ果テ天然ノ地理トシ上野浦所屬ト爲ストキハ松立木限リトアル所ヨリ以東出雲浦ニ據スル岐山迄ハ出雲浦ノ地續キニシテ該魚梁山ノ上野浦地續キト些モ異ナル所ナキヲ以テ是亦出雲浦ノ所屬ニ歸ス可キ歟又地續キヲ以テ天然ノ地理ト云ハヾ該カタヘナル原告浦ノ公田ハ地續キノミナラズ現ニ該山ノ脚部ニ在ルニ依リ無論原告串木浦ニ屬ス可キハ被告ガ所謂天然ノ地理ナラズヤ況ヤ從來原告串木浦ノ所領ナルニ於テヲヤ然ルヲ被告和歌山縣ハ是等ノ理由ヲ探求ナク漫然該魚梁山ヲ以テ上野浦ニ屬シ其內ニ位スル原告浦ノ公田及新開田畑ニ至ル迄依然原告浦ニ屬シアルハ甚ダ混合ノ處分ナリ又被告ニ於テ原告串木浦ノ漁場ハ灣洞ノ鼻ヲ見通シ兩藻臥島中眞限リト兩浦ノ申傳ヘニ因リ云々ト主張スレドモ決

テ然ラズ右等ノ申傳ヘ之レアラバ明治八年一月二十四日ノ處分ニ服セズ爾後屢内務卿ヘ直願シ或ハ内務卿ヘ對シ東京上等裁判所ヘ上訴ヲ爲スベキ謂レコレナキナリ

第十四條

被告ニ於テハ該魚梁山ヲ以テ原告串木浦ヘ屬スルモ又上野浦ニ屬スルモ縣治施政上ニ於テ聊妨害ノ筋無之旨明言セリ夫レ甲區ヲ以テ乙區ヘ併セ或ハ一區ヲ割テ二區ト爲ス如キハ施政上便宜若クハ妨害ノ筋之レアルニ方リ變替スルモノニ可有之若シ便宜妨害ノ筋コレナキトキハ故ラニ之ヲ割キ之ヲ併スルヲ要センヤ然シテ被告ハ該魚梁山ヲ以テ上野浦ヘ屬セシハ從來曖昧ナル兩浦兩屬ノ名ヲ廢シ更ニ之ヲ上野浦ノ所屬ト定メ其境界ヲ明定シタリト主張スレドモ第九條ニモ開陳スル如ク一箇ノ地盤ヲ兩屬トシ其境界ヲ曖昧ニ付シ來ル筋ハ無之抑モ該魚梁山ハ固ヨリ原告浦ノ所領ナリシコトハ第十九號證ノ如ク判然ナリ前陳ノ通リ被告ニ於テ該魚梁山ヲ以テ上野串木兩浦何レエ屬スルモ施行上妨害ノ筋無之ト明言スル上ハ故ラニ上野ニ屬スルモ便宜ノ筋ハ無ルベシ果テ然ラバ前ノ如ク更ニ原告串木浦ヘ改屬相成ル方至當ト云ベキナリ

第十五條

沿海ノ居里ニ於テ其ノ地先ナル海面ハ其ノ居里ノ漁場タルハ十中八九ノ慣例ナリ猶遠江ニ沿フタル海洋ヲ遠江灘ト唱ヘ紀伊ニ沿フタル海洋ヲ紀州灘ト唱ノルガ如シ被告モ亦居里ノ地先キナル海面ハ其ノ居里ノ漁場タルノ慣例アリト明言ス抑原告串木浦ハ該魚梁山内ニ數ケ所ノ魚見場ヲ設ケ魚鱗輻輳如何ヲ鑑定スル用ニ供シ其ノ地先ナル海面ニ於テ漁業ヲ營ミ來レリ斯ノ如ク梁山ノ地先ナル海面ヲ以テ古來原告浦ノ漁場トナスノミナラズ梁山ノ下面ナル海濱ハ西灣洞ノ鼻迄素ヨリ原告浦ノ所屬ナルガ該魚梁山ハ原告浦ノ所領ニ係ルハ判明ナリトス

第十六條

魚梁山内新開島ノ地券狀ヲ上野浦ヘ授與相成リタル旨本年四月二十九日御審問ノ際被告ガ開申シタルニ付原告ヘ其事如何ヲ推問アリシモ原告總代人ニ於テ其節之ヲ明知セザリシニ抑該地ノ成リ立ハ過ル寶曆年度以前串木浦ノ人民之ヲ開墾シ所謂隱畑ニシテ今日ニ至リ尚串木浦人民ノ所有ニ係レリ然ルニ斯ノ如キ隱畑ダモ其丈量ヲ遂ゲ地券狀ヲ授與セラルヽ旨ノ御達ニ基キ原告串木浦ノ段別帳ニ組込ミ上申致シ上野浦ヨリモ亦同樣上申致シタルヲ以テ和歌山縣廳ハ兩浦ノ段別帳重複ノ儘明治八年ヨリ租稅徵收相成タリ斯ノ如ク該畑ノ貫租兩浦重複相成タルニ付地主ハ何レヘ上租致シ候テ可然哉一時迷惑セシノミナラズ之ガ爲メ兩浦紛議ヲ生ジ遂ニ明治九年九月二十五日舊戸長佐々木虎之助ヨリ右云々ヲ縣廳ヘ相伺タル處串木浦ハ當時内務省ヘ歎願申ニ係ルヲ以テ其事情ヲ酌量シ別冊第二十二號ノ如ク〔書面伺ノ趣ハ追テ所屬確定候迄所有者ノ在所ヲ以テ當分假リニ串木浦ノ帳簿ニ組置キ上野浦ニテ相除候儀ト相心得〕云々ト指令アリタリ尚又明治九年十月十四日別冊第二十三號ノ如ク佐々木虎之助ヨリ縣廳ヘ上申及ビタル處〔書面帳簿上重複ノ地所上野浦ニ屬スベキ見込ニ候ハヾ其旨串木浦人民ニ申談シ同浦ノ帳簿上刪除ノ儀出願致サセ候儀ト可相心得〕ト漠然タル指令ヲ下附相成タレドモ串木浦ニ於テ之レニ服從セザルハ素ヨリ論ヲ俟ズ而シテ明治九年十月二十六日別冊第二十四號ノ如ク上野浦總代鈴木伊三郎鈴木民八ヨリ段別重複區分願ヲ縣廳ニ呈シタリ其後明治十年三月一日別冊第二十五號ノ如ク舊區長寺島良業ヨリ該畑地貫租重複云々ヲ上申致シタル處〔書面兩浦境界論ノ處分串木浦人民服從セザルニ付其處分實行難致然重複ノ儘收稅ノ儀ハ不都合ニ付追テ所屬確定候迄當分地主共直納ト假定候條次記ノ通リ可相心得〕ト指令アリタルニ因リ兩浦ノ紛議相治リ貫租ハ明治十年分ヨリ地主共直納致シ段別地價帳モ亦地主ヨリ別制ヲ以テ差出シタリ其後何分ノ御沙汰モ無之明治十一年ニ至リ卒然該新開畑ノ地券狀ヲ上野浦ニ授與シ同所字カタヘナル新開畑ノ地券狀ヲ串木浦ニ授與セシハ其當ヲ得ザル處分ト云ベシ

第十七條

引合人上野浦總代ニ於テヤナ官林内ニ天正ノ頃當浦高松寺之レアル云々又官林下ノアシロモ當ニ供セシヨリ稱シテアバ引キノ島ト言ヒ習シタルナリ又上野浦ニ於テ十年前串木浦ヨリ亥ニ沖モブシ島ヘ網ヲ張リ小鯉漁リセシニ付云々申立ルト雖モ沖ノモブシ島限リハ串木浦漁業場ナルユヘ乃チ沖ノモブシ島以内ニ於テ網ヲ張リ未ダ魚ヲ獲ザル中ヲ海潮ノ變動ニ隨ヒ沖モブシ島以外上野浦ノアジロ場ヘ張リ網流レ込ミ其ノ魚ヲ獲タリシナリ是故ニ上野浦ヘ幾分カ其魚ヲ分與シタリ此ハ是條理上已ムヲ得ザレバナリ又上野浦ニ於テハ串木浦ハ古來魚見場設置コレアルヲ以テ官林ハ自浦ノ所屬云々スト雖モ當浦ニ於テモ魚類輻輳ノ都合ニヨリ出雲浦所領ヘ至リ魚見致スコトコレアリ各自勝手ノ地ニ至リ魚見致ス云々申立レドモ何レノ浦ニ於テモ其ノ一浦限リニ支配仕來リシアジロト唱ル場所ニハ他村ノ領内ヘ勝手ニ魚見場ヲ設クベキ筈無之何レノ浦ノアジロトモ定ラザル海面ニ魚ノ輻輳スルトキハ都合ニヨリ他領ノ山上ニ登リ魚見スルコトアルモ之ヲ以テ何浦ノアジロト定リタル場所ニ比較スルハ其ノ當ヲ得ザルナリ該アジロト唱フル場所ハ未ダ魚ノ集ラザル前キヨリ網ヲ張ルカ故ニ山上ニハ平常魚見場ノ設ケ無カルベカラズ且大島樫野須江ノ三ケ浦ニアル入會アジロ場ノ比例ヲ擧ゲ他領ノ山ニ登リ魚見スルコトアリト主張スト雖モ大島須江兩浦入會アジロ場ノ事實ハ明了ナラザレドモ樫野古座兩浦ニ於テハ一ツノ網代ニ就キ兩浦隔日ニ漁業ヲ營ムニ付網代山ハ假令何浦ノ所領ニモセヨ隨テ魚見場ヲ共ニセザルヲ得ズ然レドモ串木浦上野浦アジロ場ノ如キニ至テハ一浦限リ判然分界コレアルニ因リ只勝手ニ他領ヘ跨リ魚見場ヲ設クル理由ハ萬々コレナク且上野浦ニ於テハ明治七年四月和歌山縣ヘ出訴ノ際串木浦ヨリアンドウノ鼻トハ高見島ノ地方ノ鼻ナリト申立置キ云々主張スト雖モ串木浦ニ於テ高見島ト云傳ヘタルモノハコレナキナリ沖ノモブシ島

迄ハ自浦ノアジロ塲ナルユヘ同所地方ノ野山ハ留山ニ籠リタルモノト申陳セシノミニシテ決テ高見島地方ノ弊ナリト上陳セシコトナク前條陳述ノ次第ナレバ右魚梁山ハ從前ノ通原告浦ノ地元ニ復シ海面境界ハ舊書ノ通沖ツ藻臥島限リ更ニ所領相成ル樣裁判受度旨申立タリ

被告答辯之要領

第一條

抑屋那官林ニ就テハ寶暦三年以前ヨリ上野串本兩浦屢爭論ヲ發セシヲ以テ舊和歌山藩ハ其爭論ヲ遏絶セン爲メ寶暦三年ニ留山ノ下命ヲ爲シタルコトハ別冊第一號及第二號證即チ安永寛政兩度ノ大指出帳ニ〔上野串本論所綱代山寶暦三年酉霜月御留山ニ被仰付候〕ト記載アルヲ以テ明ナリ斯ク留山ノ下命アリタルヨリ爾後上野浦ヨリ其樹木ヲ斬伐セントスルトキハ串本浦ニテ之ヲ咎メ串本浦ヨリ斬伐セントスルトキハ上野浦ヨリ之ヲ拒ムノ慣行トナリ舊時ヨリ今日ニ至ル迄兩浦只兩浦掛入會地或ハ兩浦持合ナドヽ稱ヘ則チ兩浦兩屬ノ委ニテ多年其地番ヲ曖昧ニ付シ置キタリ必竟舊藩治ノ頃ハ時勢草昧ニシテ政務完整セザルヨリ斯ク不都合ノ處分ヲ爲シ其地番曖昧ナルモ塞テヽ問ハザリシナリ然リト雖モ目今ニ至テハ世運漸ク開進シ事物大ニ改良セシヨリ行政諸般ノ事務モ亦隨テ整頓ニ及ビ就中地籍境界等ハ其調査最精密明亮ヲ要スルノ際尙兩浦爭論ヲ發シ共ニ本縣ヘ處分ヲ請願スルニ至リ旁以テ之ヲ案テ置キカタク故ニ天然ノ地理ニ因リ明治八年一月ノ處分ヲ爲シタリ以上該處分ノ爲サヾルベカラザル所以ナリ

第二條

串本浦ハ明治七年始メテ本縣ヘ出願セシトキハ貞享度牛野飼ニ付申合書ノ一證ヲ提供スレドモ元ト自浦限ノ控書ナルヲ以テ之ヲ確證ト見認ガタク況該申合書ヲ以テ證明スルモノハ只ニ入會ノ一點ニ在リテ更ニ所屬ノ如何ヲ論セシコトナシ然ラバ原告ハ勿メヨリ官林ハ兩浦所屬ノ委ナル事ヲ了知シタルニ相違ナシ已ニ之ヲ了知スレバコソ明治七年ヨリ明治十二年ニ至ル迄六ケ年ノ星霜ヲ經ル間ニ本縣内務省及東京上等裁判所當上等裁判所ヘ十數通ノ願書訴狀ヲ呈シテ草昧ナル舊藩時ノ處分ノ如ク兩浦掛入會地ト復センコトヲ請願セシナラン然ルニ今日ニ至リ卒然之ヲ謬誤ナリトシテ官林ハ古來自浦ノ所領ナリト申立レドモ原告浦總代ハ明治七年ヨリ今日ニ至ル迄終始同ジク神田文左衛門ナレバ斯ノ如キ謬誤アルベキナシ之ニ因テ之ヲ觀レバ原告ハ確乎不動ノ定見ナク事ヲ左右ニ轉ジ妄リニ地力官ノ所分ニ不服ヲ唱フルモノナランカ而メ其自浦ノ所領ナルコトヲ證スル貞享度牛野飼ニ付申合書ハ前顯已ニ述ル如ク只自浦限ノ控書ナル而已ナラズ寶暦三年舊和歌山藩ニ於テ兩浦掛ト所分セシ時ヨリ凡六十餘年以前ニ係ル書類ナレバ之ヲ今日ニ提供スルモ不用ニ屬セン且原告ヨリ呈シタル安永度ノ大指出帳ニハ官林ヲ上野浦分ニ記載之ナケレドモ舊時ノ大庄屋元ヨリ次第引續キニ相成目今本藩ニ存在スル安永寛政兩度ノ大指出帳及安政度ノ山林名寄調帳即チ第一第二第三

號證ニハ判然官林ヲ上野浦分ニ記載有之ハ決テ串本一浦ノ所領ト爲シ難シ然ルニ原告ハ自分ニ揭ゲル安永度ノ大指出帳ハ本帳ニシテ本縣ヨリ揭ゲル同年度ノ大指出帳ハ大庄屋元ノ控書ナリ而シテ右控書ヲ朱色ニテ添削シ其添削セシモノヲ以テ寛政度大指出帳ニ引直シタル者ナレバ假令寛政ノ分ハ本帳ナルモ到底安永度ノ控ヨリ誤ヲ傳ヘタルナラント主張スト雖モ本縣ヨリ揭ゲシ分モ共ニ舊藩官廳ノ一部ナル大庄屋役所ニ於テ調査セシモノナレバ此ヲ以テ官林ノ兩浦兩屬ノ委タリシコトヲ證明スルニ足ルナリ況ヤ該帳ヲ一見朱色ニテ添削セシ上尙又青色ニテ添削シ舊帳落チ永遠ニ保存シテ古今ノ變遷ヲ見ルニ便ナラシムルハ則舊藩治ノ成規ナレバ之ヲ以テ誤ヲ傳ヘタリト言フベカラズ且官林地盤甲村ニ在ルトキハ假令甲乙二村或ハ甲乙丙丁數村之ニ入會スルモ其樹木ノ風折及樹木ノ株數ヲ調査開申スル等ノコトハ必ズ甲村即チ其所屬ノ村ニテ擔當セシハ一般ノ慣例ナリ然ルニ今第四第五號證ニ據ルト時ハ即チ兩浦立合ニテ此等ノ事ヲ申達シ來リシヲ以テ其地盤ノ曖昧タル益明ナリ其他第一條ニ述ブル如ク元ト舊藩ニテ寶暦三年曖昧ノ處分ヲ爲シ以來今日迄其處分通實行シ來ル者ナレバ兩浦ヨリ官林ニ關渉スル現在ノ所爲一トシテ兩浦兩屬ノ委ニ非ザルナシ以上即官林ノ地盤曖昧ナル所以ナリ

第三條

前條陳述スル如ク官林地盤ハ曖昧ニシテ兩浦ヨリ初メ本縣ヘ差出シタル書類ハ何レモ證左ト認メ難キヲ以テ實地檢査ノ上天然ノ地理ニ基キ之ヲ上野浦所屬ト處分シタリ抑モ上野浦ハ曠漠ナル平坦ノ山地上ニ村落ヲ成シ官林ハ同浦家續ノ島ヨリ海面ニ降ル横斜面ノ屋上ニ在テ別ニ一ケノ山形ヲ爲スニ非ズ必竟官林ハ上野浦ノ脚部ナリ且諸大指出帳ニ因レバ官林境域ハ長七町横平均大凡一町半ト記載有之ヲ以テ實地檢察ノ際測量ヲ爲セシ處樹木密生シ或地形風曲スルヲ以テ精密ノ測量ヲ遂ゲガタク東松立木限ヨリ西松立木限リ即大岩ノ尾迄大略七町餘ニシテ其間松樹及雜木密生シ東松立木限リノ處ハ山骨少シク隆起シ其東下ニ大ナル谷アリテ串本ノ地ト連絡ヲ絶テリ然ルニ上野浦ニ於テハ前顯述ブル如ク家屋ノ檐下ニ在ル近接ノ地ナレバ之ヲ同浦ニ屬セシハ眞ニ天然ノ地理ト云ハザルヲ得ズ原告ハ海面漁業場ヲ所用スルヲ以テ官林ハ自浦ノ所領ナリト唱フルトモ管下ニ於テ甲村ヨリ乙村ノ地先海面ヲ所用スル舊慣ハ間々有之儀ナレバ海面所用ノ區域ヲ以テ妄リニ陸地ニ推及スベキ理ナシ以上即チ官林ヲ上野ニ屬スルハ天然ノ地理ト見認メシ所以ナリ

第四條

官林藩ノ耕地ハ慶長度串本浦檢地帳ニ記載アルハ官林ノ串本所屬ナル確證ナリト申立ルト雖モ右耕地ハ官林所屬處分以前ヨリ串本名受ニシテ其地盤已ニ判然タレバ官林境界外ナルコトヲ勿論ナリ故ニ之ヲ上野浦所屬ト變更スルニ及バズ官林ハ然ラズ古來地盤曖昧ナルヲ以テ其所屬ヲ處分セザル可ラズ是即チ天然ノ地理ニヨリ官林ヲ上野浦ニ屬シ耕地ヲ依然串本浦ニ

屬シ置キタル所以ナリ又原告ハ右耕地ノ内七枚ハ慶長檢地帳名受三百三十五番及三百三十六番ノ地ニシテ其餘ハ新開地ナリト申立ツレドモ別冊第六號證卽串本浦ヨリ明治六年六月ニ本縣ヘ差出シタル檢地名寄合記帳及其耕地圖ニハ右耕地ヲ悉皆三十六番ノ古田畑ト取調有之前後申立ル處甚ダ齟齬スルハ最モ解シ難ク殊ニ慶長度ニハ耕地ノ順序ヲ逐ヒ檢地丈量セシ者ナレバ當時ニ在ツテ一筆ニ記スモノハ縱令其地數枚アルモ必ス聯絡接續スベク又田畠實地ノ順ト檢地番號ノ順序ト略相適フベキ筈ナリ然ルニ右合記帳及耕地圖ニ據レバ三百三十五番ノ地ハ古荒トナリテ今已ニ實跡削滅シ三百三十六番ハ三枚ニ別レ三百三十八番ハ二枚ニ分レ外耕地ヲ隔テヽ各所ニ散在シ又三百三十五六番ハ西端官林磯ニ三百三十七番ハ東端出雲浦境ニ三百三十八番ハ西端瀧ノ谷ニ在リテ甲ハ西ニ在リ乙ハ東ニ飛ビ丙ハ復タ西ニ遷リ順序ヲ失シ錯雜ヲ極ムルハ甚ダ曖昧ナル儀ナリ必竟舊藩治ノ頃ハ耕地ノ調査精密ナラザルヨリ各村浦ニテ勝手ニ古田荒蕪ノ高ヲ新開地ニ遷シ或ハ其字ヲ換ヘタルモノニテ實地自然變更シタレバ今日ニシテ官林磯ノ耕地ヲ以テ慶長度檢地ノ〔カタエ〕二筆ニ當ルト申立ツルハ最モ怪ムベクシテ信ジガタク假リニ之ヲ古田トスルモ前顯述ル如ク官林處分以前ヨリ其境域外タルコト明カナレバ官林ヲ處分スルニ右耕地ノ如何ヲ推究スルニ及バズ況ヤ地勢ニヨルモ右耕地ハ僅ニ官林ノ東端一部分ニ掛ルノミナレバ上野浦ノ官林全部ニ密接スルト同一視スベカラズ然ルニ原告ハ官林東松立木ヨリ以東出雲浦ニ接スル岐山迄ハ出雲浦ノ地續ニシテ官林ノ上野浦地續ナルト其景況些モ異ナル所ナキヲ以テ是亦出雲浦ノ所屬ニ歸スベキ筈ナリト疑問ヲ爲スト雖モ地盤隣味ニシテ兩浦論所ナル官林ヲ處分セシ例ヲ以テ地盤境界瞭然タル出雲浦續ノ地所ニ比較スベキ謂レ萬々コレナシ以上官林下ノ耕地ハ官林所屬處分ニ於テ一毫ノ關係ヲ有セザル所以ナリ

第五條

官林所屬ヲ定メタルヲ以テ原告ニ於テ自浦ニ妨害ヲ與ヘラレタリト主張スル要旨ハ串本浦所屬ト爲ストキハ樹木要用ナルヲ以テ之ヲ保護シ上野浦所屬トナストキハ樹木要用ナキヲ以テ之ヲ斬伐スルノ恐アリト言フニ外ナラズ然ルニ官林ハ單ニ漁業場ニ緊要ナラントノ見込ニ因リ之ヲ禁伐林トナスモノナリ已ニ禁伐林タル以上ハ之ヲ上野浦ニ屬スルモ同浦ヨリ叨リニ斬伐スベキ謂レナク今原告申除ニ於ケル上野浦村民ニ於テ之ヲ盜伐センコトヲ恐ルヽニ過ズ此ノ如キハ素ヨリ常理外ニシテ決テ所屬如何ニ關セザルモノナリ故ニ若シ之ヲ怖レバ目擊次第其筋ヘ告發シテ可ナリ又官林監守人ハ主務者ヨリ出張ノ係官ト協議ノ上適宜ノ者ニ任ズル成規ナレバ縱令之ヲ串本浦ニ屬スルモ必ズ同浦ノ者ニ監守ヲ命ズルト豫定スベキニ非ズ原告ハ官林監守ハ必ズ其所屬ノ浦村ヨリ負擔スル者ト誤認セシモノナルベク元來所屬トハ其ノ地盤ヲ某村ニ編入スルヲ云ヒアルガ如シ入會トハ二村又ハ數村其山ニ入會シテ互ニ獲分ノ利ヲ得ル者ヲ云フ今原告浦ニテ官林内ニ魚見場ヲ設ケ

或ハ官林監守ヲ爲ス等ノコトハ卽チ入會ニ屬スル者ナリ然ルニ本縣ハ只其所屬ヲ定メシ而已ニテ未ダ嘗テ入會ヲ處分セシコトナケレバ則チ毫モ原告浦ニ妨害ヲ與フル理ナシ原告ハ理論上ニ於テ妨害ヲ受ケザルモ理論外ニ於テ妨害ヲ受クル抔主張スト雖モ曾テ其緣由ヲ說明セザルヲ以テ之ヲ見レバ附會ノ說タルコト明ナリ是卽チ官林所屬ヲ處分セシ故ヲ以テ原告浦ニ妨害ヲ與ヘザル所以ナリ

第六條

明治七年初テ本縣ヘ出願ノ際上野浦ヨリハ海面ハ次第ニ串本浦ヨリ侵奪セラレタル旨申立串本浦ヨリハ舊時ヨリ灣洞ノ鼻迄所用シ來レリト申立シ迄ニテ共ニ其證左ヲ提供セシコトナシ故ニ本縣ハ漁業ノ現場ヲ實檢シ其境界ヲ鑑定セシニ其ノ當日串本浦民ハ兩藻伏島中心迄網ヲ張リ營業スルヲ以テ出張官員中屬岡本政良ハ串本浦副戶長ニ對シ日々營業ノ現場如此ナルヤ否反覆尋問セシニ右副戶長ニ於テ相違ナキ旨申立タリ故ニ其現場ノ區域ニ基キ兩藻伏島中心限リト明記セシ迄ニテ決テ舊區域ヲ更改セシニ非ラス然ルニ原告ハ目今ニ至リ頓ニ明治六年七月ノ地誌取調書ヲ證據ト爲シ海面ハ沖藻伏島迄自浦ノ所用場ナリト申立ルト雖モ該地誌取調書ハ其際正院ニ於テ地誌提要ニ編輯有之ニ付各縣ニ於テ從來管下ノ地理取調有之書類至急之ヲ進達スベキ旨達セラレタレドモ本縣ニハ右書類無之ニ付更ニ地誌取調ヲ要スル爲メ嚴急其下調ヲ各區長ニ命シ各區長ヨリハ遞次之ヲ各村副戶長ニ達シタリ當時ノ副戶長ハ其一村限リノ事務ヲ爲スモノニシテ區會議所ヘ出勤シ區長ト共ニ一區内ノ事務ヲ取リシニアラズ恰モ一村總代ノ委ナリ故ニ各村ニ於テ各自ノ意ニ任セ下調書ヲ區長ニ差出シ區長ハ一小區毎ニ之ヲ束ネ本廳ニ進達シタリ斯ク事急速ニ出ルヲ以テ本廳及區長ニ於テモ丁寧其下調書ヲ檢閱スルノ間暇ナキノミナラズ右編纂事務ハ稍學事ニ明ルキ者ヲ攜ヒ臨時之ヲ負擔セシメシ者ニテ地藉係官ヲシテ實際ノ地盤境界等緻密ニ調査セシメシモノニ無之又前顯述ル如ク各村各自ノ意ニ任セタルモノナレバ本縣ハ之ヲ毫モ謬誤ナキ者ト認可セシ儀ニアラズ然レバ原告ガ今之ヲ裁判上ノ證據ニ提供スルハ全ク地誌取調書ノ性質如何ヲ辨知セザル者ト云ベシ且第七號證別紙島嶼實測圖ニ記スル通藻伏島ノ如キハ其周圍僅ニ十數間ニ過ギザル一小浮礁ナレバ原告浦ノ下調書ニハ之ヲ書載シタリトスルモ現今其進達シタル本書ナケレバ確乎記載シタルヤ否ヲ知ルニ由ナク別冊地誌提要原稿ニハ之ヲ採錄セズ何トナレバ本國ノ西南半邊大洋ニ瀕スル荒磯ニハ斯ノ如キ最小ノ浮礁ハ無數散在スルヲ以テ之ヲ揭ゲルニ遑アラザレバナリ現ニ官林下ニ在ル西笠島及灣洞ノ鼻ノ直下ニ在ル高見島ノ如キハ其大サ藻伏島ニ數倍ス其他藻伏島ト相伯仲スルモノ少カラス然ルニ串本浦之ヲ書載セズシテ單ニ兩藻伏島ノミヲ記載セシハ甚ダ了解シ得ザル所ナリ上野浦ハ斯ノ如キ細少ノ浮礁ハ登錄ス可キモノニ非ズト思考セシヲ以テ先ニ差出シタル海面圖ニ示ス如ク同浦地先ニ在ル大床島横島二ノ島以下ノ諸島ヲ書セザ

ルナリ況ヤ藻伏島ノ如キ最少ナル者ハ素ヨリ書載ス可キ謂レナク到底地誌下調書ハ謬誤疎密ノ弊ヲ免レザル者ナレバ之ヲ以テ海面ハ沖藻伏島迄ヲ所用セシ證トナスベキ理ナク前條縷述スル處ノモノハ原告ノ申供ニ對シ一々之ヲ辯駁セシモノニシテ本縣ニ於テハ縣治條例ニ據リ處分セシ者ナレバ原告ニ妨害ヲ與ヘザル以上ハ如何ナル處分ナルモ原告ニ於テ決テ不服ヲ唱フベキ理由コレナキ旨申立タリ

引合人陳述之要領

第一條

屋那官林内吹上谷ヨリ東凡三町許ノ處ニ天正ノ頃當浦高松寺ト云ヘル寺コレアリ今尚其趾アリテ寺屋敷ト唱ヘ來ルニ付其頃迄ハ右官林ハ全ク當浦ノ所屬地ニ有之官林下ノ網代ニ於ケルモ當浦限リ漁業爲スベキ筈ナルニ串本浦ヨリハ漁業便利ニシテ漁業亦繁盛ヲ極メ當浦ハ斷岸多シテ便利アシク隨テ漁業亦微々タルヨリ該網代場ノ如キハ次第ニ掠奪セラレ遂ニ屋那山所有ヲ爭フニ至リ爭論久シク絶ヘザルニヨリ寶暦三年留山ノ下命アリシ以降兩浦立會ト相成リ其立會官林境界ハ東瀧谷ノ西尾通西大岩鼻迄ニ限リタルハ別冊手續書第三號附錄舊記第一卽大指出帳ニ長七町ト有之ヲ以テ明ナリ又兩浦立會來リシ事ハ同舊記第二及第三之通リ明了ナリ其右ニ類スル書類夥多コレアリト雖モ之ヲ贅セズ

第二條

官林西境大岩ノ尾ヨリ以西ノ海面ヘ串本浦ヨリ次第ニ侵入シ凡ソ六十年以前頃ニハ網葉引ト申ス處迄同浦ヨリ漁業致タリ右網葉引トハ兩浦互ニ漁業ヲ爭ヒ網葉ヲ引合フタルヨリ起因セシ唱ヘニシテ目今存在ノ當浦故老ノ者共能ク知ル處ナリ然ルニ右串本ハ漁業盛大ナルニヨリ其後追々西方ヘ侵入シ當浦ニ於テハ串本浦ニ比スレバ勢及ビ難キヲ以テ訴訟ヲ恐レ止ムヲ得ズ壓制ヲ受ケタル處明治六年十二月ニ至リスクミ山モ官林ノ部内ト主張シ網代ノ侵奪止マザルニヨリ和歌山縣ヘ出訴及ビタリ其ノ出訴ノ際タルヤ岡藻伏島迄串本ヨリ漁業セシモノニシテ決テ沖藻伏島迄漁業セシモノニ無之既ニ十餘年前串本浦ヨリ妄ニ沖藻伏島ヘ網ヲ張リ小艇ヲ漁リタルニヨリ當浦ヨリ串本浦田島嘉四郎ト云ヘル者ヘ談判ノ上獵魚幾分ヲ取揚ゲタル等ノ儀コレアリ由是是觀之モ決テ沖藻伏島迄ヲ所用セシモノニ非ザルナリ

第三條

串本浦ニ於テハ古來魚見場設置アルヲ以テ官林ハ自浦ノ所屬ナリト申立ルト雖モ該魚見場ナルモノハ家屋ヲ設ケタルモノニ無之只自儘ニ立入リ魚ノ集ルヲ見張リタルモノニシテ近隣ナル大島樫野須江等其他漁業ノ便宜ニ依リ他村ニ立入リ魚見セシ所夥多コレアリ當浦ニ於テモ魚類蒐集ノ都合ニ依リ出雲領内ヘ至リ魚見セシ事ハ屢有之總テ當方地方ニハ決テ魚見場ヲ設クルニ兩村應對ノ上ニ取極メタル事ハコレナク只自儘ニ魚見ヲ爲スノ習慣ナレバ該魚見場アルヲ以テ其地ノ所屬ヲ證スルニ足ラザルナリ

第四條

明治七年四月和歌山縣ヘ出訴ノ際ハ串本浦ヨリアンドウノ鼻トハ高見島ノ地方ノ鼻ナリト申立置キ今又實地測量ニ臨ミ四ノ方當浦領菖蒲ケ谷ノ分ナル小鼻ヲアンドウノ鼻ト申立ルハ了解致シガタク當浦ニテハ舊來東ノ鼻卽チ實地測量ノ際申立タル處ヲアンドウノ鼻ト始終申立置タリ然ルニ串本浦ヨリハ明治六年七月地誌取調書ヲ證據ト爲シ沖藻伏島迄自浦之漁場ナリト申立ルト雖モ地誌取調ノ際當浦ニ於テハ藻伏島ノ如キ最小ナルモノハ夥多アルヲ以テ一々之ヲ記載セズ況ヤ藻伏島ノ唱ヘハ串本浦ニテ名ケシモノニシテ當浦ニテハ高見島ノ小兒ト唱ヘ來リ敢テ漁業場境界ノ標準トセシモノニハ非ザルナリ

判　決

（判決の全文は第一編第二章第二節に採錄、就て參照せられたい。）

（其一五）　串本町蔵

◎表紙「串本村事務引繼目錄」（一部拔抄）

土地段別

田　十町二段五畝十七歩

畑　三十二町五段九畝一歩

郡村宅地　十八町九段三畝二十五歩

山林　三十一町八段八畝七歩

原野　二町三段三畝四歩

溜池　二畝歩

墓地　五段三畝四歩

人口戸數

戸數　五百十六戸　人口　二千七百四十五人

（後略）

右之通及御引繼候也

明治二十二年七月九日

元串本村外五ヶ村

戸長　岡本米治

串本村

村長　神田清右衛門殿

添附別冊　元串本浦外五ヶ村戸長ヨリ

主擔村長ヱ引繼目錄　謄寫書畧

（其一六）　以下全部卷末まで　矢倉甚兵衛氏藏

編者曰＝此の肥事は、昔の藩主が其領内を御巡視になつた時如何なる有樣であつたかを偲ばん爲め特に附錄としたので、原文は今尚矢倉甚兵衛氏が所藏してゐるのである。

愛にいふ殿樣とは紀伊德川家第十世の主治寶公の事である。治寶公は第八世重倫公の第二子で幼名を岩千代といつた。明和八年六月十八日の出生で、嘉永六年正月

八日に薨じ、舜蔭公と諡した。第九世治貞公が養つて嗣とし、寛政元年治貞公が薨じて代り立つた時は四十九歳であつた。公が封を襲つて以來、鋭意財界の改革整理を試み各種の事業を經營し、產業を督勵し水利を開き廢田を起し墾田をなすなど其事蹟が頗る多かつたのである。

寛政六年寅八月より十一月迄

殿樣被爲成候に付御用廻文控

當秋品に寄熊野御參詣可被　遊との御事に付御道筋先年御宿御休所に相成候家當時も御用に相立哉之儀且在中作方之模樣承合候樣被成候ても在中格別差支は無之模樣に可有之哉時節柄等の品承合候樣内々にて御勘定奉行衆ゟ申聞候品に付中邊路通りは此度岡孫太夫方承右に參り候由夫に付浦方筋の儀右等の品に付當秋被爲成候ても御差支に相成候儀は有之間敷哉在中時節柄模樣承り合候樣に申參候事に付聞右之趣各組下夫々取調べ何等御差支に相成候儀は無之哉否被相調候上書附を以急々可相達候尤差急ぎ候筋に候間急々被取調書附可被相達候依て申遣候　以上

富田元右衛門

各組大庄屋宛

尙々急々二ツ印を以て順達被致點濟より戻し可被申候

本文差支の品ゟ樣〳〵の品にて差支候との儀被相調書附持參來る十四日四ツ時分迄各自身罷出可被申候右は面談に可申入

御用の品も有之候に付彌十四日無相違自身罷出可被申候其節差支等申立代り拵差越候ては御用其指支可申候尤組中一等右樣日限相揃候上可申談筈に候間右日限各申合同道にて可被罷出候依之分けて申遣候　以上

八月十二日

江田より上野迄

浦儀左衛門

右浦村庄屋中

尙々本文之通無相違自身右日限に罷出可被申候

殿樣當冬の内熊野へ被爲成候旨仰來候尤御日限は相知不申候得共爲心得相通し申候且又在々にて草履草鞋等用意致置可被申候　以上

九月二十七日辰刻

江田より上野迄

浦儀左衛門

右村々庄屋中

當冬の内熊野邊へ御成之儀被　仰候事に付夫に付享保の御例も有之候得共右御例に不抱御供連其外諸事手輕御格外に被仰候との趣猶又右に付在中にて不敬之儀無之勿論諸役人ゟ對し無禮がましき儀等無之樣にとの趣夫々別紙兩通之通被仰出候旨申來候而別紙兩通之御趣村役人並小前末々迄不洩樣相通置可被申候

右被仰出候通殿樣熊野邊へ被爲成候に付井田幸次郎方今二十六日若山出立被相越候との趣是又別紙之通御勘定奉行衆より申來候付右書面別紙寫一通差遣候間右書面之趣を以右御用先々ゟ各御出張諸事手拔無之樣萬端宜敷可被申候右之趣不時傳馬繼を以て申來候付早々申遣候　以上

九月二十六日

富田元右衛門

大庄屋宛

當冬の内熊野邊へ御成之儀被　仰出候事夫に付享保の御例も有之事に候得共御供人數多被　召連候ては在中可爲難儀との御趣意にて右御例に不抱御格外之御手輕にて被爲成候御禮り尤邊鄙之儀に候得ば御宿御休み所々にて不都合のみにて可有之候得共御不自由之儀は如何躰にも御用捨被遊候思召に候就ては御供之面々も右之御趣意相心得家來等人少に召連下宿等見苦敷不自由成儀は萬事致用捨家來末々迄心得違無之樣可被申付候

御宿御休み所々且道路橋掃除等取繕の儀大造に相成候ては御趣意に不相叶候間危き場所は丈夫に致諸事無造作に相濟候儀心懸可取計旨被仰出候

右之趣御供之面々其外御用掛り役儀並心得可然向々ゟ不洩樣可被相通候此段熊野ゟ御成之儀に付別紙之通故格別之御用捨にて御手輕に被　仰出候事に候得共稱成御成故邊鄙之儀自然と大造に可相成哉に付右被　仰出候趣村役人共末々迄不洩樣入念申開下宿等相勤候者何等難相調品も有之候はゞ無遠慮役人共ゟ申出差圖を受取計候樣可致段も申聞尤右之通段々厚御用捨之思召に付ては末々の者若心得違不敬之儀候ては不相濟儀に候間猶更相愼御供中末々迄無禮ゝ間敷儀無之樣得と可申付段御道筋郡奉行ゟ可相通事

殿樣熊野邊へ被爲成候付御宿御休御小休御道橋等爲見分御用人井田幸次郎方被相越候來る二十六日若山出立之筈尤其節在方役所より也役人差遣候筈に候間往還筋役人共其組々大庄屋共諸事差圖を受猶存寄の儀は無遠慮に申出候樣可申付候以上

九月二十二日

丹羽傳四郎

尙々通行左之通に候

田邊より湯崎田邊へ戻り夫より中邊路通り本宮乘船新宮

同所より長島迄同所より新宮ゟ戻り夫より那智山太地へ

廻り周參見迄同所より田湯通り被歸筈

大庄屋許より

御成に付　組中ゟ心得

一御宿　太地　一御小休　庄村

一御休　浦神　一御小休　下田原

一御宿　古座　一御小休　串本

一御休　上野　一御小休　有田

一御宿　田並　一御小休　和深

一御休　江住　一御小休　和深川
一御宿　周參見

右御宿御休御小休の所々家々屋根漏等不致樣
一御成に付ては猶更火之元用心第一之事
一御成に付若心得違在申にて不敬之儀無之樣
一御成に付村役人並人足共不禮等無之樣
一此節より御成後迄在申にて彼是心得違評議等不仕筈
一人足はちまきほうかぶりは勿論草履等はき出し候儀堅不相成候
一御成之節家々にて煙等揚げ不申樣
一御成の節村役人並人足共高聲に呼はり申間敷候
一御成之節御通り筋より隔候共鐵砲拵等其外物音不致筈
一御成之節在申隨分靜に致居可申筈
一御成之節村役人並人足共立ばたかり居候儀不致樣
一手拭等肩にかけ不申樣短く折り腰に付可申候
一御成之節入津浦々之儀は船手へも諸事穩便に致候樣心得させ可申候
一胡亂がましき者在内並村端にも差置候事不相成候
一在々夜具蒲團並枕等相調へ員數之儀は書附を以て可申出候
若心得違にて用立候筋一ト通りにても隱置不申樣入念相調べ可申候
一枕屏用立候筋相調べ員數書附差出可申候是又用立候筋心得違隱置不申樣

一明松提燈火鉢燭臺炭油大豆味噌醬油酢肴類海老鰒鮑細魚鯨經節鹽其外何品にても用意
右は御宿所御休所にて用意致置候樣
一盥手水盥手桶杓居風呂是は新に四ッ五ッ拵候樣
一野菜蓮竹繩俵
右御宿所御休所に用意致置く樣
一村々より帳書代に出候者相調べ名前書附出候樣
一在々より宰領人に出候者右同斷

御道割

（郷土誌編者曰、海士郡より田邊に至り中邊路を經現今の三重縣長島迄の道割御歸途田邊以西の分は略す）

御宿　御休　御小休
新宮より　宇久井　三輪崎　濱之宮　妙法山
那智山　〃五里　天滿　二河御乘船
太地　〃三里程　浦神　庄村　下田原
古座　〃四里程

先年池之口まで被爲成有之候得共何等御覽所も無之場所に付直に串本に被爲成候樣

串本　潮御崎
田並浦　有田　〃五里餘
江住　和深
周參見　〃五里半餘
富田之内　安居村
高瀨　富田原之内
田邊　〃七里半
（以下略）

別紙之通申來候付各爲心得寫一通差遣候早々順達可有之候、以上
十月二日　浦儀左衛門
江田より上野迄
右村々庄屋中

此度熊野へ御用人井田幸次郎方被參候に付附添罷越候節別紙の通り爲心得申遣候　以上
九月二十七日　梶間吾平
近藤伊太夫
熊澤文兵衛
海士　有田　日高　田邊　日熊野　新宮　奥熊野
御用人　井田幸次郎

奥の番　尾崎五左衛門
御用部屋吟味役　村辻千右衛門
評定所書役　平岩幸左衛門
御勘定奉行組　松山六太夫
郷役御書請組　田中文内
同　湯川甚右衛門
御作事見分役　小濵十兵衛
郷役竿持一人
大工棟梁一人
右之通り
十月三日來る

一夜着、蒲團、枕、膳椀、帳書代に罷出候者名前
一宰領に罷出候者名前
右者先達て相通じ有之候へ共早々相調べ書附差出可申候御用差支に不相成樣取計可被申候
一村役人並宰領人足共亂髮長髮にて罷出候儀不相成候段得と申通し置可有之候依て申遣候　已上
十月三日　浦儀衛左門
江田より上野迄
右浦村庄屋中
尚々無滯早々順達可有之候

道橋繕之儀此節より取懸り可被申候尤繕之儀此比も申通し候
通り随分入念道巾廣又は舊所々より土俵等も築き不申候ては
難成所は土俵も築候樣尤人足計にては繕方諸事行屆不申候間
頭立等罷出夫々差圖致し繕致させ候樣取計可申候
右之段大體各々にも承知の儀に付分て不申遣候共手拔無之樣
可被申候明て申遣候

十月四日戌刻　　大庄屋許二ッ印

江田浦より上野迄
右浦村庄屋中

尙々（略す）

此度の御用に付左之品々相調へ員數書附明後十六日迄に差出
可被申候依て二ッ印を以て申遣候　以上

十月四日戌刻

江田より上野迄
右村々庄屋中

一茶漬茶碗　一茶碗　一皿　一猪口
一料理等心得候者名前書出し可申候
右之通り取調候樣尤通し落候物は跡より可申遣候

在々御用狀持送之儀夜中往還明松にて往來不相成候提燈にて
持運候樣取計可有之候此段入念申通可有之候
一浦々船之儀は兼て心掛用意致置御用筋差支不申樣取計可被

申候明て申遣候　以上

十月五日　　大庄屋許

江田より上野迄
右村々庄屋中

尙々（略す）

先達て段々相通じ候諸入用物調べ書未差出不申員數相知れ不
申甚だ差支申候右は不足の物は外組にて取合可申事に候へば
當組在々相調へ不申候はでは諸事相濟不申候間相通じ候通此
狀着次第明日中書付差出可被申候明て二ッ印を以て又々申遣
候以　上

十月六日卯刻　　大庄屋許

江田田亞有田二色園野川
串本出雲上野迄
右村々庄屋中

馬の寄三十二其浦にて用意致候樣追て入用の節可申遣差支不
申樣取計可有之候明て申遣候　以上

浦儀左衛門

政次郎殿

覺

一夜着　二十枚　一蒲團　百三十枚　一朱椀　六十人前
一膳　六十人前　一茶漬茶椀七十人前　一皿　八十人前
一茶椀　百

右之通夫々相調へ御座候御用之節は何時にても差出可申候
以　上

寅十月七日　　串本浦　政次郎

浦儀左衛門殿

井田幸次郎樣奥熊野より御願途被成來る十月十一日頃當組迄
御移り被成候御樣樣に候間右日樣を以て御道橋繕等仕立候樣
取計可有之候明て申通候　以上

十月六日午刻　　浦儀左衛門

江田より上野迄
右村々庄屋中

二色村道橋大造に付所人足計にては此節急々出來不申其浦よ
り左之通明早朝人足差出可被申候尤鍬なた其他諸道具持參書
食の儀も銘々持參罷出候樣是又申付取計可有之候明て申遣
候　以上

浦儀左衛門

政次郎殿

一人足　二十五人
右之通二部村に遣候樣

先達て申通候諸色調べ書付被指出請取申候然處夜着之儀其村
々に應じ出方少々無少樣相聞へ候右は洗濯等致可成とも間に
合候筋猶調べ差出有之候且又帳書代に出候者亜に人足宿領料
理方心得候者共等相調べ否早々書付差出可被申候右は差急ぎ
候事に付早々

十月七日　　大庄屋許

一串本より橋杭へ諸役人荷物持送り駄賃錢何程
一同所より上野への諸役人荷物駄賃錢何程
一同所より二色へ諸役人荷物駄賃錢何程との儀右村々之諸役
人荷物持送り駄賃錢何程との儀夫々能相分候樣此狀着次第
明早朝右書付相認差出し可被申候依て申遣候　以上

十月七日　　大庄屋許

政次郎殿

尙々明早朝上野浦より印形持參候者此方へ可參筈に候間其
節本文各も一所に差越候樣申合せ可有之候猶又別紙上野へ
申遣候儀候間急々可被相達候

其浦村道橋繕の儀先達てより委細分けて申通有之候通り各々
亜組頭夫々付添差圖致随分入念手拔等無之樣取計最早出來候
儀と存候若し又出來兼候村々も有之候はゞ急々出來候樣取
計可被申候尤も危き場所は随分丈夫に仕立可申筈第一の事に
候何分出精急々取計可候此間相通候御用人衆其外役人中近日

の内御通り可被遊候筈に候間其節迄に前段道橋繕方出來可申筈に有之候猶又右代役人衆中御越の節村々役人は勿論出人足共は無禮ヶ間敷儀無之樣申聞置諸事御差支無之樣取計可被申候尤村役人は村境迄出迎可申筈此段も各々爲心得前廣より申通候

十月七日　　大庄屋　幷

江田より上野迄

右浦村庄屋中

本文回狀二部二色闖野川右三ヶ村へ順に相通候筈周叟見表御用筋漸々昨晝頃迄に相濟候付拙者儀今八ツ時歸役致夫々付先遠面談にも申入候夜着亜浦團の儀其浦々に應じ出方甚だ少右は各々へ面談の上申入候儀に付不調筈は無答處如何相心得候哉此の度の御入用の儀は各出精なを以て諸事御差支に不相成樣存度候處右等不調べの儀は甚心得違候樣相聞へ候尤も其浦々夜具蒲團一と通りも不出候ても隨分此節御間には合せ可申候へ共左候ては各冥加の程も不奉恐樣に相聞へ候に付又々申遣候一と通り相調可被申候尤も右不調べに付ては拙者早速其浦へ入込相調可申と存候へ共此節御用筋甚だ繁く且下邊よりは御用人衆其外役人衆中近々當組へ御移りに付猶以て御用筋調方多候故早速不罷越答等聞成取計不致樣勘弊を以御差支に不相成樣□□□取計可被申候

一出雲浦へ申遣候夜具六つとの書附出し有之候其浦頭立之内右六つ位は所持致居候者も有之樣に拙者は相心得居候右六つ出し候人名前書附可被差出候若し村内より手賃等に差入候者も有之候はゞ其段悉く誰より誰に差入候とのの儀可申越候

一上野浦へ申遣候其の浦の儀も出雲浦同樣に拙者は相心得居候外村々へ對し候ても甚だ聞へも惡敷候猶入念相調べ可被申候

一出雲浦の儀先年被爲成候節御救金等も頂戴仕り有之村方の儀に候へば猶更諸事此方より不申遣共御用立可申筋は別て出精可被申筈に存候

一夜具の儀他組へも申遣候へば隨分相調可申候へ共左候ては此邊より四番組邊遠方持送り候ては損じ等多く候付右體組内にて相調べ候へば晴天なぎまわりに御宿所迄前廣より積廻し置候へば損じ不申猶又慥成夜具方寄領入申付候儀に付隨分所持の者共の爲にも相成可申間能勘弊を以て得と相調べ可被申候依て右申遣候　以上

十月九日　　浦　儀左衛門

有田串本出雲上野迄

右浦々庄屋中

一二部二色闖野川右三ヶ村未何等不申出候如何相心得取計候哉此方相調べ方甚だ差支候早々相調書可被差出候

一枕の儀本文在々出方是又無少差支候間猶得と相調べ可被申候是又本文申入候通り一組切に諸事相濟候積りに取計申度候へば能く相調可被申出候　以上

御別紙の通り仰來に付右寫し差遣候右は先年御目見仕候由緒も有之候筋は其の品早々書附可被相遣候明て御別紙寫し差遣候　以上

十月九日　　浦　儀左衛門

田亜有田二部二色闖野川

串本出雲上野迄

右村々庄屋中

一有田へ申遣候深美氏へは別段に此方より相通じ不申候間其元より御別紙の通り可被申入候且又其村庄屋の儀當時相續致候者も相見へ不申如何候哉是又早々可被申出候

一二部村勘助跡由緒等も無之候哉早々其品可被申出候

一上野へ申遣候遠見御番所御別紙之趣其許より可被申入候當冬熊野へ被爲成候に付御道筋御目見爲致候者之儀別紙の通りを以て急々書付取相遣し可被申候尤も御道筋近邊に罷居候地士六十人其外由緒有之者相遣し可被申候遠在に罷出候者は不罷出候ても不苦候

九月二十九日　　丹羽傳四郎

當冬熊野へ被爲成候節御目見爲致候品

一地士六十人は大庄屋遠見番御目見爲致候筈

但有子供刀差候者は親同斷刀差不申子供にても親の筋目に寄り御目見相濟候筈

一諸手代亜庄屋□□突平山廻り平百姓迄も由緒有之者は御願申上吟味を以て御目見相濟候筈

一御道筋御宿所御休家主は品無之筋目にても御目通り被致候筈

右之通り

一昨九日相通じ候通り先年御目見仕由緒等も有之候筋は悉く由緒書相認來る十三日迄に可被差出候右延引候ては差支可申候間前段由緒等も有之候者も候はゞ急度相調書付可被差出候明て申遣候　以上

浦　儀左衛門

其浦村道橋掃除繕ひ候付ては右道橋端之田畑へ歪木等入れ候ては如何敷御目障り候相成可申候且近日の内御用人衆中御越可被遊筈に候間右等の筋有之候はゞ急々取除させ可被申候御大切成田畑へ右等入込有之候ては甚だ如何敷事に候急々取計可被申候明て申遣候　以上

十月十一日　　浦　儀左衛門

江田より上野迄

右浦村庄屋中

御別紙之通仰來候に付右寫眞差遣候間跡々御目見罷出候寺社の分御別紙之趣を以可被取計候明て右寫し差遣候　以上

十月十三日　　浦儀左衛門

田並串本有田上野迄
右浦々庄屋中

串本木之宮水崎明神之儀は随分掃除等致置候樣取計置可被申候其外御道筋に有之候小社に至る迄何れも掃除致置候樣此段爲心得申入候

當冬熊野へ被爲成候に付御參詣御立寄のヶ所並寺社の外御目見への品に付別紙の通寺社奉行申より申來候付右兩通差遣候各組下寺社方へ相通可被申候依之申遣候　以上

十月十一日　　池内柳左衛門

殿樣當冬の内熊野邊へ被爲成候筈に付御參詣御立寄のヶ所並御目見の品別紙一通差越候間跡々御目見へ罷出候寺社の分右寺社號を手札相認御供の内へ差出候上御目見に罷出候樣各御支配下の内寺社方へ御通可有之候

尙々
御目見に罷在相濟候筋は追て夫々掛者方へ書付差出候樣通可有之候　以上

當冬の内熊野邊へ被爲成候筈に付三山社家惣領子並社家之筋は御目通りへ罷出候筈に候
御代々御目見仕來候御道筋の出家滅罪の寺は御往の節は不罷出歸御の節御目通に罷出候筈
滅罪取計新禱寺の出家は御往の節御目通へ罷出候筈

一御參詣　御立寄の箇所

藤代權現　　藤代峯寺地藏堂
窟觀音　　鹽谷王子
切目王子　　田邊鷄合權現
御社參　　御社參
本宮權現　　那智山權現
御立寄　　御立寄
湯峯王子　　那智山觀音堂
湯峯藥師　　瀧本千手堂
御社參　　瀧禪定
新宮權現　　瀧禪定被遊夫より
御歸り夫より妙法山
御立寄
神倉社　　御登り被遊
飛鳥社　　飛鳥三狐神
徐福社　　弘法大師堂
蓬萊山社　　鋼山に御下り
右樂なも御覽被遊候
濱の王子　　御立寄
達田社　　串本木之宮
花之窟

御崎明神
千里王子
岩代王子
宮原八幡

右之通

一人足　二十二人
右は井田幸次郎樣並其外御役人衆中明十七日明六つ時古座浦御出立先觸の通御越被成候間村々人足用意可有之候尤村役人中村境迄迎送り候樣明て二ツ印を以申遣候
十月十七日亥下刻

一明十七日御晝ぜんし茶用意　　中西理左衛門
一同日御泊　　上野浦
　但御宿五軒　　田並浦
尙々各村境迄無間違御迎へ可有之候

井田幸次郎樣其外御役人衆中今六ツ時古座浦御出立被遊候筈に候御晝食の儀は上野浦にて御休可被成筈に候間其旨相心得同所にて煎茶用意可有之候明て申遣候　以上

浦儀左衛門

串本浦庄屋
政次郎殿
上野浦庄屋代

林右衛門殿

尙々人足の儀は御先觸出候に付各承知の儀と存じ候御先觸の通り人足用意相待可被申候

人足　二百五十三人　　御道造り人足
此寄領人　八人　　彌平次　藤七
用助　舞藏
伴次郎　儀平次
平六　彌六
一人足　二十人
此寄領人一人
是は二部村御道造り人足
一船　三十八艘　　安之丞
此加子百九十人
市左衛門　儀平治
又平　利右衛門
與三兵衛　甚兵衛
舞藏　宗兵衛
藤七　喜平次
藏助　甚之丞

右袋港御渡邊の節
一御召船御船頭一人　　幸右衛門
一人足　百九十八人　　田並浦詰
一人足　二十五人
御小休所掃除人足御跡方付人足共
人足　七百二十三人

船　三十八艘
宰領　三十三人
御船頭　一人
此内百九十八人是は周參見迄送り人足戻り増
外に　宰領十人
合人足　九百三十一人
宰領　四十三人
一夜着蒲團合二百三十四枚
右之通相調書付差上申候　以上
寅閏十一月　串木浦庄屋　政次郎
浦儀左衛門殿

寛政六年寅閏十一月朔日古座浦御止宿御踏通り御駕にて當浦御小休所甚兵衛へ御着座夫より當社本之宮御參詣被爲遊神戸右近亜悧惣領求馬御目見仕候御賽錢青ざし壹貫文御そなへ被爲遊御參社相濟候て御機嫌好御崎明神へ御駕にて御參詣夫より御歸當浦西手御通り被爲遊袋港へ御渡海にて二色袋森庄左衛門御小休夫より有田浦深美嘉左衛門御小休所へ御着座被爲遊夫より田亜浦御本陣田中萬蔵家へ益々御機嫌好く御着座被爲遊候
此宰領人　十二人　嘉七　和平次　長五郎　安之丞　平次郎　善治　利左衛門　牛蔵　五平　儀兵衛　宗兵衛　利右衛門
一料理人　十三人　佐八　宇平　市五郎　平兵衛　利平次　文平　嘉四郎　喜三郎　彌七　龜之丈　金右衛門　安次郎　宇平次
右田亜浦へ參る
一人足　十七人　是は田亜浦へ御肴持送り人足
一焚出し人足亜御小休所小遣共
　　彦七　忠蔵　金右衛門
　　彌吉　幸吉　勢七
　　〃　六人
一人足　十五人　是は櫓杭へ御道造り人足
此の宰領人　二人　藤七　嘉平次

寛政六年寅閏十一月二日當浦御送り被爲遊候袋港御渡船數百四十艘
船印淺黄無地之由に候得共是は番船の節の由袋港の儀は横渡の御機りにて番船印は無之候御召船御印赤地御紋付御立被遊候右船數見老津より浦々十一ヶ浦より相詰申候

御宿所御休所御小休に相極り候家々若忌服等有之候はゞ其段早々可申出候依て申遣候　以上
浦儀左衛門
田亜浦庄屋　九平次殿
二色村庄屋　勢左衛門殿
串木浦庄屋　政次郎殿
上野浦肝煎　林右衛門殿

當冬被爲成候に付御別紙の通り御來候付寫し三通差遣候御書面の趣相心得可被申候明て申遣候　以上
十月二十一日　浦儀左衛門
江田田亜田亜上吐生有田二部
二色閏野川串木出雲上野迄

右村々庄屋中
御成に付廻狀寫し兩通差遣候各組下浦村役人共へ不洩樣相通し可被申候
一各組地士其外共御目見へ罷出候者先年御成の節いづれいづれにて御目見致候哉此度も先年の場所にて御目見致候儀に候哉右場所早々可被申越候
一此度御成に付御目見に罷出候面々一統袴に羽織の筈に候各より被可申合候依て申遣候　以上
十月十九日　池内柳左衛門
原浦　中西小山宛

一此度熊野へ被爲成候に付御道筋大庄屋御案内の儀別紙の通に候間夫々相通可被申候　以上
十月　宇佐美長右衛門
海士　有田　日高　兩熊野
郡奉行御代官宛

御道筋御案内の儀大庄屋一人小庄屋一人御先を引候筈尤大庄屋は組境にて代り合小庄屋は一村切にて代り合候筈且御道筋にて御尋の儀有之候へば差圖の面々へ大庄屋共より御答致候筈但大庄屋小庄屋勤若夫々御案内等難出來筋は何れにても其他御案内の者大庄屋は地士の中小庄屋は村役人頭百姓の内名代相勤させ候筈
右之通り
熊野へ被爲成候に付蝋燭の儀御本陣御用筋は大體此表より用意爲致候事に候へ共諸役人にて御用筋其外御供中入用の筋不殘用意致ては夥敷數にも及且人足の費も有之事に候間多寄々々蝋燭屋共へ被申付御宿所にて爲賣候樣尤も御用向は在方出張所より切手を以請取右代銀夫々御代官所にて被相渡候樣其外御供中入用の筋直段の通當銀にて代物引替に相渡候筈右は

在中失脚に不相成樣且又商の爲にも宜敷樣旁右の通爲取計候事に候間不相紛樣可被申付候併萬一差支の所も有之候はゞ早々可被申遣候　以上

十　月　　宇佐美長左衛門

有田　日高　兩熊野

郡奉行御代官宛

尙々木文蠟燭の儀十五匁掛少々太くは二十匁掛入用に候其段御心得の事

熊野御道筋難所並道幅狹有之候ても諸人往來仕候分は其通りにて差置候筈尤道橋損じ危き所には吟味の上繕候事

一所々御小休所並御供中湯呑所用意候事

一所々涌湯へは御入不被遊筈

但汲湯には御樣子次第可被爲入事

一御宿御休御本陣の儀は三山御參詣に付寺々は御宿に不罷成事

一御泊の家數不足の所は近在へ宿割致候事

一御泊の村々枕夜具並臥具不自由成所は近在より集差支不申樣用意の事

一御發駕の節御道筋常に替り格別に掃除致候には不及常々出御被遊候節の通在々へ相心得させ候樣尤も道橋不淨抔有之所には何にても覆致候樣且又道筋木柴落有之らば不苦程の儀に候

一御本陣御休所御小休所亭主より差上物には不及候筈

一當冬被爲成に付其浦村人足相調べ書付可被差出候尤も小供にては間に合不及儀に候間十七八より六十際迄の内相調急々可被申出候明て申遣候　以上

十月廿三日　　浦　儀　左　衛　門

江田より上野迄

右浦村庄屋中

御道筋近所に有之候墓所御目障りに不相成樣柴等伐りかけ又は垣等にて隱し置候樣尤御道筋遠候ても御目障りに相成候ては右之通り取計可被申候右は先途て申入各承知の事に候へば失念も有之候ては難相濟に付爲念申入候各見物致候ては御目障に相成不申樣取計可被申候　以上

十月二十九日　　浦　儀　左　衛　門

江田より上野迄

右村々庄屋中

一御三ツ道具（琉球包）　一　組

外に書狀一通　潮崎利右衛門方へ

右は御大切成御道具に候間村々にて傷不申樣人足の者共へ得と申附無滯上野浦迄持屆可被申候　以上

十月晦日　　浦　儀　左　衛　門

江田より上野迄

右村々庄屋中

其浦々にて左の通干物相調候樣取計可被申候御本陣御料理御入用是非無之候ては難相濟儀に候間兩浦申合せ相調可被申候尤被爲成候御儀近々との御儀

十月晦日

一小鯵　鯖　鯊の内干物六百程隨分入念宜敷子立候樣右之通り

其浦紺屋へ別紙の通早々染させ候樣御賴入候

右は此度袋港御乘船幕入用に付甚差急候間毛綿は宜敷筋二段取寄練所へ入念紺屋へ染させ候樣賴入候

一染色　檳榔子　隨分黑く手抔へ付き不申樣

右之通早々御世話被降候　以上

先途て相通じ有之候提燈未不申出來差支候其村々有丈ヶ相調べ何程との儀員數急々此方へ可被申出候右は追て有田田並兩浦の内持屆可申筈に候間相調べ集置申遣候節無間違可被差出候

一蠟燭の儀も先途て申通有之候間用意致有之筋は何程との儀員數是又一所に可被申出候明て申遣候　以上

十一月二日　　浦　儀　左　衛　門

江田より上野迄

右村々庄屋中

此度熊野へ被爲成候付て仰出の品別紙一通差越候間右帳面の趣村役人其外へも可被相通候尤若山より不時傳馬繼なり以申參候間早々順途可有之候明て如此候　以上

十月廿九日　　池　内　柳左衛門

四組大庄屋宛

一此度御成に付在中失却等無之樣段々御世話被爲遊候付相通候所如何相紛候や御成御用宛と號し雜澁の村々へも用意銀等申付候哉の趣風聞有之候右は段々相通じ候品も有之候へ共大體取計は堅相成不申品に候條其後急度可被申付置候其上若相紛右體之儀於有之は急度可及取扱候間此段大庄屋共へ申付村々へも入念相通じ候樣取計可被申候

十月九日

兩熊野郡奉行御代官宛

一此度御成に付在中諸失却無之樣上にも格別御苦勞被爲遊候趣先途てより段々相通候通りにて候夫に付御供中へも別紙の通り仰出の事に候へば在中の儀彌以御成に付不時失却無之樣一々心を付御當日は勿論御當日前後共人足遣方等別て入念其外事々敷寄合致飲食の費は勿論何事に不依諸失却無之樣大庄屋より取鎭不申候ては事馴不申所の儀に付一體騷立不思議も有之候間其段大庄屋共別て相心得追て迷ひ銀等雜澁の村々へ不相立樣得と勘辨第一に可仕事

一旅籠代其外定も追々相通候事に候是又在中失却不相成樣格

別の取計を以て相極候事に候間心得違聴走ヶ間敷品等は曾て致間敷候若し相紛候品等は組割に相定候儀堅不相成事

一幣請其外取繕等段々相通候通役人差圖の通り相守可申候右差圖の分は追て代銀下ヶ渡候筈差圖の外自分心得を以取繕等致候儀は其通りに候へば組下へ割賦の儀は不相成事

一所々寄道橋其他作事等爲冥加仕度抔と願出候儀も有之見分先にて承屈させ願の通取計せ有之事に候右は勝手と相應に致候者共冥加を存右の通願出候儀は神妙の至り付任願申付候事に候若し相紛雖濫の村々へも押て申付候か又は小百姓末々は不存事にて大庄屋村役人共自分の働に致道て組割小入用等へ相立儀抔有之候ては甚だ以如何の品に候條是又不相紛早々可被申付候

一御成相濟候後役人差遣夫々相調させ候筈に候其節に至り若相紛候品有之候へば急度申付にて可有之候間此段兼て可被申付置候　以上

十月廿一日　　高木兵右衛門

兩熊野郡奉行
御代官宛

一此度熊野へ被爲成候節御本陣御休御小休所亭主より差上物には不及候に付先達て相通じ候事に候其外御道筋にて地士等献上物同樣不致筈に候間此段相通可被申事

一此度御供中御泊所並に御書所にて金銀を以錢調申にて可有之候所に寄錢屋無之候ては差支可申所は錢賣所を搆其場所に賣渡候樣可被申付候右錢賣所にて用意錢調貸の儀は勿寄御仕入方二部口役所より當分取替候はゞに候間此段可被申付候

十月二十三日　　高木兵右衛門

兩熊野郡奉行
御代官宛

一御本陣御宿所入用の膳椀三十人前用意致居候樣尤も麁相成筋にても宜敷候間取合有數程擬置候樣下々の分は御宿所にても箱舞當木具汁枕も外丸盆折敷此の表より相廻し候に付用意に不及

一御書所舞當箱丸盆折敷等此の表より相廻候付不及用意

一随分麁相成木箸二百人前

御宿所　御書共用意候筈

一夜具の儀人數不相定候へば用意致候數雖相分候へば大凡五百人程の積り被集候樣尤も内分ヶ左の通り

御本陣　上　三四十人前程
　　下　八九十人前程

右上の分は夜着にても蒲團にても一人前□ッ宛の積り下の分は麁相成蒲團二人前に一ッ宛□□□不自由の所は三人前一ッ宛にても不苦事

一御旅宿にても上分下分共右に準し相心得候樣右之通候へ共持合有之候所は寒氣の時分に候へば可成丈ヶは用意致候樣都て萬端御減少被仰出候付ては下々心得置の程雖計候間諸事相慎不敬無之樣入念可被相通候　以上

十　月

一此度熊野へ被爲成に付御發駕一兩日前後共に御用の荷物並に御供中共に幾日に人足何程入用當日何程との積り先達て可申觸候其邊相心得可申事

一人馬繼所の儀は御宿所より御休村迄持屆御休村より御宿村迄相屆候樣可仕事

但所に寄人足拂底故御宿村より御宿村迄一繼に相成候樣願出候處は一繼に取計せ候筈

一馬附の荷物貫目一駄分二十四貫目の筈
但馬足新相立所には人足四人持に候筈
此外餘目人足懸ヶ申間敷候

一歩行荷物一駄一人六貫目の筈

一貫目十二貫目は二人持十八貫目は三人懸り夫より六貫目増にて人足一人づゝ懸増申べく候

右極り人足の外餘目人足は懸申間敷候

一乘物舁人足四人積り右之趣を以若山より持出附出し相改人馬員數極め罷越候積に候へば御道中筋にて滞は無之筈に候

一寄人足の儀貫目持相極りの馬積に候へば老人小供抔出候ては人數の違有之候間違者成者罷出候樣吟味可仕筈

一右人馬渡方の儀諸役所附御長持諸御荷物共に左の通りに致相渡候筈

木札表に

燈印	同裏
	受取人姓名 馬何匹 人足何人

右木札一枚づゝ若山より銘々へ相渡遣申候筈

右人馬繼所へ吟味役二人代小人目附一人順々に罷越相勤申候筈

但木札に各人馬數並受取人姓名幅面に背留印形取改濟次第夫々人馬相渡候筈

其節人馬の支無之樣に先觸の積り揃へ置大庄屋肝煎申合せ宜敷樣仕組置可申候且又人足廣之有之所を見立候

御通り筋へ樵無之樣に片付置手都合能可仕事

但人足渡し所一ヶ所にても手支は二ヶ所三ヶ所にても分け支配可仕事

右木札の儀證文同前用

一御荷物並御供中人足無賃にて相渡置追て若山評定所より取集在中へ相渡候筈

一道中にて若病人其外不時に人足入用有之節は吟味の上在方出張役所より人馬割方宛の切手出し候筈

右切手を以て人足出候儀木札同樣の事

一若山より用意宿駕籠二十挺持送りに致差出候乘人有之は籠に乘人無之節は持送りに致し駕一挺に付人足一人持ちの筈

人馬割役人より吟味の上追々賃錢下渡しの筈

寅十月

一熊野へ被爲成候に付別紙の通り夫々不洩樣相通可被申候　以上

十月十七日　　高木兵左衛門

兩熊野郡奉行
御代官宛

御宿所毎夜八ツ時より
御出陣時計を聞き庄屋肝煎拍木にて打通り時觸致候筈
一所々横渡御船數物の儀新莚一枚用意事
一御宿所若地震津浪又は火事等の節御退道の儀大庄屋並村役人兼て相心得居候樣可被申付事
一御泊夜に入り候節松明用意事
一御道筋にて三間柄の御道具構候竹木枝柴仗拂候筈尤も神木名木は其儘の筈
一道端に有之候王子は直に其所に何王子と書付立置可申候尤往還より入込候王子は何王子是より西とか東へ何町程と書付置可申候
一名所古蹟右同斷
一田邊新宮御藏下境札立候事
一本宮より新宮迄の内御乘船の節山手往還より御船見おろし候所々にても不差支所は相見致ても不苦事

一御宿所御道筋にて草鞋無差支樣可申付置且又野合又は茶屋にて煮賣等の儀唯今迄仕來候は勿論右之外にも御道筋に不構所にて右體の賣物致候ても不苦鳥目と引替て賣候はゞ
一御本陣にて上草履三十足雨天の節用意下駄十足程用意致候樣尤も當分の儀に付麁相成山下駄を用意の事
一御泊所御休所にて粗糠五六升ほどづゝ用意之事
一御泊所にて居風呂四五十程づゝ用意の事
一御參詣の所々御手水場手桶柄杓用意の事
右之通り
一御供中宿々にて御扶持方相渡桶りし水錢を以旅宿致候樣跡方に候へ共左樣にては在中失却も有之事に付一同旅籠相極り候間左の通可被申付候
一上下共香の物共一汁二菜の筈
一旅籠代　上壹匁八分　下壹匁五分
右之由にて賣食辨當の外一合づゝ搗り飯二つ宛相渡候筈
右之通り御供中一同へ相成候筈
一伊賀より以下は下の分に籠る筈
右之通相極候上は其餘に不足立候共諏割等□□□壹錢も相立申間敷候下ヶ紙に御供上下人數相定次第追て先觸出候筈
右旅籠にて相凌候樣汁菜定の通所々有合候分計りを用魚類無之所は何にても有合候野菜にて爲相書可申事各旅籠代の儀銘々直拂に致しては事騙不申所々の事に候へば相紛候儀も難計候付右割を以て一同に渡金の内にて引置候筈に付追て上下何人とも儀御宿所一ヶ所切に取組宿屋名前共可認出候員數の通り追て評定所より下ヶ渡候筈
右之通相成候付先遣て白米用意致候儀申通させ候得共其儀に不及由米用意無之者へは右不時御用宛米の内定の通り所相應の直段を以賣渡候樣可申付候
一御本陣着の筋凡左の通人數大樣積

御宿所	上三四十人前 下八九十人前	辨當箱詰一菜汁 朝夕兩度一汁二菜	
御休所	上二三十人前 下八九十人前	辨當箱詰一菜汁	
御小休所	下八九十人前	握り飯斗り	

右
御本陣より焚出候筈若御本陣狹く候か又は差支候所は御本陣近所より焚出し候筈
右焚出の仕樣は追て可申越候勿論人數相定次第是又跡より相通候筈
下ヶ紙に
御發駕前諸事爲差圖役人差出候筈に候間猶諸事申合候樣且又御本陣着旅籠代並惣旅籠代其外人足賃等見積左の通右役人金子持參致大庄屋渡り手形を以前銀相渡候筈に候間此段可被申付置候

金拾八兩	御宿所		
金八兩	御書所		

右之通借渡候筈に候間下々へ割付利付借用等曾て不致樣相心得可申候
一事騙不申所の儀に付渡し方諸事不差支樣役人付置候筈に候へば差圖の通り相守可申候たとへ少々無調法有之候共右役人より取成の儀は兼て申付可有事
右は享保年中
大惠院樣御成之節も稠敷御減少被仰出在中の失却小く樣段々御世話被爲遊候事に候へ共下々にて心得置兩熊野にて餘程の失却有之下々及難儀候樣子に付此度御成に付ては別て御念被爲入格別思召の品も有之事に候へば山内邊鄙其外雜踏の者共へは少しも此の度の失却として割出銀等無之樣被爲右之通旅籠極等入念被仰出候事に候
上にも御不自由被爲遊候思召の儀に候へば御供中の儀は勿論の事に候へ共村々にて心得置御通詞に不相紛相心得可被申候壹錢の事にても組割抔へ割付の儀は容易に不相成候間其旨大庄屋並村役人共へ兼て可被申付置事

寅十月廿一日

此度被爲成候に付辨當の儀此間通じ參候付有寫し帳一冊差遣候事に候其節右帳面に下ヶ紙にて參候筈の下ヶ紙取紛り候由此度若山より一通御宿所罷越候由にて別紙一通都合三通差遣候早々順逸可被致候　以上

十一月朔日　　池内柳左衛門

原半之右衛門殿

浦　儀左衛門殿
中西　理左衛門殿

本文の通一同辨當持參に付ては御畫所御小休所の儀御本陣の外は茶汁用意の筈尤も茶代として上下共一人前鳥目貳錢づゝ家主へ請求候筈に候其旨可被申付候右之通の趣心得置不申樣入念可被申付候
此度熊野へ被爲成候付御宿所御用別紙名前の役人追て出立罷越候筈に候間御泊御休所詰の大庄屋初村役人共揃相待罷在右御宿割役人へ申談諸事御差支無之樣取計可申大庄屋共へ可被申付候

十　月　　高木兵左衛門

池内柳左衛門殿
富田元左衛門殿
數見角右衛門殿
岡　孫太夫殿

尙々御宿割下宿の儀先達心得罷在候通の家に間數等相調帳面に取組置右御宿所役人へ差圖受候樣是又可被申付候　以上

鹽路新左衛門
御勘定奉行同代　井邊甚八

熊野路の儀御道筋漁場諸稼等も有之所にて人家も相應に宜敷相見ゆ候事に候へ共御道筋の外は至て山内邊鄙の村々多何れも平日の稼も少く中には近年類續同樣の村拓も折には有之事にて右之通に付此度御成にて諸失却無之樣下々迄て難儀にも不及候樣上にも御不自由被爲遊候思召にて別て仰出の趣も有之候へば御供の面々は勿論末々に至る迄諸事御不自由に有之段は兼て心得可罷在事に候享保年中
大惠院樣御成の節も嚴敷御減少被遊候事に候へ共諸事事馴不申堀所の儀故諸失却等存の外多有之事に候へば此度の儀右之通り聯て被仰出の趣も有之其上熊野邊の儀先年よりも難儀も彌增有之事に候へば別て細難に取計せ山内邊鄙の者共迄て難儀に不及樣且又上にも御安心被遊候樣銘々申合せ假りにも暫ヶ間敷儀は相省き人足遣方並無據調物等にても心を付け宿々臥具合物の儀も所有合に任せ諸事不都合成儀一同兼て相心得可申候右之趣家來小者へも主人より可申含事
別帳之通御通詞出候付寫差越候御通詞の御趣細難成ろ御通詞にも有之候間諸事心得違等無之樣在々寄合等致可申聞候別て御宿所御休所御小休所在々村役人宿々御通詞の御趣能々相守可被申候
猶近々御宿割役人中も參候由田並浦へは懸成頭立申付間數等家々相調べ帳面に取組置可被申候追て御宿割役人中へ差出御差圖を受け申筈に候其旨相心得可被申候猶又別帳の通りの御通詞の御趣至極難有被仰出奉恐入候御儀に候間得と致承知可被申候依て申遣候　以上

霜月三日　　浦儀左衛門

田並　有田　二部　二色
闇野川　串本　上野迄
右浦村庄屋中

尙々差急候御通詞に候間無滯早々順達可被申候尤上野浦より別帳二ッ印を以て江田迄戻し可被申候相滯候ては御差支へ相成候付分て可申通候

此の節御成に付諸御用狀在々にて少も無滯村運び致候樣各より小前末々迄可被申付候若相滯候ては此節は御大切成御用筋に付申譯不相濟候間諸事御差支に不相成樣可被申付候明て爲心得申遣候　以上

十一月八日　　浦儀左衛門

江田より上野迄
右村々庄屋中

一鮪　二本
一赤鼻　十二本　都合魚數十四本
此の持人足十二人

右は御成御用着當浦より四番組近露村迄村繼を以持屆候樣に大庄屋元より被仰付明十三日巳の刻に當浦より送出申候尤御急ぎ御用筋に候間晝夜不限刻付を以持屆候筈に御座候間右人足御用意可被成候依て人足先觸被仰付の通り當浦より指出申候其御浦村無滯御順達可被成候　以上

十一月十二日　　深美嘉左衛門

江田組出雲浦庄屋　傳兵衛
出雲浦より上瀧見老津夫より小河内村大付小付柿垣内市鹿野瀧夫より四番組近露村迄順々
右之間村繼
庄屋衆中

尙々本文御用着請取渡し入念無滯刻付を以晝夜御持屆させ可致成候

殿樣昨十三日和歌山御發輿御延引被仰出候段御別紙の通申來候各爲心得申遣候　以上

十一月十四日　　深美嘉左衛門

二部より上野迄
右村々庄屋中

尙々地士帶刀人へも本文の趣可被申通候且又浦儀左衛門方四番組へ出張に付歸役迄の御成御用筋相勤候樣被仰付候浦者より申通候事に候

殿樣今日和歌山御發輿の儀御延引被仰出候旨御勘定奉行衆より申來候御日限被仰出次第可申越樣申來候明て申遣候　以上

十一月十三日　　池内柳左衛門

殿樣御發輿御日限御別紙の通り仰來候付各爲心得右寫差遣候間御書面の趣相心得諸事取計被可申候　以上

深美嘉左衛門

尚々地士帶刀人申へも各御日限可被申入候

二部　二色　闇野川　串本　出雲　上野迄

右浦村庄屋中

熊野へ御成に付來る十九日六ツ時御供揃にて御發駕被遊候筈にて御勘定奉行衆より申來候依て申遣候　以上

十一月十六日　池内柳左衛門

浦儀左衛門方より別紙の通り申來候右は其浦へ御宿所御休所御小休所又は御駕立場等夫々しつらい等彌爲冥加餘々又は其所にて致候儀に被存御役所へも右之趣被申遣候儀に候へは右之筋一紙に書附差出候樣申來り候付別紙寫し申遣候押て申付候儀にては曾て無之趣に候間其旨御心得彌爲冥加致候儀に候や此狀着次第夫々可申出候左候へば拙者より儀左衛門方へ通達可申候　以上

十一月十九日　深美嘉左衛門

二色　串本　上野迄

尚々木文の趣其の浦々の儀は先達て如何樣に申遣し候哉承知不致候へ共一體の儀に付申進候事に候何分早々書狀又は口上にて成共御申越候樣書附にても及申間敷候

一先達て組内御宿所御休所御小休所御駕立場疊或は御駕立場少々のしつらい致候筋見老津浦並高尾傳右衛門方より彌爲冥加致候儀と存其段郡方へも一寸申上候所私方より一紙に

差出候樣仰聞候間彌右承知の儀に候へ共押付の心得にても無之哉右所々餘々か又右所々村役人の内意の内急々御呼寄御尋被成下樣願上候

一周參見組四番抔は地士帶刀人或は百姓の内にて道造り人工爲冥加夫々願出候由御座候間右之段一寸爲御心得申上候

浦儀左衛門

深見嘉左衛門樣

別紙の通上口申聞より願逃に付右寫し差遣候間書面之趣各能相心得可被申候依て申遣候　以上

十一月廿二日　大庄屋許

闇の川　串本　上野　二部　二色

有田　田並　江田　田子　和深

里の浦　江住　見老津

右之間庄屋中

尚々少も無滯早々願逃點書より戻し可被申候

御齋所御荷物並評定所役人御用狹箱一荷御先へ罷越候筈に候間人足差支無之樣取計置可被申候尤も御先へ罷越候人數宿等の儀指支無之樣取計可被申候依て早々申遣候　以上

十一月十八日　評定所

海士郡より有田日高熊野田邊新宮領

右夫々體所

大庄屋中

一御勝所向御用箱持人足　一人

右之通可被取計候

外に宿駕　一挺　是は全用意候間心得居候樣可被取計候

一御宿所にて御本陣へ一日御先へ御齋所役人九人各前夜より入込候間支度用意可有之候

一宿所にて評定所へ評定役人五人各前夜より入込候間右同斷

一御小人宿割御用に御小人兩人づゝ御宿所にて前夜に兩人づゝ支度用意

右之通り夫々無滯取計可被申候　以上

十一月十八日

此度熊野へ就御成御乘船所々別紙の通船用意致罷在候樣取計可有之候依て申遣候　以上

在方役所

御供御行列立並御用にて何方共乘組筋赤印一番より七十番迄

外に御召船二艘

船數　七十九艘　外に三十艘全用意

是は坂井浦より渦崎迄奥熊野加太より三木里迄

口熊野二色袋

右之外

淺黃印一番より四十七番迄

此の船數四十七艘　外に二十艘程用意

赤　印

合百七十六艘

淺黃印

是は本宮より新宮迄川長ヶ那智勝浦より大地迄

右之通寄船等取計可被申候

大庄屋中　右御船役所

此度熊野へ被爲成別紙の通人馬割方御用に罷越候筈に候間諸事差支無之樣取計可有之候尤明十八日夜九ツ時頃出立橋本揃の筈湯淺より二組に分ち一組は道越御先へ罷越人馬繼立等の儀取計候筈に候間其趣相心得罷在候樣と存候明て申遣候

十一月十七日　在方役所

橋本より奥熊野長嶋迄

御宿所御休所庄屋中

前田理左衛門　成川半之右衛門

幸田□□左衛門　岩橋半之右衛門

二階堂友七

右之通

以上

此度被爲成候に付人馬用意之儀右は先達て御先見分の節惣高にて六百人と申付有之候右は彌六百人用意可被申付候尤右六百人の内月代等致候者も込無之候馬荷な人足に直し候筋も右同斷込有之候外に先達て宿々にて駕十四挺人足共用意可被申付候左候ては惣高にて六百三十人程に相成り候間其趣な以夫

々可被申候　以上

霜月十七日　　評定所

海士有田　日高　田邊　口熊野　四番

木宮　新宮　長嶋夫より周參見迄

夫々庄屋中

覺

一馬荷　十駄程

右田邊迄の間馬荷にて勝手宜敷所は馬に附させ若又馬荷却て難儀之所は人足にて持送り候樣

寅十一月十七日　　評定所

橋木より田邊迄の間勝手次第可被申合候　以上

右之通

御別紙兩通の通仰來候付差遣候間夫々相心得居可被申候依て兩通共寫し差遣候　以上

霜月廿一日　　大庄屋許

別紙兩通申通候樣にと被爲仰出候樣仰來候に付申通候　以上

十一月十七日　　辻村三郎右衛門

小出與惣右衛門

鈴木庄藏殿

眞砂幸右衛門殿

同　　類次郎殿

玉置次郎太夫殿

御齋所人　田中平助

柳川文八

和田小左衛門

御賄所向　下役人五人

評定所書役　平岩幸左衛門

關村新藏

御賄人　小谷又兵衛

右は番組にて渦淺御宿所請の筈夫より南部近邊一宿づゝ御先へ追越候筈

御齋所人　山本數右衛門

曲谷佐七

谷村藤左衛門

御賄人　高浦加藏

評定所書役　杉山半左衛門

石井政八

御賄所向　下役人五人

右二番組にて小松原御宿請候筈夫より本宮に一宿づゝ御先へ追越候筈

評定所書役　品川次左衛門

笹野甚右衛門

右御休所請毎朝御先へ出立御畫所騷拔候筈

御齋所人組頭　松本久右衛門

御齋所人　北村源左衛門

評定所書役代　玉置伊右衛門

三宅宮太夫

右御番所請毎朝御先へ出立の筈

右之通尤追越の筋は支度所難相定候に付何れにても茶屋百姓屋にても差懸り有合支度致當人印形の札差置候筈追て右札を以御勘定に爲相立候筈に候間右之段往還筋へ相心得させ置候樣能々用意には不及筈出來合の麥飯にても相清可申事尤も可成丈けは極りの所にて支度致候筈

此度熊野へ被爲成候付御宿御畫曳御小休等評定所諸用請筋御齋所筋追越振等在々へ相心得させ可被申候

御本陣にて支度被下候筋は夫々評定所より札出し御用部屋吟味役より又夫々支度人へ右札相渡引替に支度相渡させ候筈追て右札を以て御勘定爲相立候事に候間組々杖突共焚出し所へ附置右札受取支度候樣尤可成丈けは大庄屋共附居評定所役人へ及談取計可申旨猶又杖突人少々にても差出し候はゞ右場所不洩樣功者成者差出させ候樣可被取計候

十一月十五日

各樣御目見場所の儀左の通りの由申來候付爲御心得夫々寫し回進致候間其の節に至り其の所へ御出張御目見被成候樣致度奉存候明て早々如斯に御座候

十一月廿二日　　深美嘉左衛門

潮水崎入口新道にて

上野道見所　潮崎利右衛門

同　加番　潮崎藤藏

同　加番　潮崎十左衛門

二色村入口にて

當所御小休帶刀人　森庄左衛門

有田浦入口にて

當所御小休地士　深美嘉左衛門

田並浦入口にて

當所御宿帶刀人　田中萬藏

田並浦濱にて

江田浦地士　浦儀八郎

地士嘉左衛門倅　深美嘉兵衛

串本浦帶刀人　塚越平太夫

田子浦帶刀人　高尾傳右衛門

江住浦庄屋　四郎左衛門

大鎌村庄屋　惣兵衛

二部村　百姓　權十郎

江住入口御休　百姓　嘉太夫

右之通

御宿所御休御小休所御駕立場疊表幣障子張幣等の儀別紙の通相達せられ候由に付其浦村爲心得寫し差遣候間書面の趣當人

へも御心得させ置可被成候　以上

十一月二十二日　深美嘉左衛門

上野より串本二部二色有田田並

田子和深江住見老津迄

右浦村庄屋中

尙々上野より串本二色夫より見老津迄順々早々相廻し可被申候

乍恐口上

此度被爲成付當組の内御宿所御休所御小休所御本陣被仰付候家々御座候間疊の表替等家主共爲冥加仕度願出申候且又御駕立場へ日覆苫葺等仕度是又願出申候に付右夫々左に申上候

一御小休所　串本浦　家主　甚兵衛

右御座の間疊の表替障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一御休所　上野浦　家主　藤原内記

右御座の間疊表替並障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一袋港　御渡海御乘船主　浦儀左衛門

右御召船少々日覆苫葺に仕り木綿幕打候樣爲冥加仕度奉存候

一御小休所　袋　家主　彝庄左衛門

右御座の間疊表替並障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一御小休所　有田浦　家主　深美嘉左衛門

右御座の間疊表替並障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一御宿所　田並浦　家主　田中萬藏

右御座の間疊の表替並御渡殿疊其外障子張替等冥加度願出申候

一御駕立場　田子浦濱

右御駕立場へ同所帶刀人高尾傳右衛門爲冥加疊數苫葺にて日覆同樣に仕度願出申候

一御小休所　和深浦　家主　喜入

右御座の間疊表替並障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一御休所　江住浦　家主　嘉太夫

右御座の間疊表替並障子張替等家主共爲冥加仕度願出申候

一御駕立場　見老津浦　長井坂の内

右御駕立場田子浦御駕立場同樣三疊數苫葺日覆爲冥加仕度見老津浦より願出申候

右之通家主共等爲冥加仕度段願出申候に付夫々御聽申上候最早出來立候由に御座候明て書附差上申候　以上

寅十一月

江田組大庄屋　浦儀左衛門

池内柳左衛門樣

富田元左衛門樣

別紙の通申來候付夫々寫し差遣候間少も無滯順逸可有之候尤御宿所にて御入用の山おこ荷縄屏風雨覆等用意致置候樣取計可被申候伏て申遣候　以上

十一月二十三日　大庄屋許

尙々右廻狀早々順逸點濟より早々此方へ戻し可被申候左候へば上浦々ゟ被相廻し可被申候明て急ぎ申入候

先達て評定所より相通候一日御先へ追越御藩所御用物持人足用意可有之候夫に付右人足の内へ山おこ十本並荷縄十荷分用意可被取計尤御當日の節も右同樣に用意可有之候前後合山おこ二十本荷縄二十荷分右之通にて無滯早く順逸可有之候

十一月十九日　御組出張　評定所　以上

日高兩熊野田邊領

新宮領夫々庄屋共

木文御藩所御用物若雨天に候はゞ桐油八ッ程用意可被申付候尤右は葛籠程の箱二ッさし持と爲致候筈に候間駕籠桐油手島蓙か新敷苫類其の外何れにても用意可被取計候　以上

一殿樣御欝鬱好く今夕渇淺村へ被爲入候間一同恐悦仕候御事に御座候夫に付御本陣其外下宿とも御勝廻りの儀少くても馳走ヶ間敷儀取計無之樣可仕旨被申聞候に付得其意申候先達て一同承知の事に候へ共今夕別て被仰聞候儀に付此段申遣候　以上

十一月十九日子刻　飯澤平左衛門

湯川喜惣兵衛殿

酒井次郎左衛門殿

中村善次兵衛殿

別紙の通只今渇淺組より相屆候付差遣候先刻頭書ゟ以て申遣候筋南部組へ御通可被成候

一御勝搗の儀三十人前切手紙御搗の分計引替勝出し候筈端の赤き紙上黃色成筋下と相心得候樣御評定所より被申聞候

一御畫所御本陣にて御畫食被成候筈屏風にて夫々仕切候故麁相成屏風數々御取寄候樣右之通夫々御取計可被成候　以上

十一月二十日辰上刻　湯川喜惣兵衛

龍田□□左衛門

中村

瀨戸宛

一御小休所支度筋段々御通詞も有之事に候付何等用意等致有之間敷候へ共弼相紛不申樣尤人數も相減じかさめし筋十五人前提めし三十五用意致候樣御申付可被成候依て申遣候　以上

十一月二十日　品川次右衛門

崔野甚左衛門

御成御用筋の儀に付各々へ申談品有之候間此の狀着次第明四

ツ時迄拙者宅へ無間違御出可被成候明て早々如此御座候
十一月廿四日　以上
深美嘉左衛門

殿様益々御機嫌好昨二十日小松原御本陣へ被爲入候御儀一同恐悦仕候儀に有之候間各々爲心得申越候諸事各々無油斷取計可有之候尤深美嘉左衛門方より可相通候へ共爲念申遣候萬端各手抜無之樣申合せ尚又大庄屋元へも罷出候嘉左衛門方より諸事聞合可被申候爾明晩近郷村へ被爲入候儀に付此の方も甚取込候へ共島渡申遣候　以上
十一月二十三日　浦儀左衛門
見老津より上野迄

別紙の通申來候付夫々用意可被致候依て寫し差遣候　以上
十一月廿六日　深美嘉左衛門
二色串本上野迄
右庄屋中

別紙之通御宿御休御小休御駕立場等の所々にて用意致置候樣申出候間其段可相心得候　以上
十一月廿二日　御成評定所
田邊より新宮領口熊野奥熊野日高有田海士郡迄早々順達可有之候
竹　三十本　但三寸四寸廻り

但竹無之候はゞ寸頃同斷の小丸太にて
縄　十把
土俵　八俵　是は御小休所にて用意
右之通り夫々無滯用意可有之候
十一月廿二日

御別紙の通仰來候付右寫し差越候御書面の御趣能々被相心得末々迄不洩樣相通可被申候尤男女共少も無禮等の儀無之樣大切成儀に候間能々入念可被申付候依て申遣候　以上
十一月　浦儀左衛門
見老津より順次田並迄夫より田並上
吐生有田夫より闘野川迄順能同所より串本出雲上野迄

此度熊野へ被爲成候御道筋にて百姓男女相見ゑ罷出候儀差留不申行儀能拜見仕候樣別紙の通御勘定奉行衆被申聞候由名草郡中間中より申越候付右寫し一通差遣候各組下在々へ相觸可申候
十一月　池内柳左衛門
大庄屋宛

此度熊野へ被爲成候御道筋御目通り筋へ罷出候人面は先達て逢し有之事に候其外相見に罷出候間百姓男女老少差留不申差出候樣尤も通行の節行儀能相見仕候樣拙者共心得相觸候筈御勘定奉行衆御内沙汰に付御道筋村々へ相通候筈に御座候依て申遣候　以上
十一月　名草郡奉行
有田日高
熊野郡奉行宛

御別紙の通仰來候付右寫し差越候間御書面の趣相心得可被申候明て申遣候　以上
見老津より順々橋杭夫より　浦儀左衛門
串本上野迄

別紙の通御勘定奉行衆より申參候付右寫し一通差遣候各組下の御道筋村役人共へ可被相通候明て如此候　以上
十一月　池内柳左衛門
大庄屋宛

此度熊野へ被爲成候付諸役人且御供の面々□は有之間敷候へ共若心得違末々のもの等調物代不拂少の品にても所望致候者有之候ても堅與へ申間敷候諸役人等縛方行屆候樣此段在々へ相心得させ可被申候尤右之趣此度罷越候諸役人且御供中へも相觸させ候事に候
十一月　丹羽傳四郎
有田日高名草熊野宛

一三ツ印書狀二通　古座組大庄屋衆より
江田組大庄屋衆へ
右は殿樣今日直に歸御被爲成候に付三ツ印を以て古座組より申來候付直に有田へ持送り申候各々樣爲御心得申進候
十一月廿八日　橋杭庄屋　文蔵
政次郎殿
喜右衛門殿

御宿割役人衆今日實頃古座浦へ御越候筈只今先觸參り候左樣御心得可被成候尤御宿御見分の樣樣により明日御組へ被相越候哉又は明後日に相成可申哉其段相知次第先觸出し可申候間左樣御心得可被成候　以上
十一月廿八日卯上刻　中四　理左衛門
浦儀左衛門殿
尚々御道筋村々爲承知廻狀體にて申入候て御座候付本紙は二色へ持送り寫しにて差遣申進候

一人足　二人　狹箱持
有は御宿割役人衆明二十九日朝八ツ時古座浦出立被相越候間村々右人足差支無之樣用意相待可被申候
十一月廿八日戌中刻　中四　理左衛門
古座より闘の野川串本上野田並迄

右の間傳馬繼庄屋中

尙々串木浦へ申越候本文の趣上野へ寫し其浦にて取計致し
此先觸は先々へ順途可有之候

一明二十九日晝食上野浦にてせんじ茶用意可有之候
一田並浦にて御宿用意可有之候

殿樣御儀御機樣替りにて水の木より歸御可被爲遊御座候に付
來月三日田並浦へ御入可被遊御座候付諸事無油斷取計急々出
來立候樣出精可被申付候則飛脚差遣申候少々にても手拔無之
樣夜通しにても取計可被申候依て申遣候　以上

十一月廿八日　　浦　儀　左　衛　門
江田より上野迄
右村々庄屋中

一船の儀浦々用意
一着の儀橋杭串木にて無油斷用意
一夜具の儀夫々田並浦へ持付け可被申候
一御道筋無油斷あしき所直し可被申候
一上野御晝食諸事無油斷取計可被申候
一串木上野兩瀧筋より漁船加子入込有之候はゞ早々在所へ戻
し可被申候明て右申遣候　以上

御前御召船の積り土俵五十俵其浦にて人足出し搭へ可被申
候尤繩俵な積入れ今日袋へ船相廻し有之候間明日出來候樣
取計可被申候

一薄緑二色村へ相渡可被申候

十一月廿九日　　浦　儀　左　衛　門
政　次　郎　殿

殿樣御儀翌朝日古座浦御止宿明後二日田並浦御止宿之筈に候
間其旨相心得諸事少も無油斷可被取計候何分火急之被爲成候
へば少も手拔無之樣可被取計候此段廻狀を以て相通候へ共御
休所の儀に候へば分て申通じ候　以上

十一月廿九日　　大　庄　屋　許
上野浦庄屋
喜右衛門殿
串木浦庄屋
政　次　郎　殿

其浦々用意有之候着額此狀參着次第今晩夜通しにも田並浦へ
持屆可被申候尤左の通無間違持參可被申候依て急々申遣候
以上

十一月廿九日　　浦　儀　左　衛　門
串木浦庄屋
政　次　郎　殿
出雲浦庄屋
傳　兵　衛　殿

一鰹　三十本　　串　木　浦
一鮪　三　本　　出　雲　浦

外に赤鼻等有之候はゞ相調持送可被申候
追啓
串木浦へ申入候別紙之通に候へば今朝の通しの趣用意に不
及候其旨相心得可被申候且又夜前申通有之候料理人其浦へ
は十七人通し有之候へ共猟又相調べ不殘田並へ罷出候樣可
被取計候且又其外御用に間に合候者有之候はゞ御調べ可被
指出候

廿　九　日

其村々へ申付有之候料理人割符人數の通田並浦へ今日中に罷
出可被申候延引候ては大に差支可申候間急々可被取計候明て
申遣候　以上

十一月廿九日未上刻　　大　庄　屋　許
有田より下筋順々庄屋中

段々申通有之候提灯蠟燭相添田並浦へ持屆させ可被申候延引
候ては差支可申候間此狀着次第同所へ相廻し可被申候依て申
遣候

十一月廿九日　　大　庄　屋　許

殿樣今廿九日那智山御止宿明朔日古座浦御止宿の筈に候間其
旨相心得可被申候右之通りに候へば明後二日田並浦御着座の
筈に候間諸事無油斷可被取計候尤も人足の儀二十人一組に致
宰領一人づゝ相添夫々人足名前人別帳相認め持參可被申候何
分火急に相成候儀に候へば各少も手拔無之樣取計可申候依て
急々申遣候　以上

十一月廿九日　　大　庄　屋　許
追て申入候

其の浦村夜具枕其外田並浦へ相廻し可申筋夫々無間違今日中
に相廻可被申候

先途て申通有之候湯桶の儀其浦々有丈ヶ相調べ明日中田並浦
へ持參可有之候延引しても差支に相成可申候依て申遣候
以上

十一月廿九日　　大　庄　屋　許

其浦々に多く有之候犬の儀此節狩集め繫ぎ置御道筋へ徘徊不
致樣取計可被申候尤飼犬の儀は夫々主者共へ繫ぎ置て候樣何
分御通りの節犬出し不申樣取計可被申候依て申遣候　以上

十一月廿九日

尙々先途て段々申通有之候御道筋墓所筋取除候儀と存候へ
共尙爲念申入候間取計不致儀も有之候はゞ急々取除け可申
付候

殿樣今晩戌申刻古座浦御本陣へ被爲入候御由唯今申參候其心
得にて諸事用意可有之候

閏十一月朔日　　浦　儀　左　衛　門

其村々人足未不參御用甚差支候間此狀着次第宰領人足共早々

罷越候樣取計可有之候依て此段急々申遣候　以上

閏十一月二日　　大庄屋　許

殿樣御道中益々御機嫌能去る七日九ツ時御歸城被爲成候旨仰來候間右之段末々迄不洩樣相通し可被申候依て申遣候　以上

閏十一月十八日　　浦儀左衛門

田並より上野迄

右之間庄屋中

當浦御小休所其兵衛は袴にて大見崎迄罷出御立の節も入口濱にて御見送り仕候

寛政十一年未四月

大殿樣被爲成に付御用廻狀控

御別紙之通仰來候付寫差越候御書面の御趣可被相心得候右は去る申年の振合を以道橋縛等丈夫に致諸事跡々之通入念急々可被取計候尤も地士帶刀人中ゟは各々より心得可被申通候依て急々二ツ印を以て申遣候　以上

四月廿三日子中刻　　浦儀左衛門

江田田並有田二部二色閣の川串本

出雲上野迄

右浦村庄屋中

一筋奉申入候

大殿樣明廿二日より大樣日數廿日餘三十日程の御日積にて奥熊野邊へ爲御歩行被爲成候筈に候間諸事跡々遣在ゟ被爲成候節の趣を以御差支無之樣御下屋敷御用人中より申來候間諸事跡々之趣を以御差支無之樣取計可被申候依て申越候草々謹言

四月廿日　　三宅兵右衛門　印

澤源六郎殿

大殿樣被爲成之御樣樣夜前仰來候御通詞の御日積りにては火急之御件に付田並有田串本上野にて先白米一石程づゝ用意取計置被申候跡方の振合にて左の通り竹松明用意可有之候其外諸事は跡々の振合にて可被心得居候依て申遣候　以上

四月廿四日　　浦儀左衛門

江田より上野迄

庄屋中

一松明　三十把　江田浦　一松明　四十把　田並浦

一同　三十把　田並上村　一同　二十把　吐生村

一同　三十把　有田浦　一同　三十把　二部村

一同　三十把　二色村　一同　三十把　閣の川村

右之通夫々用意取計置可被申候集所の儀は其時宜に應通達可及候田並上吐生兩村は勿寄へ出し置候方と存候

追て相通候御成樣樣之儀付在々にて夜具枕等相調置火急之節御泊所ゟ積廻し候方何時にても差支不申樣取計置可被申候且又人足之儀は銘々燒飯持參候て可出樣兼て申聞置候樣草鞋等の儀も在毎にて用意有之候勝枕或は疊等の儀は其勿寄により取集候樣是又不被相心得居候村役人始め人足等無禮々間敷儀是無樣長髮抔にて罷出不申樣可被申付候兼て承知之事には存候へ共此段も心得に申通候諸事御模樣等追々可及通達候以上

四月廿五日辰刻　　浦儀左衛門

田並より上野迄

右庄屋中

尙々勿寄奥村方へは夫々可被申入候

道橋の儀は追々出來之儀と存候

追て申越候提灯蠟燭相調へ急々員數可被申出候蠟燭之儀は先店方へ申附外實等相止させ何程有是との員數可被申出候以上

尙々本文の儀は何れにても無遲滯急々相調取計可有之候

大殿樣被爲成に付御通行の節は御道筋在々左之通堅不相成候其段不洩樣可被申付候尤一昨廿六日夕北鹽屋御止宿之御由申來候末申邊路とも大邊路とも相成不申候へ共大邊路へ御通行候へば最早明日にも周參見見老津迄も御成之御儀雜計候間諸事相通候儀に候へば相調置否哉可被申出候明て申遣候　以上

四月廿六日卯上刻　　浦儀左衛門

尙々田並より直々有田へ可遣候猶刻限附を以相廻し可被申候

一御通行筋火之元用心第一の事

一御通行之節家々にて煙上げ間敷事

一子供にても泣せ申間敷事

一御道筋にて上手ゟ立候儀は勿論□□候ても下手に居可申事

一人足長髮にて出不申樣鉢卷仕間敷候事

一少々にても無禮々間敷儀爲致申間敷事

其外在中物每靜に可致事

右之通り可被申付候　以上

大殿樣被爲成に付陸人足左之通可申付用意可有之候諸所之儀は追て相廻候間其節燒飯等支度爲致御止宿所へ宰領人差添罷出候樣取計置可被申候依て二ツ印を以急々申遣候　以上

四月廿六日卯刻　　浦儀左衛門

江田より上野迄

右浦村庄屋中

一人足	四十人	田並浦	一人足	三十人	有田浦
一同	二十人	二部村	一同	十五人	二色村
一同	三十人	閣野川村	一同	四十人	串本浦
一同	三十人	上野浦	一同	二十人	出雲浦

右之通

此度被爲成に付其浦村にて其所に應じ實體成者五人三人づゝ村役人代申付急々書附を以可被申出候

一料理物相調書附可被差出候

一提灯一村切に相調へ是又書附可被差出候尤被爲成之御儀明日の程も難計候間急々相調書附を以て可被申出候猶又追て御宿所相通候間諸事持屬候物之儀宰領人差添相廻し請取役

へ特と相渡可申筈若入用無之物右宰領人に受取穫戻り又は外に預置候か致候樣豫て宰領人に可被申付候別に急々申遣候　以上

四月廿六日卯刻　　浦儀左衛門

江田より上野迄右の間

浦村庄屋中

一料理物之儀鰍千大根千瓢昆布山芋氷豆腐並椎茸氷こんにやく其外何にても料理に相成可申筋相調書附を以急々可申出候

此度大殿樣被爲成に付其浦々にて夜具蒲團枕左之通用意可有之候尤御泊所相知れ次第船にて積廻し可被申候追て申遣候節御差支に相成不申樣急々取計置可被申候依て申遣候　以上

四月廿六日卯刻　　浦儀左衛門

田並より有田串本上野迄

一夜具　十五　枕　六十
一蒲團　百四十　料理人　十人　串木浦
一夜具　十五　枕　四十
一蒲團　百二十　料理人　八人　有田浦
一蒲團　六十　枕　三十
一料理人　十人　田並浦
一蒲團　十　枕　二十　上野浦

右之通急々用意致置候樣取計可被申候也

此度被爲成之御儀に付諸色調物田並に申出候所味噌無之段申出候又有田浦にも無之由其御浦にて味噌一樽御用立被成候別て申遣候　以上

四月廿六日

政次郎殿　　帳書代　儀左衛門

大殿樣被爲成に付御通の節袋浦渡船之儀去る申年被爲成候節之振合を以船水主共用意可被申付候依て二ツ印を以申越候急々取計置可被申付候　以上

四月廿六日卯刻　　浦儀左衛門

串木浦庄屋

政次郎殿

尙々申年御渡海の儀に付三十五樽加子百九十人と有之候其浦に控可申有之候間右體見計を以取計可有之候也

太地水主共當浦々へ罷越候付此節被爲成に付御用加子不足にて御指支に相成候間明廿七日迄戻り候樣通じ吳候樣にと太地伊十郎方より申來候間其浦々へ太地之者屬有之候はゞ明日中に戻し可被申候依て右申遣候　以上

四月廿六日申刻　　浦儀左衛門

江田田並有田串木出雲上野

右浦村庄屋中

大殿樣御儀夜前南部御止宿に付今日は御樓樣次第にて中邊路御通行に候得ば高野村近邊にても可有之御座か大邊路御通行に候得ば安居周參見の內にても可有御座か何分近被爲成に付爲心得申遣候諸事油斷なく行屬候樣取計置可被申候依て急々申遣候　以上

四月廿六日午刻　　浦儀左衛門

見老津より御道筋上野迄

右村々庄屋中

尙々拙者儀今日周參見迄罷越詰申候江田大庄屋帳書代相詰させ候間御用筋飛却を以江田へ向可申出候本文の趣地士帶刀人中に通達可有是候也

此度被爲成之御儀夜前南部御止宿被爲遊候へば大邊路中邊路共未相知不申若大邊路御通行に御座候得ば今晩は安居中邊路に候へば高原御止宿被爲遊候御儀と奉存候段周參見組より申來候由只今當組大庄屋來見老津より御申越候若大邊路御通行にて安居御止宿に御座候へば明日は當組に御成被爲遊候御儀と存候夫に付段々相通候通早々相調明晩御止宿所に差出し可被申候依て急々二ツ印を以申遣候　以上

四月廿六日申上刻　　浦儀左衛門

江田より下筋灘邊通上野迄

右浦村庄屋中

尙々少も無滯急々順達致候諸色急々御調置明晩御差支に不相成樣取計是有可く候

大殿樣御儀今晩芝三栖之內御止宿之筈夫より彌中邊路御通行に付只今摩氏より申來候付爲心得申遣候地士帶刀人中に通達可有之候依て申遣候　以上

四月廿六日未刻　　浦儀左衛門

周參見より和深川夫より上野迄

右村々庄屋中

御成に付蒲團之儀先達割賦相通候處右割賦之內何程外相調不申段申出候浦村も有之未だ如何程相調候との儀不申出浦是有候然處先達之割賦にては不足の由申來候其浦村にて家別に相調書附を以可被申出候尤宜敷筋計にては餘計相調不申儀と存候間相應成の筋も相調可被申候右等村役人申勘辨を以家別に相調宜敷筋何程相應成筋何程相調候との儀今明日中書附を以可被申出候

一蚊帳用意致候樣申來候に是も右區樣家別に相調宜敷筋何程相應成筋何程づゝ相調候との儀是又書附可被差出候

御道筋石地藏取除て石塔なも伏させ前方御成之節の通り樂抔にて隱し置候樣にとの儀申來り候間各見廻り右之通取計可被申候

一御通行筋杉皮屋根は闕板等直させ石抔もあぶなき儀無之樣取計可有之候

依て右申遣候間何事も急々取計可被申候　以上

一幕燭臺有之浦村は是又取調本文夜具蚊帳と一所に書附可被

差出候
四月廿八日巳上刻　　大庄屋許
江田田並有田二部二色
闇の川串本出雲上野迄
右浦村庄屋中
尙々少も無滯早々順達致度急々取計前段相調の品書附可被
差出候

此度被爲成に付御先御見分として御用人衆御越に相成候筈に
候御泊所之儀不相分候得共明日は當組ゟ御移可被成日積に候
間村の人足等申付置有是可候尤御先觸は可參候得共此節之儀
に付申越候間御差支に不相成樣人足用意相待可被申候依て急
々二ッ印を以申遣候　以上
四月廿八日巳下刻　　浦儀左衛門
江田より上野迄
右浦村庄屋中

一後藤幸十郎樣　御上下　八人
一田中　勘八樣　御上下　七人
右之通に候未人足員數之儀は不相分候得共大樣御差支に相成
不申樣取計置可被申候別て申遣候拙者儀周參見より夜通し四
番組近露御止宿所迄罷越候積に候處周參見より四番ゟ夜通は
水出之節に付夜中川越等難相成由勿論里數も有之所詮御止宿
所之御間にも逢不申儀に付今日周參見より引取申候此度被爲

成に付諸事手抜等無之樣村役人代被申合御差支に不相成樣勘
辨可有之候道橋之儀は先達て相通候通り最早出來候儀と相察
申候來月四日五日頃には當組御通行可有之御座御儀と存候依
て爲心得申遣候　以上
四月廿八日　　浦儀左衛門
江田より上野迄
右庄屋中

此度被爲成に付竹鑓用意可致樣にと申來候間其浦にて竹鑓相
調兩樣共員數如何程相調へ候との儀書附を以可被申出候明て
急々二ッ印を以申遣候　以上
四月廿八日　　浦儀左衛門
串本浦庄屋
政次郎殿

御成に付御入用宛諸色先達て相通じ有之候右之外に香の物其
村浦相調へ何程づゝ相調候との儀書付を以急々可被申出候猶
又被爲成之御儀も最早日間も無之候先達て相通じ有之候品も
無油斷急々取計可有之候依て又々二ッ印を以申遣候　以上
四月廿八日　　大庄屋許
江田より串本出雲上野
右浦村庄屋中

大殿樣御通行の御節高き山々村里海島或は田畑高畝等能存候

者三四人撰定御案内に出候樣仰出候由にて下組々より申來候
間村々にて三四人能存候者心得させ置可被申候尤村領分里數
家數等も右同斷心得させ置候樣急々取計置可被申候御道筋に
有之候小宮抔之儀御尋も有之可奉存候間是又相心得させ置可
被申候依て申遣候　以上
五月二日　　浦儀左衛門
田並より上野迄
右庄屋中

大殿樣今日は新宮ゟ御下り被爲遊候との御儀に候依て爲心得
申遣候　以上
五月二日　　大庄屋許
田並より上野迄
村纏庄屋中

大殿樣彌昨日新宮へ爲被入に付御人數も先達て之樣とは變
餘程御多勢之御由に付夜具枕其外先達て申出候趣にて甚だ差
支候間夜具等持と相調出し可被申候其外竹筵類も所々にて餘
程御入用の由にて今日其旨相心得可被申候猶又道橋出來急候
村方も有是候間急々仕直置可被申候別て爲心得申遣候猶追々
可申越候何分夜具等有丈調出其段急々可申出候　以上
五月四日　　浦儀左衛門
江田より上野迄
右之間庄屋中

尙々田並浦へ分て申遣候夜具特と調出し否急々可被申出
候

大殿樣大邊路通り被爲成候付先達より道橋造立の儀追々申通
候に付屆入念取計候儀と存候下組々丈夫に入念仕立有之候
趣に付當組に限り不行屆之場所有之候ては甚だ以如何之事に
候條頭書之者へも申付麁末無之樣取計可被申候川々橋之儀は
別て入念丈夫に取計可有之候
一田並有田串本上野通之儀は先達よりも申入候通り御泊御畫
御小休之積りに可相成候間諸事頭立申申合せ差支の品無之
樣大樣家々掃除或は障子等見苦敷筋は氣を付置き候樣取計
有之可候
一御人數も三百人餘も有之趣に候左候得ば先達申出候夜具枕
にては不足差支に相成候間猶特と吟味調出し可被申候
一白米之儀は右に准差支不申樣用意取計可有之候
一人足夜具其外は夫々宰領之者特と入念申付置間違之品無之
樣取計置可被申候
一御泊御畫御小休右所々にて入用の品左之通りに候間可被相
心得候

一四歩板	一二間	一大竹	二十本
一縄	二三束	一小竹	二三束
一手桶	七個	一戸	五本 御泊に二ッ
一莚	二百枚	一火鉢	御畫に一ッ三尺四方

一炭　是は和深浦より相廻させ可申候
一綱引　五六十　一燭斎
一金盥　一ッ　一小なる　二三十本
一ふるひかわき土　一石五斗　一俵　三俵
一薪　是は田並にても二百貫目用立の筈

右に不拘相調村方は用立の筈

右之通候間用意取計可有之候所々にて用意致置候はでは差支に候間田並有田串本上野各浦には相心得居可被申付候右手桶は田並にて用意の筈に候依て爲心得手配急々申遣候　以上

五月四日　江田より上野迄　浦儀左衛門

右浦村庄屋中

（付ケ紙に）
追て本文之節大庄屋役所用意致置候樣尤可成儀に候はゞ廣き家用意致置候樣
夜具方受拂之儀串本塚腰平太夫方外に一兩人差添取計有之樣致度候天氣次第夜具等串本浦へ向け積廻させ候筈申通候間其節特と請取方入念取計是有樣にと存候

先達て相通じ候其浦村村役人代の者名前書付急々可被指出是又何等不申出其差支候に付又々相通じ候右名前書付急々可被差出候依て二ッ印を以申遣候　以上

五月七日未下刻

串本へ出張　浦儀左衛門

串本間の川二部二色有田田並
江田田子和深里の浦江住見老津迄

右浦々庄屋中

尙々少も無滯早々順達本文書付急々可被差出候且又人足等宰領は一村一人にて能候是又名前書付急々可被指出候尙又御止所は人足召連罷越候節大宰領人別紙名前之者は引渡可被申候是又先達て相通候事に候へは爲念申遣候　以上

串本浦　平太夫
人足大宰領　田並浦　源四郎
和深浦　友右衛門

右之通

覺

一人足　一人

右は御作事方御荷物明早朝當所出立致候間村々人足無差支樣御用意可致候　以上

五月七日　古座浦庄屋　傳兵衛

村々庄屋中

御供頭衆　中村與治右衛門樣　同斷　柴田利久右衛門樣
御肝煎奥番　大島　伴六樣　奥番　久保久太郎樣
奥番　金原長之丞樣　奥番　和田彌三右衛門樣

御徒士目附　津山角五郎樣　御徒士目附　馬場三郎兵衛樣
御徒士目附　森　嘉兵衛樣　御徒士目附　木村　丹藏樣
伊賀衆　岩崎　牛藏樣　坊主衆　毛利　善□樣
坊主衆　堀内　善柳樣

御殿樣御儀申遣候通今朝御社參相濟那智山にて御畫爲被遊夫より妙法山に御越遊され濱之宮御止宿にて明朝同所より御乘船被遊水之本に渡御被爲遊候由御通詞に付浦々漁船不殘濱之宮に相詰申候未同所御本陣に着御の御樣子は不申來候得共角右衛門初詰合大庄屋中同所に罷越申候猶御模樣相知次第追々可申遣候

猶本文の趣御役所に御申上可被下候恐惶謹言

五月九日亥刻　太地伴十郎

中西孫左衛門樣

尙々明日御渡海之儀木の本迄と被仰出候上にて夫より下筋御越とも又は引返し被逝候とも其後相分り不申候明日覺右衛門歸宅可仕候得ば委細の御模樣可申遣候　以上

大殿樣長島より御引返しの御節鯨船鯉船用意致候樣にと太地角右衛門に仰付に付別紙の通り角右衛門方より申來候由にて中西孫左衛門方より申越候付別紙寫差越候尤當組浦の儀は鯨船之なき事に付組内漁船用意致筈に候猶夜具其外道具等積廻し候事に付別紙船數にては差支可申と存候間浦々漁船筋不殘加子十二人づゝ諸道具調へ飯米薪等用意可被申付候追て御用の節可申越候間差支無之樣取計置可被申候依て急々二ッ印を以申遣候　以上

五月十五日午刻　浦儀左衛門

田並有田串本出雲上野

右浦々庄屋中

尙々無滯早々順達可有之候且又本文船毎に浦組印建候筈に候間前廣より印竿等用意致可申候　以上

覺

一鯨船　十艘　内一艘　御召船　十六人乘
但家形切組屋根疊表之筈
一艘　御水先船
一漁船　四十八艘
内一艘　御召船　十二人乘
但家形切組屋根疊表之筈
外に一艘　用意船

右之通船割相定申候　以上

御成に付船用意之儀先達て相通候通り各能承知之事と存候夫付船の加子の儀其の浦々の者にて無是共乘組の儀に候得ば其際乘組之内にて一艘に付十二人宛之筈尤數物薄べり御座まくり三枚づゝ用意候樣可被申候且又加子共無禮ヶ間敷儀無之樣可被申付候旨順取共へ是又心得可被申付候尙又廻し方相通候

節大宰領着屆御役人衆御乗組又は御荷物等積入勝手〳〵に乗出し不申樣大宰領人差圖な請出船候樣是又得と可被申付候飯米薪等は先達て相通候通り船々用意有之儀と存候船々沖上の節毎日洗掃除入念臭み等無之樣取計可申旨被申付候依て爲心得申遣候　以上

五月十六日　　浦儀左衛門

江田田並有田串木出霊上野
右浦々庄屋中

大殿樣益々御機嫌能去る十三日木之本御止宿被爲遊候御儀下組々より申來候付爲心得申遣候尤十五日十六日之御止宿未相分り不申候依て早々申遣候　以上

五月十六日　　浦儀左衛門

田並より上野迄
右浦々庄屋中

諸御用狀村々にて少も相滞不申樣取計可被申候此節は御成に付明て御用筋差急候事に付傳馬所村繼所共片時も早く取計可被申付候依て申遣候

五月十七日　　大庄屋許

江田より串木迄
右之間庄屋中

一御召船一艘　　船頭水主十五人乗
但切組にて日覆屋根のこと

一御召替漁船一艘　用意　船頭水主十六人乗
右同斷

右は御召船遠く不相成樣取計候事

一御側船の事　　船頭水主十五人乗
但鯨船一艘

右御召船遠不相成樣但稽古船之心得尤御役人衆御成候事

一御水先鯨船一艘　　船頭水主十五人乗
是も決て御役人衆御乗相成候儀と存候間と相分不申候

一鯨船七艘　　船頭水主十五人乗
一漁船四十七艘

右は御供御人數並御荷物

鯨船合　十艘
漁船合　四十八艘
御用意船　四艘
惣船合　六十二艘也

右船々に番付か又はいろはにてか致し一艘に八人乗船頭誰水主名前書致し置用意候こと尚又御役人衆へ出候帳面一冊村役人所持右船頭水主御呼出し有之候間其節一艘切づゝ乗組人數擬出候筈但御銀被下候節右取計候筈

一御荷物並御役名船割は御船手代役人衆より半紙に相認船々に御渡被下候由との事但右書付船印之如く立置御乗船より御着船後御差圖有之候迄立置夫より船頭御呼出し候節右印差上候樣相心得させ候事

一惣船々に蓮二枚上數二枚但無之候得ば筈にても不苦

一宿引の者は船場へ相揃相待申へき事
外に四五人もこざかしきもの付置候事

右御宿割御役人衆御入込被成候て宿割相濟候はゞ右名前書宿割頭衆差圖の通銘々出迎御案内可申事

一村役人並其村々物事能覺候者御案内候事萬御念入諸事御尋之趣に候間村役人兩人にては御間に合不申候間大勢用意致兼て申合せ置候事

一御下宿所間數並亭主名前書付入口に張置候事
但間數の儀は何疊敷幾間〳〵と書付表口へ張置候事

（附箋に）
御召船並御召替船繪圖
但し御屋形網の間其船の巾長さにより屋形相應に先ヶ樣の寸尺表より艫迄長四尺三寸棟高さ四尺六寸軒高さ四尺三寸六分艫下の巾四尺四寸同屋根軒口より軒口迄巾五尺三寸表口巾有之第屋根は手鳥か又は其他色々樣宜敷
但鯨船の寸法

大殿樣御召船御召替船御召脇船御水先船其外船用意の儀に付申四孫左衛門方より鯨方長左衛門を太地角左衛門方へ聞合せに差遣候由の處別紙之通寫し取り候由に申來候付右爲心得寫差遣候別紙之振合を以取計可被申候依て急々申遣候　以上

五月十七日　　浦儀左衛門

有田浦庄屋　常右衛門殿
串木浦庄屋　政次郎殿

尚々天氣快晴に相成候付兩浦共御船揃手行宜敷儀と相察申候、

別紙の趣にては漁船筋御召御召替御召脇御水先之外は水主八人乗に有之候得共漁船は何れも間艫立六挺櫓に致候得ば八人にては如何と存候先達ての割合一艘十二人乗組候方にも存候古座組とは違ひ當組之儀は組繼に候得ば里數も有之事に付先達て割合取置追て人少にても御差支にて相成御儀に候得ば其節に至り如何樣とも取計出來可申事に候依て爲心得申遣候　以上

御水陣入用筋

一杉小なる	四十五本	一八九寸廻竹	二十本
一四五寸廻竹	百三四十本	一莚	四百枚
一戸	五六本	一障子	五六本
一薄べり	廿枚計り	一綱引	十筋計り
一ふるひ土	一石	一はしき砂	七斗程
一綱内二把小なは	五束	一粗糠	二石計
一鎌	四五丁	一掛矢	二三丁
一枕	二十本	一唐鍬	二三丁
一手桶三ッ四ッ	新き儀	一杓	四五本
一燭臺二十本内竹	三本鐵殘にても不苦	一手燭十計	竹にても不苦
一屏風大小	十二双	一鐵盥	二ッ

一水はん切　三ッ四ッ　一魚はん切　二ッ
一大和風呂　五ッ六ッ　一五とく　五ッ六ッ
一火鉢　五ッ計　一炭　四五俵
一薪　五六貫目　但堅馬目組二割方　一白米　二石五斗計

大殿様被爲成に付御人數之内御先に御歸被成候役人衆も有之事に候處人數五人の證文にて人足二人戻り又は三人之證文にて一人の外入不申儀に付過人足は駄賃相渡し候様にとの事にて夫々相渡候由にて候右は證文寫し置候様にと被申候ても夫にては御勘定に相立不申儀に候間其役人衆より人足遣ひ手形受取置候様取計可被申候左も無之候ては過人足賃錢渡候分は村々の損に相成候間右之趣申述遣ひ手形請取置候様に可被致候候て爲心得早々申遣候　以上

五月二十一日　串木出張所役所
串木より見老津迄
右之間浦村庄屋中

此節大殿様御通行之御節垣越に覗き或は無禮ヶ間敷儀無之様右は各々能承知之事に候得爲尙念申遣候

五月二十日　浦儀左衛門
橋杭より串木二部二色夫より
見老津迄
右之庄屋中

二十二日　串木浦　御止宿　御木陣　森　甚兵衛
二十三日　串木浦木陣より濱通り被爲成木之宮に參詣夫より大ぼら濱迄被爲成御引返し水崎明神に參詣にて上野浦喜平次にて御晝夫より溟之浦に被爲成同所より大島迄御乘船夫より姫村へ御渡海閑の川通り二色袋に被爲成　御止宿　御木陣　森　庄左衛門

二十四日　袋港にて御乘船之船割惣船數四十八艘

御先　同
御徒士目附船　同　御賄船
同　同　御賄方船　同　御賄船
同　御臺所船　同　御臺所船
同　御臺所船　同　御臺所船
同　奥御道具船　同　御小納戸船
御作事方船
御召船　御先船　大庄屋船　御小姓船
御小姓船　奥向船　御茶弁當船　御藥箱笥船
御鉄箱船　二番　御鉄箱船　御醫師　文之右衛門船　御臺所船
御草履箱持船御長刀持船　御駕船　御駕船
御徒士目附船　御合羽籠持船　御跡仕舞御臺所船
御臺所船　御臺所船　御臺所船
御賄船　御臺所船
御作事方船
御手水方船　御小納戸船　御小納戸船
御小納戸船　御小納戸船　御道具方船
御道具方船　御道具方船　御供頭衆船
御小姓合羽籠船　御小姓合羽籠船　御小姓合羽籠船
伊賀衆船

〃

同日串木上野より御小休和深浦迄御乘船夫より陸地見老津迄御歩行同所御晝夫より又々御乘船周參見浦　御止宿

御召替　善兵衛船　幸右衛門船　嘉平次船
彌平治船　平左衛門船　理右衛門船
與惣兵衛船　吉右衛門船　甚兵衛船
彦　七船　與惣入船　市太夫船
瓦　助船　長五郎船　半　藏船
勢　吉船

〃　十六艘

溟之浦より大島に御渡海の御節被下金

一銀　參拾九匁　善兵衛船
一銀　貳拾七匁　市太夫船
一銀　貳拾四匁　瓦　助船
一銀　拾六匁　吉右衛門船
一銀　貳拾四匁　彦　吉船

〃　五艘

串木浦池尻より御乘船被下金

一銀壹枚　錢五百文　嘉平治船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　與惣兵衛船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　甚兵衛船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　瓦　助船
一銀壹枚　錢五百拾六文　幸右衛門船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　半　藏船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　彌平治船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　彦　七船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　吉右衛門船
一金貳百疋　錢壹貫七百六拾文　市太夫船
一金貳百疋　錢壹貫七百五拾六文　平左衛門船

〃　十一艘

（鄕土誌編者曰、御宿割並に五月二十三日の御模様は第二編第一章第二節「藩主の巡遊」に載せてあるから茲には省略した）

大殿様と申は大眞入道様と奉唱候
今年より十二年以前水崎明神迄被爲成候右十二年間兩度御成被爲遊候
未五月二十三日
大殿様本之宮に御參詣之御節御供銀壹枚金百疋御供被爲遊候天明八年申正月二十九日御參詣の御節御供膏さし壹貫文御供被爲遊候
大殿様鵜野に兩度被爲成候御節
御木陣と御小休所と

當家兩度相勤申候誠に難有御事に付爲後代寫之置者也

天明八年申正月二十四日　（小山氏所藏）

大殿樣口熊野水崎迄御成に付覺

大殿樣口熊野水崎迄御成

但御上下百八九十人

正月二十五日夜四ツ半頃安居へ御着座同所御泊り

同二十六日四ツ頃同所御出立周參見御役所にて御晝休七つ頃御出立夜九ツ頃見老津へ御着座勘四郎宅居泊り

同二十七日見老津浦四ツ頃御出立和深浦五郎右衛門宅にて御晝休八ツ頃御出立

同二十八日夜四ツ頃江田津へ御着座浦儀八郎宅へ御泊り

同御晝休袋浦庄左衛門宅六ツ頃御出立

同二十九日上野浦へ四ツ半頃御着座嘉平次宅御泊り

夫より御歸殿

正月晦日上野浦四ツ半頃御出立串本平太夫宅にて御晝休七ツ半頃御出立此夜大風雨

同朔日有田浦大庄屋嘉左衛門宅に御泊り四ツ半頃御出立

同日和深浦御泊り

是は大水崎にて川越被遊がたく故

同二日和深川御泊り

同日御晝休周參見浦御晝休

三日日置浦御泊り

御晝休朝來歸村

四日富田芝御泊り同日御晝休湯崎浦三太夫宅同日晝頃同所御出立船にて南部迄御渡海御歸殿

安居村にて

御目見三人

小山八郎左衛門　安宅佐左衛門

小山段右衛門

右三人御本陣前御道筋にて御目見申候

申正月二十六日四ツ頃

郡奉行衆　小野太夫

御目附　小島彌左衛門

小山段右衛門儀小島彌左門殿へ付添安居村迄罷出候夫より水崎迄罷出候　御歸殿之節有田迄參り歸宅致候處牛三郎御呼出しに付又々直に出立三人づれにて湯崎迄まいり申候□□太夫殿へ御目に掛り御役所にて牛三郎へ被□□候

二月□日也

天明八年申正月晦日内裏炎燒京家數七八歩通り之大火前代未聞之大火にて御座候由

大殿樣御越先へ若山より御飛却參り候

宮樣御殿も燒失有し由承候

大正十三年八月二日印刷
大正十三年八月[illegible]日發行

編輯兼發行者　和歌山縣西牟婁郡串本町
有代表者　町長　田島嘉四郎

印刷者　和歌山市杉ノ馬場二丁目七番地　小池秀太郎

印刷所　和歌山市杉ノ馬場二丁目七番地　和歌山印刷株式會社

I/992

終